Tokai University

Architecture Yearbook 2019-2021

東海大建築ブック

東海大学工学部建築学科作品集 vol.41

004 新学部・新学科紹介 About the New School and New Department

006 建築都市学部新設にあたって：岩崎克也（学部長〈予定〉・教授）
008 新しい建築学科について：渡部 憲（学科長・教授）
010 新学部・学科の学びの分野、学びのスケジュール
012 Topics

7・8 semester

016 卒業設計 2019年度 Graduation Design, 2019

035 卒業生インタビュー：佐々木大樹（2019年度 TD賞受賞）

036 卒業設計 2020年度 Graduation Design, 2020

058 卒業生インタビュー：三尾圭祐（2020年度 TD賞受賞）

060 研究室紹介 01：岩崎克也（学部長〈予定〉・教授／計画系）
061 02：河内一泰（特任准教授／計画系）
062 03：野口直人（助教／計画系）
063 04：山﨑俊裕（教授／計画系）
064 05：十亀昭人（准教授／計画系）

5・6 semester

066 建築設計論1–2 2019年度 Architectural Design Theory and Practice 1-2, 2019

068 建築設計論2 プレ卒業設計「自分の興味を建築のかたちにする」
072 建築設計論1 第1課題「銀座パーク」
078 建築設計論1 第2課題「代官山スポーツ・カルチャーパーク」

084 研究室紹介 06：小沢朝江（教授／計画系）
085 07：渡邉研司（教授／計画系）
086 08：後藤 純（特任准教授／計画系）

6 semester

088 建築デザイン演習5 2020年度 Architectural Design 5, 2020

090 建築デザイン演習5 第1課題「銀座パーク」
097 建築デザイン演習5 第2課題「代官山スポーツ・カルチャーパーク」

104 学生インタビュー：渡邉優太（東京建築士会「住宅課題賞 2020」入賞）

3・4 semester

106 建築デザイン演習3-4 2019年度 Architectural Design 3-4, 2019

108 建築デザイン演習4 第1課題「シモキタ・スモールリノベーション」
113 建築デザイン演習4 第2課題「シモキタプレイス」
117 建築デザイン演習4 第3課題「動物とくらす家」
122 建築デザイン演習3 第1課題「非日常としてのTea House」
125 建築デザイン演習3 第2課題「部屋とリビングと隣」
130 建築デザイン演習3 第3課題「広く立体的であること」

135 教員インタビュー：稲益祐太（特任准教授／計画系）

4 semester

136 建築デザイン演習3　2020年度　Architectural Design 3, 2020

138 建築デザイン演習3 第1課題「部屋とリビングと隣」
143 建築デザイン演習3 第2課題「広く立体的であること」

148 研究室紹介 09：高橋 達（教授／環境設備系）
149 10：中野淳太（准教授／環境設備系）

150 教員インタビュー：山川 智（特任教授／環境設備系）
151 寄稿：岩田利枝（2021年退職教授／環境設備系）

1・2 semester

152 建築デザイン演習1-2　2019年度　Architectural Design 1-2, 2019

154 建築デザイン演習1-2「建築デザイン1-2で学ぶこと」
156 建築デザイン演習2 第1課題「陰影をとらえる」
159 建築デザイン演習2 第2課題「コドモノイス」
162 建築デザイン演習2 第3課題「空間の分節とかたち」
165 建築デザイン演習2 第4課題「価値の転換」
167 建築デザイン演習1 課題「小空間の設計」

171 寄稿：加藤仁美（2020年退職教授／計画系）

2 semester

172 建築デザイン演習1　2020年度　Architectural Design 1, 2020

174 建築デザイン演習1 課題「小空間の設計」

178 研究室紹介 11：諸岡繁洋（教授／構造系）
179 12：山本憲司（教授／構造系）
180 13：野村圭介（専任講師／構造系）
181 14：渡部 憲（学科長・教授／材料施工系）
182 15：横井 健（准教授／材料施工系）

184 OB・OGに聞く 建築男子と建築女子の仕事録　Message from Graduates

186 卒業生インタビュー：梅田善愛
188 卒業生インタビュー：小山 珠
189 卒業生インタビュー：横山綾子

195 近年の卒業設計・卒業論文・修士論文の学外受賞者
196 建築学科教員・非常勤講師一覧（2019〜2021年度）
197 歴代教員と建築学科の系譜
198 卒業後の進路
199 編集後記

About the Department

東海大学工学部建築学科

Department of Architecture, Tokai University

本学科は最前線で活躍する建築家を招いた少人数設計教育が特色です。優秀作品を集めた総合講評会を年2回開催し、海外建築研修旅行など国際性を得る機会もあり、多くの作品が国内外で賞を受賞しています。『東海大建築ブック』は、設計課題の優秀作品の紹介の他、学科トピックス・インタビュー・研究室紹介に加えて卒業後の進路も掲載しており、学科・進路案内としても活用ください。

The quality of our architectural design education is achieved by small-group classes with cutting-edge architects, as well as the biannual “Super Jury Program” and overseas study tours. In addition to the selected students’ works from the previous year, this book contains introductions to our department and laboratories, interviews, and career plans.

新たに誕生する建築都市学部に向けて

岩崎克也
Katsuya Iwasaki
［学部長〈予定〉・教授］

キャンパスで「新しい自分」に出会おう！

来年度より、建築学科は工学部から独立をして建築都市学部建築学科として誕生します。この新設学部は、これまでの建築学だけでなく関連する他の学問の幅広い分野の知識を取り込み、より広義な意味での建築学を理解し、課題解決能力を高めるために、建築計画・建築工学・地域デザインといった3つの専門性と技術をもつやわらか頭の人材を育てます。

建物のハードだけではないモノとコトのあらゆる視点から、私たちの暮らしが豊かで快適なデザインを実現する。このような「次の時代の建築」を学ぶ新たな学部です。

創発はアウトプットの可能性を広げる

建築や都市が世の中に果たす役割は非常に重要です。そして、この世界は人にかかわるすべてのことが関係してきます。責任が大きいからこそ面白いのです。原点に立ち、常に本質を求めていく。自分の考え方をどのように伝え、どのように共有していくか。ぜひ学んでほしいと思います。これからの時代は「人を巻き込んで、共有してアイデアをアウトプット」していく創発的な提案が求められます。優れたアウトプットが必要です。自分1人のアイデアだけでなく、人との協働によってアイデアが1+1が4にも10にもなる面白さを皆さんもいずれ体験することができると思います。これは社会に出てからの話だけでなく、皆さんも学生生活のなかで友だちとの会話のなかで発見したり、ひらめいたりすることもあるかと思います。

自ら動いてコミュニケーションを図る

建築を考えていくうえで、これからどんな人と出会えるかがとても重要です。皆さんも学生時代はもとより、社会に出てからも人との出会いを大切にしてください。人が人を磨いて磨かれていきます。私の学生時代を振り返っても授業だけではなく、先生との「インフォーマルな会話」は自分にとっては大きな支えとなりました。建築学科は現在18名の先生が皆さんと親密にコミュニケーションを取れる場所です。ここは、皆さんが成長をするための大切な場となると思っています。そのためには、ぜひ、自分自身が自ら進んで動くことで先生や友だちとコミュニケーションをとり、大学をそのトレーニングの場としてください。

優れた建築を食べて、自分の感性を磨く

私たちの体は食事を採ることでつくられています。これは、建築を学ぶこととも共通します。自分の目で優れた建築を観て学び、できれば、実際にその場所を訪れて空間を体験して感じることは自分自身の栄養となります。「建築を食べる」とはこういった意味を指します。空間を感じることができる感性は、たくさんの良いものを見ることで養われます。一方でインプットしたものを自分の中で吸収してアウトプットしていく必要があります。多くの優れた建築を食べ、吸収・消化することで自身の感性を磨き、次の新しい創造につなげてほしいと思います。

好きなことを長く続けられる力を養う

皆さんの先輩をはじめ、社会で活躍されている人たちで子育てと仕事を両立している先輩方はたくさんいます。これからの建築の世界は、男性はもちろん、今まで以上に女性が大きく活躍できる時代だと思います。たとえば、ご自身で設計事務所を立ち上げて子育てを行いながら立派に仕事をしている人たちや、企業に勤めたあと、会社を起業される方もいます。こういった意味でも建築は裾野が広く、好きなことを長く続けることができる領域だと思います。皆さんもできるだけ早く本気で自分の好きなことを見つけて、それを探求してみてください。きっと、「生涯付き合える素晴らしいもの」が見つけられると思います。

新学科開設にあたって

渡部 憲
Ken Watanabe
［学科長・教授］

まず、2019年度より掲げているスローガンを紹介します。「学生（OB・OGも含めて）・教職員、総活躍学科」です。どこかで聞いたようなスローガンですが、わかりやすく言うと、学科にかかわるすべての人間が、明るく元気に、胸を張って、誇りをもって活躍できる学科にしましょう（当然、これまでにも、大勢の学生、教職員の皆さんが活躍していますが、昨日より今日・今日より明日、前を向いて・より一層、元気な学科にしましょう）ということです。これは、私が学科長になって以来、ずっともち続けている気持ちです。

さて、建築学科は、2022年度より「建築都市学部建築学科」として、新たなスタートを切ります。新たな建築学科においては、技術の進歩、環境の変化、社会の変化を捉える幅広い視野と、建築学の幅の広い専門性を兼ね備えた「柔らかな技術者」の育成を目指しています。具体的には、修得すべき3つの専門力「建築計画」「建築工学」「地域デザイン」をカリキュラムの柱とし、文系・理系の枠に捉われず、社会・生活の「変化を捉える力」を備え、新しい視点をもって地域と社会の発展に継続的に寄与できる人材を養成します。そして、学生の皆さんの将来像として「高い専門性に加え多分野の知識を広範に併せもつ建築士・施工管理技術者」や「専門分野を極めた建築・景観計画コンサルタント、専門工事技術者、地域・都市マネジメントリーダー、建築学術研究者」を掲げています。
それを実現させるため、新たな建築学科のカリキュラムでは、3つの専門力「建築計画」「建築工学」「地域デザイン」（基礎）を2年次終

了までに修得できるようにしています（適切に単位を取得することにより、二級建築士受験資格を満たすことが可能）。また、3年次以降、個々の学生は自身の基軸を3コースのいずれかに定めることとなりますが、一級建築士受験資格を満たすために基軸コース以外の科目も履修できます。これにより、基軸1コースの専門力（発展）をより高めつつ、他2つの専門力（発展）も修得できるようにしています。さらに、工学系の専門知識・技術に加え、総合大学のメリットを活かして他学部の科目履修により、社会学・経済学・歴史学・環境科学などの幅広い視野を育成し、インターンシップなどの「実践スタディ」や卒業研究などの「ゼミナール」により、3つの専門力を基盤として“さまざまな分野との協働により問題解決に向けて実践していく力”を体得し、文系と理系の区別に捉われない幅広い専門性をもった人材を育成するためのカリキュラムが用意されています。

東海大学の建学の精神を基本として、歴代の学科主任（学科長）の先生方の考え方を大切にしながら、新たな建築学科としての歩みを進めます。決して、これまでの工学部建築学科学生の皆さんを置き去りにすることはありません。これまでの方針を引き継ぎつつ、工学部建築学科学生の皆さん、建築都市学部建築学科学生の皆さん全員で、同じ建築学科学生として新たな一歩を踏み出しましょうということです。新たな建築学科の始動を、楽しみにしていてください。

最後に、これも私が学科長になって以来、ずっと言い続けていることですが、大学ではさまざまなことにチャレンジしてください。「できないと思うから、やらない」「やったことがないから、やらない」「面倒だから、やらない」ではなく、「まず、やってみよう」の気持ちが大切です。皆さん一人一人が、大いなる可能性を秘めています。やらないうちに、可能性の芽を摘んでしまっては、本当にもったいない限りです。「学生（OB・OGも含めて）・教職員、総活躍学科」を目指し、皆さん、おおいに大学生活を楽しんでください。

学びの分野 Field of Architecture

建築学科で学べること

建築学は、設計、計画、歴史、構造、施工、材料、設備、環境などの分野から成り立っています。4年間を通じて、まずはさまざまな分野をまんべんなく学び、高学年へ進むにつれ自分の適性に応じた分野をより深く学んでゆきます。技術の進歩、環境の変化、社会の変化を捉える幅広い視野と、建築学の幅の広い専門性を兼ね備えた柔軟性に富んだ人材を育成します。

建築学の専門知識・技術に加え、総合大学のメリットを活かした他学部の科目履修により、社会学・経済学・歴史学・環境科学などの幅広い視野を獲得できます。

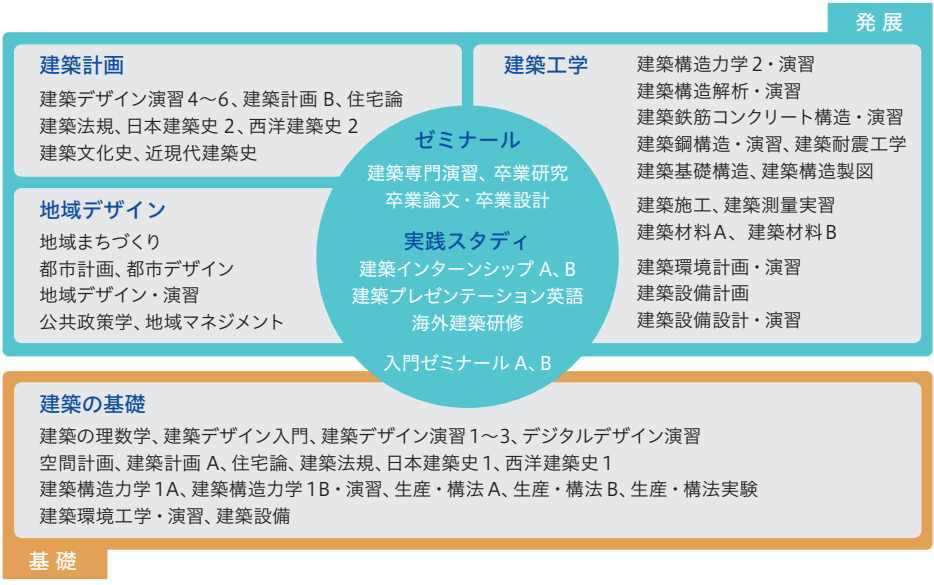
また、2022年度カリキュラム生より、「工学部 建築学科」から「建築都市学部 建築学科」へと変わります。学べる内容が大きく変わるわけではありませんが、「建築工学」「建築計画」「地域デザイン」をカリキュラムの柱とし、文理融合の視点に基づく専門性を身に付けたい学生を、高校までの文系・理系を問わずに募集します。

現役の建築家や専門家による実践的な講義

講義や演習を充実させるために、実学としての教育を行っています。専任の教員は、豊富な研究・教育経験をもっていますし、今も建築家としての仕事をしている者や、教員になる前に企業で実務経験を重ねてきた者も多数います。さらに、実際に各分野の第一線で活躍されている建築家や専門家の方々を非常勤講師として多数迎えています。

豊かな感性をもった人材を育成

1. 都市・建築を創るための幅広い専門知識と職業倫理を取得する
2. 空間創造のための3次元思考力と、CADやハンドワークによる表現力を身に付ける
3. 文系・理系・芸術系の垣根を越えて多様な分野を学ぶ
4. 多彩な演習科目を通じて、問題意識をもって学問に取り組む



学びのスケジュール Curriculum and Career

4年間で獲得できる力

1. 建物のかたちや構造・環境などの仕組みを理解する力
2. これからの住まいのあり方について考える力
3. 自分の考えを適切な言葉と視覚的表現で人に伝える力

●1年次　1〜2セメスター　入門的科目

語学や現代教養科目を修得するとともに、「建築デザイン入門」などで建築の入門的な知識を学びます。また、製図・造形などの設計演習、空間計画の初歩座学、建築構造の力学演習、建築材料や構法に関わる初歩座学など、専門分野の導入科目を幅広く体験します。

●2年次　3〜4セメスター　基礎的科目

建築の基礎を幅広く学び終え、その後、自分の指向する分野を選択し発展的に学び始める過渡期となる学年です。設計演習では、自主設計が活発に始まりますし、「生産・構法実験」などの実験科目もあります。また、建築計画、建築史、建築法規などの初歩座学、構造力学の応用演習が始まります。夏休みまたは冬休みを利用して、「海外建築研修」も開催されます。2年次までの科目をまんべんなく修得すれば、「二級建築士」の受験資格を得ることが可能な時間割モデルを組んでいます。

●3年次　5〜6セメスター　専門的科目

4年次の卒業論文や卒業設計の指向する分野をふまえながら、より専門的に発展した科目を学びます。夏休みや冬休みのインターンシップ体験を単位として認定する「建築研修」も開講されます。

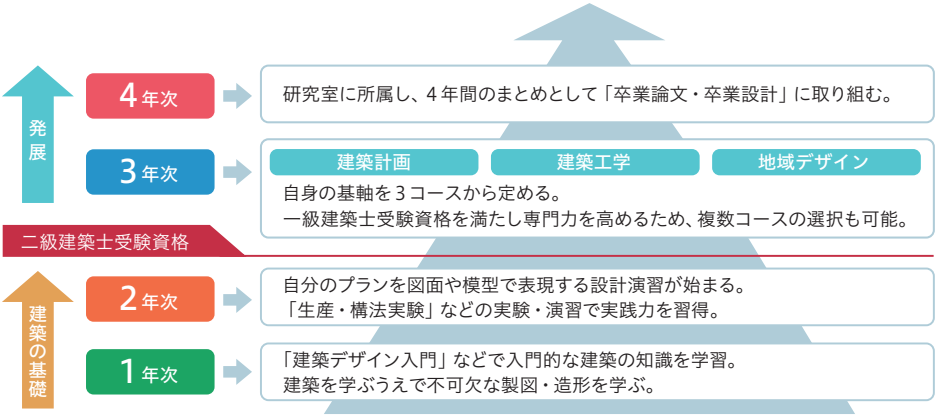
●4年次　7〜8セメスター　研究・制作

建築学を学んだ集大成として、研究室に所属して卒業研究に取り組み、「卒業論文・卒業設計」として成果をまとめて提出します。

就職・資格など

主な就職先は、ゼネコン、サブコン、住宅メーカーなどの建設業界です。製造業、不動産業や、各自治体役所などの公務員も人気です（卒業生の主な就職先はp.198を参照）。

指定科目を受講することで「二級建築士」や「木造建築士」の受験資格を取得でき、さらに「一級建築士」受験資格を得ることも可能です。また、学芸員課程を設け、資格を取得できる環境も整えています。



Topic

建築学への入り口として、楽しく湘南キャンパス建築巡り！

新入生研修会から入門ゼミナールへ

新入生研修会は、新入生が入学後に初めて参加するプログラムで、まちや建築に実際に触れて専門分野への関心をもつことを目的としています。2020年度はコロナ禍で新入生研修会は中止となりましたが、2021年度は湘南キャンパスの山田守建築ツアーを実施しました。

ガイダンスでの教員紹介後、10名程度のグループに分かれ、教員・大学院生の引率により湘南キャンパス内の山田守建築を巡り、写真撮影・スケッチをしながら建築を学ぶ気持ちを強くします。

建築学科では新入生を対象に授業や課題の取り組み方を学ぶ少人数形式ゼミ「入門ゼミナール」を開設しています。新入生研修会のグループはこのゼミと同様に、一緒に学ぶ仲間や教員との顔合わせを兼ねており、気軽に相談できるきっかけにもなっています。

入門ゼミ担当教員引率による湘南キャンパス建築ツアー（1号館前にて）。

Topic

初年度教育として多ジャンルの連続講演会を開催しました

連続講演会は、建築分野におけるさまざまな選択肢を学生にわかりやすく示すとともに、最先端の専門知識・情報を得ることを目的としたイベントで、建築学科同窓会の建築会と連携して実施されています。初年度教育の入門ゼミナールでは設計・計画・歴史系、設備・環境系、構造系、材料施工系と多岐にわたる建築学科の特色を活かし、各系から講師を選んでいます。4年次の卒業研究室志望分野の興味を拡げさせる狙いもあります。2020年度は設計系の明野岳司氏、 環境設備系の篠原奈緒子氏、構造系の小山珠氏、材料施工系の秀島民也氏の4講師、また2021年度は設計系の梅田善愛氏、環境・設備系の横山綾子氏、構造系の小山珠氏、材料施工系の武智耕太郎氏の4講師による講演会（遠隔・対面併用形式）をそれぞれ開催しました。

梅田善愛氏（竹中工務店）による講演会（2021年）。

Topic

ヨーロッパの都市・建築を巡る海外建築研修を実施しました

2019年8月19日～8月30日（10泊12日間）の日程で海外建築研修旅行を実施しました。今回は山﨑俊裕教授、中野淳太准教授の引率でヨーロッパ3カ国8都市を訪問しました。訪問都市はフランス（パリ）、オランダ（アムステルダム、ユトレヒト、ロッテルダム）、ドイツ（ベルリン、デッサウ、ヴァイマール、ハンブルグ）などで、訪問都市・建築のモダンデザインの源流と文化的背景、保存・再活用の状況を実体験として学びました。今回の研修は滞在型研修で、現場でのスケッチを通じて建築的な特徴を捉えることにも力点が置かれました。海外建築研修は毎年視察先を変えて企画される全学年対象の旅行（2019年度参加学生総勢45 名）で、学年を超えた絆を深める機会にもなっています。

オランダ・ユトレヒト市のシュレーダー邸（1924年、ヘリット・トーマス・リートフェルト設計、世界遺産）前にて。

Topic

地域連携事業への建築学科学生参加と計画・設計活動の実践

神奈川県住宅供給公社伊勢原団地の学生寮へのリノベーションプロジェクト

このプロジェクトは東海大学の地域連携事業の一環として実施されたものです。神奈川県住宅供給公社伊勢原団地12号棟を学生寮にリノベーションする計画・設計活動の実践として、建築学科学生有志4チーム、計11名が参加しました。コロナ禍で現地調査ができない状況のなか、学生たちはそれぞれ工夫しながら計画・設計提案をしました。2020年9月、遠隔オンラインでの最終審査・講評会が開催され、最優秀賞Aチーム（茂木涼介・幕内稜也・相沢悠斗）、優秀賞Bチーム（永渕光啓・酒井賢一・池田健太）、敢闘賞Cチーム（小山裕史・難波豪一・山田康太）が選ばれました。参加チームの各提案を受けて神奈川県住宅供給公社と納谷建築設計事務所で実施設計が進められ、2022年春の入居を目指して工事が始まっています。

最優秀賞を受賞したAチーム3名（左から茂木涼介さん・幕内稜也さん・相沢悠斗さん）。

Topic

日本建築学会優秀卒業論文賞を3年連続（2019、2020、2021年度）受賞しました

日本建築学会優秀卒業論文賞を、2019年、近藤美鈴さん（小沢朝江研究室）が「部屋用途と着座からみた畳敷きの使い分けと成立背景」で、山田弦太朗さん（伊藤喜彦研究室）が「マムルーク朝期カイロのムカルナスに対する計算幾何学的検討」でダブル受賞、また2020年、打越凛太朗さん（小沢朝江研究室）が「〈あばら家〉の美学―絵画史料の荒廃表現にみる建築観の変容―」で、吉川春奈さん（小沢朝江研究室）が「東京国立博物館表慶館の設計・建設過程と細部意匠の意味」でダブル受賞しました。さらに2021年、小山裕史さん（渡邉研司研究室）が「1900年パリ万博におけるコンコルド門のデザイン過程について」で受賞しました。日本建築学会優秀卒業論文賞は建築分野では最難関とされており、3年連続計5名の受賞は大変な快挙です。

日本建築学会優秀卒業論文賞受賞の小山裕史さん。

Topic

都市・まちづくりコンクールで小林正美賞を受賞しました

山田康太さん（野口直人研究室）の卒業設計「高円寺再反転―街の雑然性と規則性から創り出す高密度街区の再編計画」が、2021年3月開催の「第8回都市・まちづくりコンクール」において小林正美賞を受賞しました。本コンクールは都市・まちづくりの領域に取り組む学生の育成を目的としたもので、学生たちが生み出す景観や創造価値と作品に込められた熱意を評価し、他大学との交流や一般公開などにより、都市・まちづくりに対する理解・関心を深めることも意図しています。今回は課題として「響」が与えられ、この意味を幅広く捉える都市・建築・ランドスケープデザインの提案が求められました。審査は遠隔＋対面方式で実施され、山田さんの案はこのような条件に叶う、見事な提案として評価されました。

都市・まちづくりコンクール受賞の山田康太さん（左）と、審査の様子（右）。

Topic 構造工学シンポジウム若手優秀発表賞を受賞しました

王龍盛さん（大学院工学研究科2年：指導教員山本憲司教授）の「引張ブレースで補剛された格子シェルの座屈解析」の研究が、2021年4月にオンライン開催された第67回構造工学シンポジウム（建築部門）若手優秀発表賞を受賞しました。この賞は学生・若手技術者などの優れた発表を選考し、構造工学分野の活性化と若手による学会活動の奨励を目的としたものです。王さんは「今回の受賞が建築を目指す高校生に興味をもってもらえるきかっけになれば」と語っています。山本教授は「王さんは非常に熱心に研究に取り組み、シンポジウムでもわかりやすく説明したことが受賞につながったのでは。さらに研究を続け成果を出してほしい」と期待を寄せています。

構造工学シンポジウム若手優秀発表賞受賞の王龍盛さん（左）と指導教員の山本憲司教授（右）。

Topic 遠隔教育・研究活動の模索と実践
総合講評会、卒業論文・卒業設計発表会（遠隔方式）の開催

2020年度は、全世界そして日本全土が新型コロナウイルスの猛威にさらされ、東海大学建築学科でも新型コロナウイルス感染防止と教育・研究活動の早急な対応が迫られた年でした。2020年度春学期は入学式、ガイダンス、新入生研修会などのイベントがことごとく中止となり、すべての科目が遠隔教育（5月スタート）で行われることになりました。建築デザインなどの実習科目、複数の演習・実験科目の開講は秋学期に延期され、カリキュラムもかつて経験したことがない体制で運営されることになりました。建築デザイン科目は秋学期から遠隔＋対面方式で授業が始まり、恒例の総合講評会、卒業論文・卒業設計発表会は、ZoomやTeamsなどの遠隔会議システムをフル活用しながら、遠隔方式（教員は対面）で実施されました。

（左）ネクサスホールでの総合講評会Zoom配信（発表学生と教員は対面、一般学生は遠隔方式）。
（右）発表者と講評者が使用するマイクの消毒作業の様子。

Topic KD賞審査会（2019年度対面、2020年度遠隔オンライン方式）が開催されました

東海大学建築会では、毎年、学科審査とは別にOB・OG建築家、本学非常勤講師、過去の受賞者などが審査員となり、公開で卒業設計審査会を行っています。2019年度審査は対面ポスターセッション方式で実施され、審査員は彦根明氏、白子秀隆氏、伊藤州平氏、佐屋香織氏、増田果子氏の5名、司会は森昌樹氏により、佐々木大樹さん（KD最優秀賞）、星野唯さん（KD優秀賞）、前川凌さん・眞壁弦汰さん（KD奨励賞）、吉村和馬さん（KD特別賞）が選ばれました。一方、2020年度審査はコロナウイルス感染症対応のため遠隔オンライン方式で実施され、審査員は篠崎弘之氏、齋田武亨氏、武田清明氏、山口紗由氏、佐々木大樹氏の5名、司会は森昌樹氏、富永哲史氏により、大塚麻奈さん（KD最優秀賞）、木村岳さん（KD優秀賞）、近岡直さん・栄杏奈さん（KD奨励賞）が選ばれました。

KD賞審査会（2020年度遠隔オンライン方式）の風景（東海大学建築会HPより）。

誰もが取り組む学生生活の集大成

卒業研究・卒業設計

卒業研究は、全員が学部の集大成として環境・設備系、構造系、材料・施工系、計画系の各分野研究室に所属して取り組み、計画系では論文と設計のどちらかを選択します。卒業設計は計画系全教員の採点で上位30%がTD賞（最優秀学士設計賞）を競ってプレゼンテーションをします。優秀な設計は学科内で表彰され、日本建築学会全国卒業設計展示会、JIA神奈川卒業設計コンクールなどに出展し、これまで国際卒業設計賞Archiprix大賞・同PF賞、JIA神奈川卒業設計コンクール金賞・各賞など、国内外で高い評価を得ています。
2019年度は岩崎克也氏（日建設計・設計部門ダイレクター）、2020年度は建築家の中川エリカ氏（日本女子大学准教授）をゲスト審査員として迎え、TD賞および優秀学士設計賞4作品が選ばれました。またKD賞（建築学科同窓会・建築会授与）は最優秀賞・優秀賞・奨励賞・特別賞などが選ばれました。

【2019年度卒業設計受賞者】

■TD賞、JIA神奈川卒業設計コンクール審査員特別賞、近代建築『卒業制作2020』掲載
佐々木大樹「空間を食べ比べるように――小さな変化の連続が街をやわらかく繋げる」

■優秀学士設計賞
前川 凌「西戸部の笠――基壇のまちの拠点となる少量多品種的空間」（JIA卒業設計審査員特別賞、レモン展出展）
吉村和馬「新宿ケモノマチ――人の〈軌跡〉から生まれる街のかたち」
星野 唯「建築のアナログ化――街の痕跡を残す持続的更新手法」
島根大輝「太子堂まち保育――日常的に子どもがまち・人と繋がる居場所の提案」

■KD最優秀賞
佐々木大樹「空間を食べ比べるように――小さな変化の連続が街をやわらかく繋げる」

■KD優秀賞
星野 唯「建築のアナログ化――街の痕跡を残す持続的更新手法」

■KD奨励賞
真壁弦太「商転街――空間と機能が入り混じり生まれる新しい学びのかたち」
前川 凌「西戸部の笠――基壇のまちの拠点となる少量多品種的空間」

■KD特別賞
吉村和馬「新宿ケモノマチ――人の〈軌跡〉から生まれる街のかたち」

【2020年度卒業設計受賞者】

■TD賞、JIA神奈川卒業設計コンクール総合資格学院賞、近代建築『卒業制作2021』掲載
三尾圭祐「都市の〈非場所化〉――モルフェームを用いたこれからの渋谷商業空間の再構築」

■優秀学士設計賞
栄 杏奈「徳之島を筆す――行書の身体的作法で集落に脈を持たせる」（レモン展出展）
山田康太「高円寺再反転――街の雑然性と規則性から創り出す高密度街区の再編計画」
ニクソン・リン・ジュン・ユー「枠を跨ぎ街を繋げる居住――高密度なジョージタウンにおける新しい暮らし方の提案」
雨宮 巧「住宅街を歪ませる――日常の距離感をずらして生まれる新たなお出かけの形」

■KD最優秀賞
大塚麻奈「街を着崩す――ワンピースの構造を用いた文化創造拠点の提案」

■KD優秀賞
木村 岳「奇地形に淀む代官山――『痩せ尾根』から生まれる暮らしのかたち」

■KD奨励賞
栄 杏奈「徳之島を筆す――行書の身体的作法で集落に脈を持たせる」
近岡 直「袖や袂を利かせ、空間を広ぐ――和服的仕立ての法則を応用した空間設計」

7・8 semester

卒業設計 2019年度

Graduation Design, 2019

4年生になると半年間卒業研究を行い、残り半年で卒業論文または卒業設計として提出します。卒業設計を選択する学生は、自らテーマを決定し、敷地やプログラムのサーベイ(調査)を行って、卒業設計作品を提出します。ゲスト審査員を迎えて行われる卒業設計発表会は、建築学科最大のイベントのひとつです。

Graduation Design, a whole academic year dedicated to architectural research and design, culminates with the final presentation in front of the jury.

小さな活動の連続が人々の活動をつくる

空間を食べ比べるように

小さな変化の連続が街をやわらかく繋げる

佐々木大樹

Hiroki Sasaki

［野口直人研究室］

空間の食べ比べとは、一つの機能のなかで空間を細分し環境に小さな変化を与えることで微妙に異なる活動の変化を起こすことと定義した。敷地の形状から人々が通り抜けたり溜まる空間のグリッドを設計し、外側の建物のスケールと活動を内部に連続させ、徐々に変化させることで街の裏と表をやわらかくつなげる。

担当教員コメント

「繊細な分割の集積は気持ちいい」という個人的思想を、空間デザインによって他者に共感させた。全体性のない空間の集積は、所有や管理、支配という言葉から離れ、人と空間の関係を密なものにする。（野口直人）

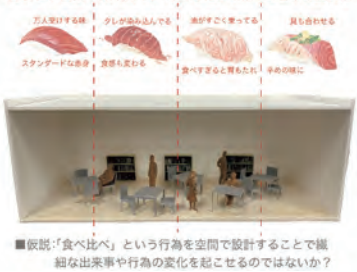
TD賞（最優秀学士設計賞）、KD最優秀賞、日本建築学会優秀卒業設計展出展、『卒業制作2020』（近代建築）掲載、JIA神奈川卒業設計コンクール審査員特別賞 日野賞、赤れんが卒業設計展出展（全国26選）

少人数の活動と大人数の活動を混在させる

内と外が細かく切り替わる

■空間の食べ比べ＝微細な環境の違いから生まれる活動の変化

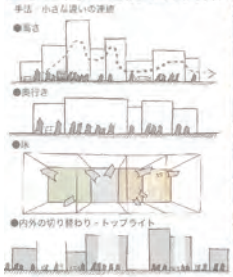
同じものを細かく分類し、その小さな違いを楽しむ日本の食文化



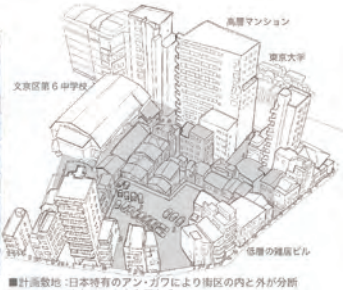
■仮説:「食べ比べ」という行為を空間で設計することで繊細な出来事や行為の変化を起こせるのではないか？

■検証：小さな環境の違いによる活動の変化

■小空間の連続した関係で公共建築を設計する

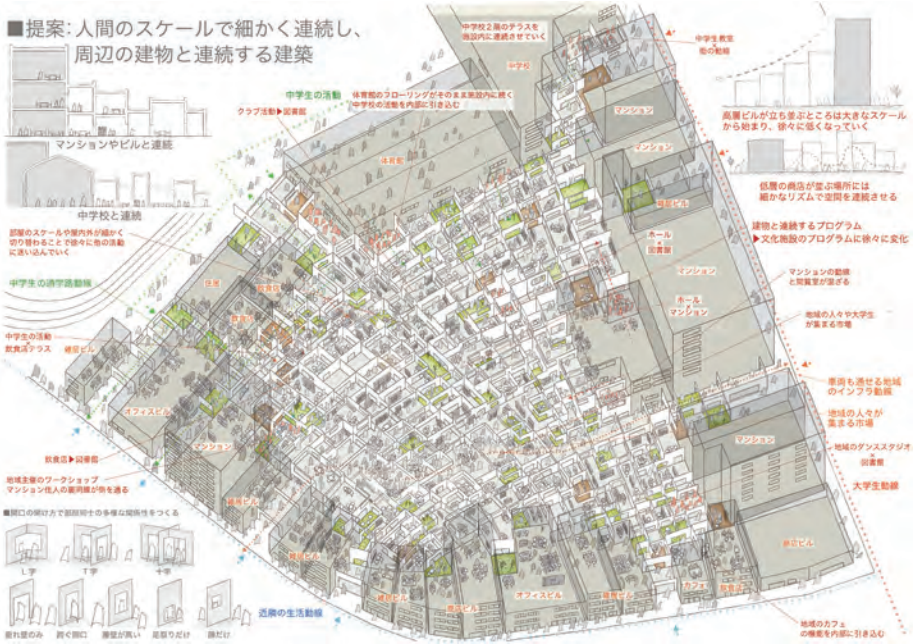


■一つの部屋で成立していた機能を細かく分け、小さな違いを与えていくことで多彩な行為や活動の変化を生む空間を設計する。



■計画敷地：日本特有のアン・ガワにより街区の内と外が分断されている文京区向丘

■提案:人間のスケールで細かく連続し、周辺の建物と連続する建築



西戸部の丘に笠のように屋根が架かる

西戸部の笠

基壇のまちの拠点となる少量多品種的空間

優秀学士設計賞、KD奨励賞、JIA神奈川卒業設計コンクール審査員特別賞 金田賞、レモン画翠学生設計優秀作品展出展、赤レンガ卒業設計展2020一次審査通過(85選)

前川 凌

Ryo Maekawa

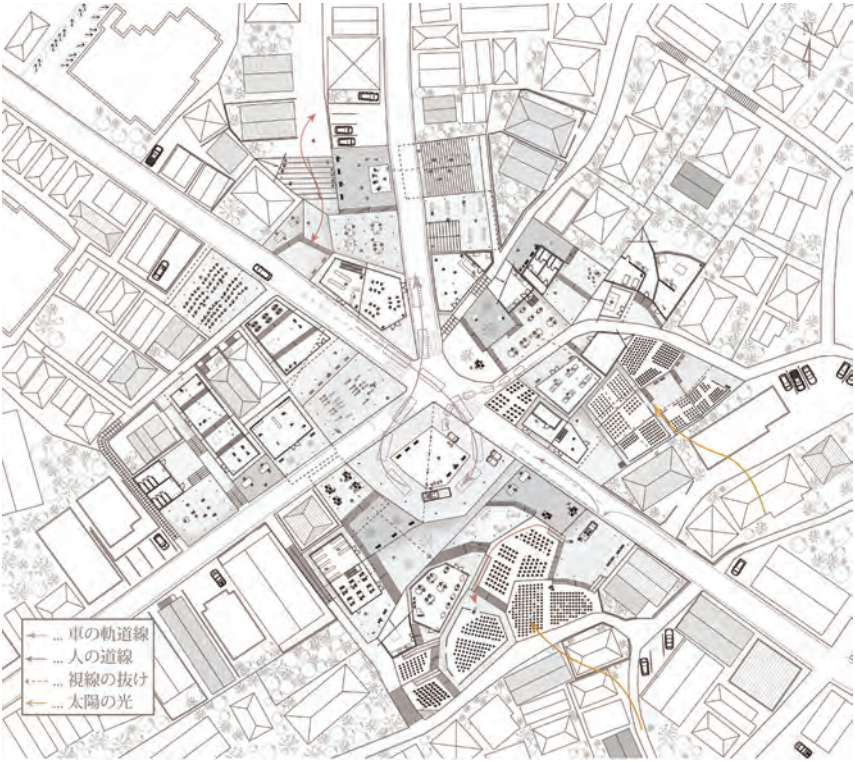
［野口直人研究室］

都市の縁辺に位置する西戸部にはさまざまな課題がある。一方で、地形的魅力も存在する。このような地域に、まちの個性が増幅するような小さな拠点をつくる。西戸部の特徴である基壇と、屋根の設計により、まちの個性を積極的に捉えた少量多品種的な空間が生まれ西戸部の暮らしがほんのりと豊かになる。

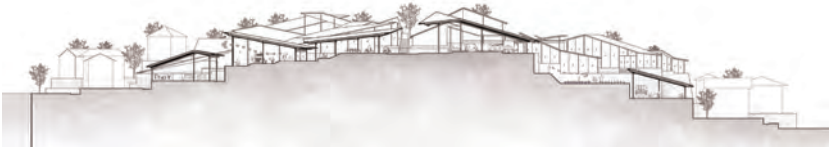
担当教員コメント

特徴的な地形とそこに生きる人々の些細な営みを丁寧に読み解き、それらをほんの少しだけ拡張し誇張するだけで、まさに前川自身のような「少量多品種」の環境を生み出した。地元を探ることは自分を知ることにもなる。(野口直人)

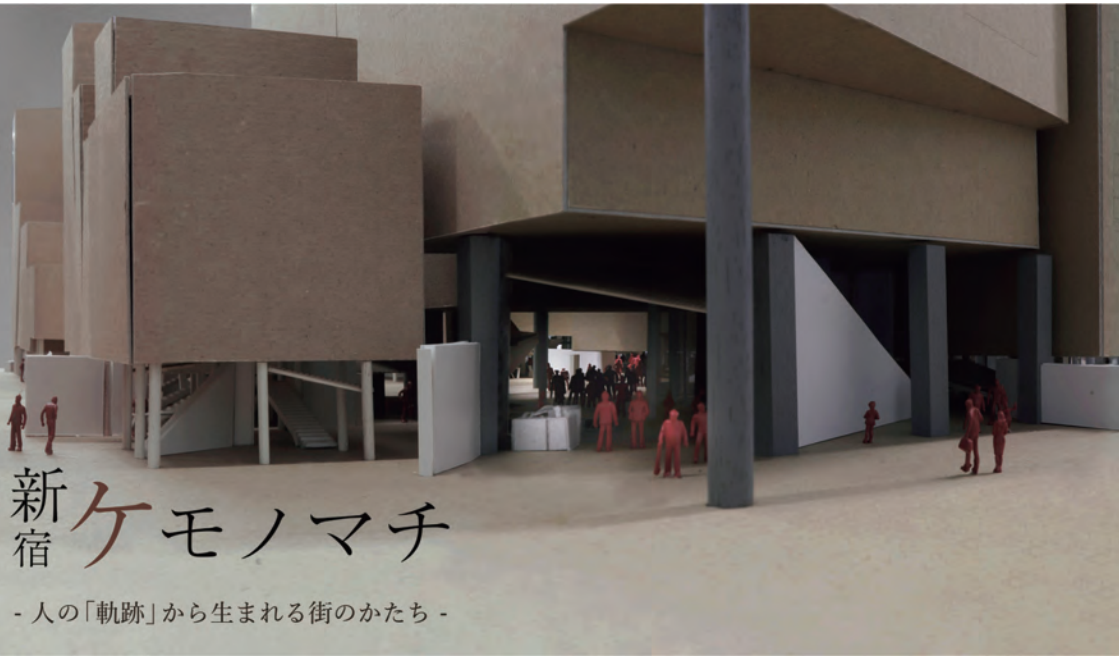
西戸部の地形的魅力



平面図



断面図



微細な視点で多様な軌跡を計画する

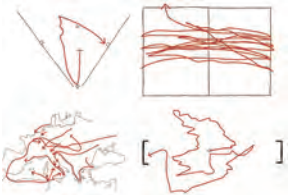
新宿ケモノマチ

人の「軌跡」から生まれる街のかたち

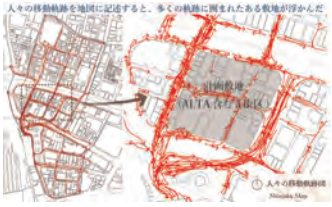
優秀学士設計賞、KD審査委員特別賞、赤レンガ卒業設計展85選、JIA神奈川卒業設計コンクール出展、noteわたしの卒業制作出展

吉村和馬
Kazuma Yoshimura
［野口直人研究室］

計画的につくられた現在の街に対し、人々の活動はその範疇に矮小化してしまっている。そこで人々の動きや欲望の蓄積により生まれる「けもの道」の特徴を応用し、新宿の街を再構築する。主に、既存建物の柱、壁を「減築」、一部を「移築」など微細な視点で多様な軌跡をデザインし、新たな活動を育む。



物や人の動きを追いかけることに興味がある



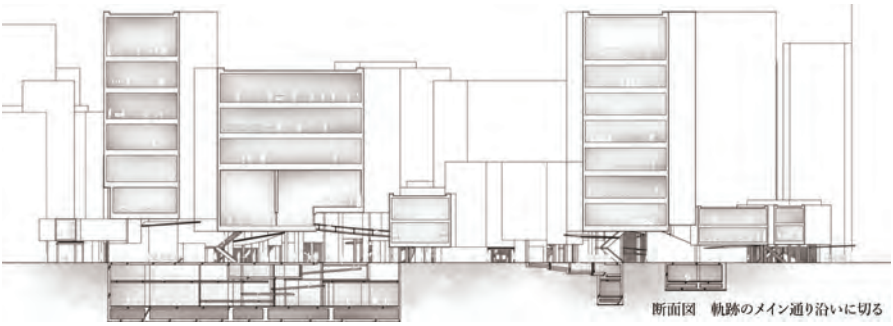
多くの人々の軌跡（活動）に囲まれた計画敷地

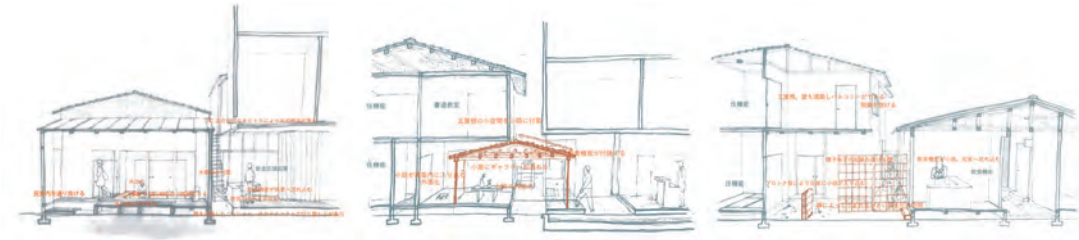
既存建物を「減築」、一部を「移築」「増築」する

担当教員コメント

かたちそのものではなく、人の動きとその蓄積という現象をデザインしようと試みた。そのスタンスには強い勇気が必要であり、人々の自由で創造的な振る舞いを強く想起させることにつながっている。（野口直人）

普段干渉する事のない動線関係を構築(軌跡の多様化)し、新たな活動を育む
人々の「軌跡の混ざり場」
N
PLAN
:屋根部分
:計画した人々の移動軌跡


断面図　軌跡のメイン通り沿いに切る



鎌倉の3つのエリア・断面図

建築のアナログ化

優秀学士設計賞、KD優秀賞

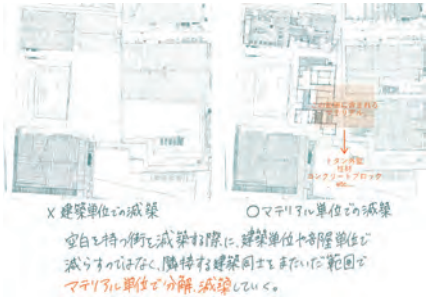
街の痕跡を残す持続的更新手法

星野 唯

Yui Hoshino

［野口直人研究室］

手描き文字は、消しても消しゴムのカスや紙の凹みという物理的な痕跡が残る。これがアナログ的価値だと考えた。街の一部をマテリアル単位で分解し減築、それを別の場所に付築する。それぞれの箇所には新しい小空間や小路が増殖する。街の要素が時を経ても持続的に継承し続ける街の更新手法を提案した。



担当教員コメント

いつからが建築の始まりで、いつまでが建築の終わりなのだろうか。既成概念の建築の姿は、持続継承してゆく流れの一瞬を切り取ったに過ぎないのかもしれない。そう感じさせる示唆的プロジェクトである。（野口直人）

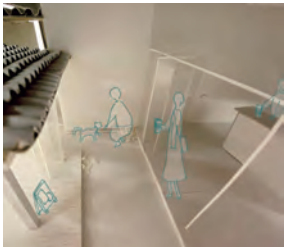
廃墟化する民家をとりまく3エリアを設定し、マテリアルを循環させる

民家の床テクスチャが残る小路

民家一部が外部化、小路が内部化

民家の内壁テクスチャが残る小路

多様なテクスチャが表出する溜り場



建築内にピロティのような空間が発生

付築された壁により他機能空間と接続

各拠点の風景（魚屋・八百屋・工務店）と平面図

太子堂まち保育

優秀学士設計賞

日常的に子どもがまち・人と繋がる居場所の提案

島根大輝
Daiki Shimane
［山﨑俊裕研究室］

子どもとまちの人の交流は子どもの社会への適応能力育成につながるなど、本来重要なものと考えられる。一方、近年のコミュニティ施設などでは交流が施設内で完結し、外部の人が入りにくいと考えられる。そこで本設計ではまちの資源を活用し、日常的に子どもがまち・人とつながる保育環境を提案した。

担当教員コメント

次世代を担うこども環境のあり方は、重要な社会的命題である。ここで提案されたコンセプト・プログラム・建築的提案は入念なリサーチとスタディで具現化されたもので、卒業設計の進め方のモデルになる作品といえる。（山﨑俊裕）

魚屋から見る風景

緑道から見るものづくり工房の風景

八百屋裏マルシェの風景

ものづくり工房ではしゃぐ子どもたちの風景

魚屋のオープンスペースの風景

八百屋裏の畑の風景

八百屋オープンキッチンから中・高校生勉強スペースへの抜け

ものづくり工房から運動場への抜け

2階魚屋レストランと1階オープンスペースの視線の抜けと動線

商転街

KD奨励賞、TOP11

空間と機能が入り混じり生まれる
新しい学びのかたち

眞壁弦汰

Genta Makabe

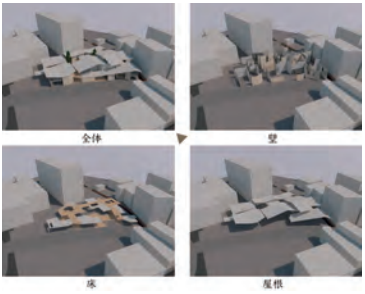
［野口直人研究室］

時代の流れとともに急変する商業形態のなかで、今、商店街の存在意義が問われている。そこで本設計では商店街のソフト面である文化や固有性と、ハード面である建築形式や既存空間の配置、マテリアルを維持し、機能を転用していくことで商店街を再構築し、これからの商店街や教育の在り方を提示する。

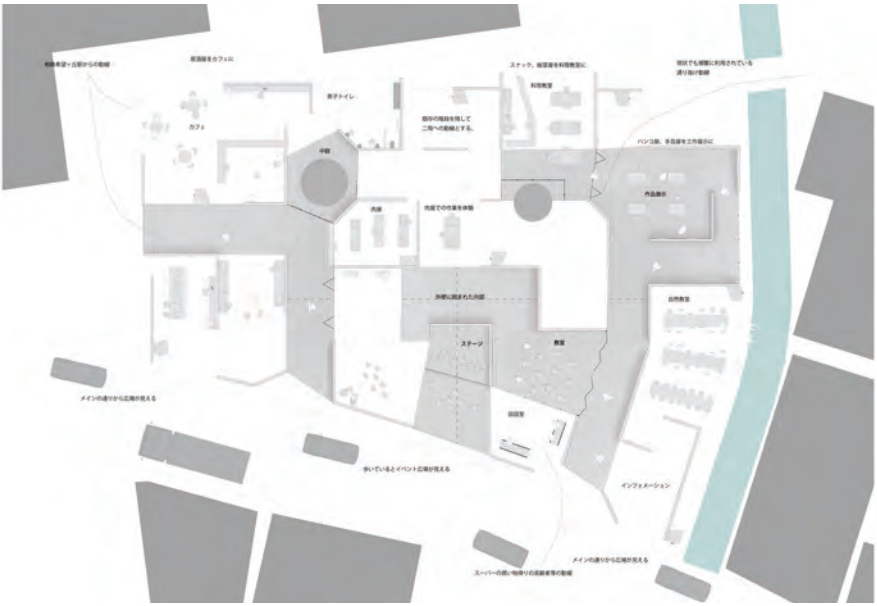
担当教員コメント

既存環境を高解像度に読み解き、それでいて大胆に扱うことで新築では得られない内外入り混じった環境を築きあげた。純粋な空間デザインの力業であるからこそ、多様な使い方がワクワク想起させられる。（野口直人）

既存平面図



構造ダイアグラム

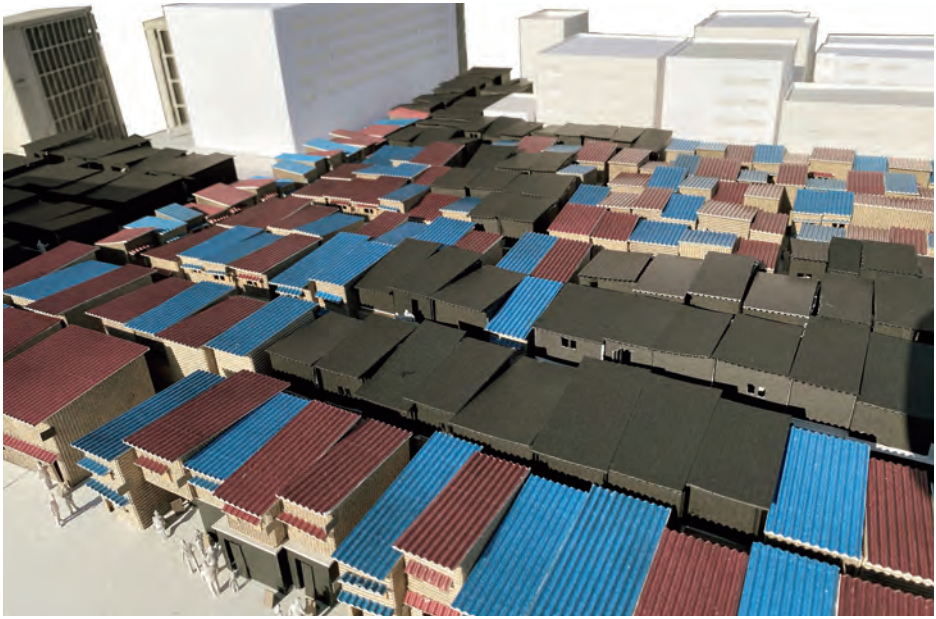


平面図

正面通り立面図

多くの内外の要素が入り混じる空間

教室。外壁に囲まれた内部空間



24時間動き続ける建築

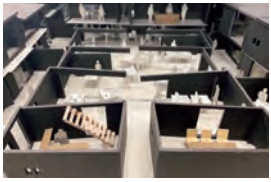
新宿ゴールデン街× 新宿区役所

TOP11

荒井鈴晶
Reika Arai
［野口直人研究室］

新宿ゴールデン街の魅力を継承し、街と距離のある新宿区役所をゴールデン街という個人的商業の中に絡み合うように点在させ、24時間動きつづける建築を提案する。多様な現代のライフスタイルに適応した「誰でも受け入れる懐の深いまち」は、これからも新たな魅力と可能性を広げていく。

ゴールデン街のリズムに合わせた垂れ壁を残す



昼は会議場、夜は広場として街を盛り上げる

道も巻き込み、賑わいがとびだす店舗

担当教員コメント

最小限の空間を組み合わせることで人々の活動を根源化し、一見不合理に思える機能の融合の可能性を指し示した。機能とは単なる名称に過ぎず、そのフィルターが外れたとき、人と建築との関係がより豊かに見えてくる。（野口直人）

全体外観図

Informal Social Place

TOP11

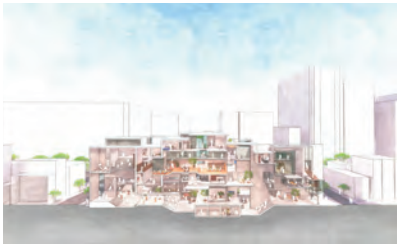
若者の可能性を広げる社会体験インキュベータの提案

富田誠矢
Seiya Tomita
［山﨑俊裕研究室］

将来を見通すことができない社会において、働くことに対して不安を感じ、夢を諦めてしまう若者が多数存在する。そのような若者の将来の可能性を広げるため、ここでは働く人と若者が共存することにより社会を学び・体験できるインキュベータ施設を提案した。

担当教員コメント

本設計では多様な活動が展開されるワークプレイスやラーニングスペースを、レベルの異なる床、象徴的な壁、それらをつなぐ立体回遊動線等で連続させることにより、相互視認・相互刺激が可能な若者向けインターンシップ実験空間が形成されている。（山﨑俊裕）



断面パース：エントランスから大きな吹き抜けを介してさまざまな活動が見える

街路側イメージ：多様なワークプレイス内部の様子が、通りから窺える

地平線的ラインを形成するさまざまな機能

地平線の蘇生

循環する機能と共に移ろう風景

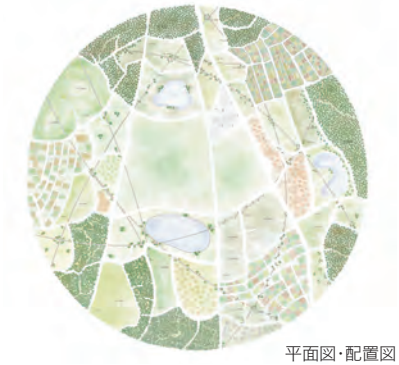
TOP11

杉村遼典

Ryosuke Sugimura

［野口直人研究室］

自然環境の喪失や子どもの自然離れを問題視し、子どもたちの豊かな心を育てる環境を創出するとともに失われることのない壮大な自然風景を設計した。横浜市にある77haの円形の敷地に、さまざまな要素を取り入れ、集積することで地平線的ラインをつくり出し、子どもから地域の大人までが日常的に自然と触れ合う場となる。



平面図・配置図

担当教員コメント

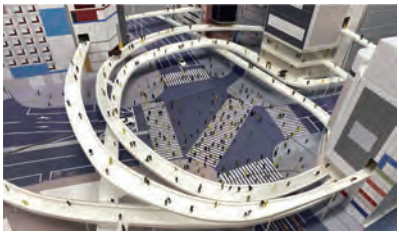
空間設計で用いられる手法を、壮大なランドスケープに適用した稀有な作品である。風景はデザインできると力強く語るプロジェクトは、あとに続く後輩たちに建築の新たな可能性を示せたのではないだろうか。（野口直人）

都市の劇場的風景

TOP11

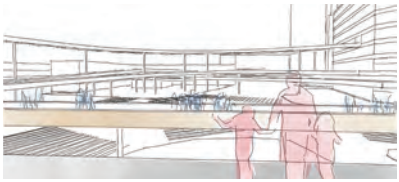
豊永勇次
Yuji Toyonaga
[河内一泰研究室]

渋谷スクランブル交差点の壮大な景色を劇場的に補完する建築の提案。スクランブル交差点をステージとして捉え、そのステージを囲うような形で歩道橋を計画し、すり鉢状の空間を演出した。歩道橋にいる人（客）、交差点にいる人（演者）の関係性を意識しながら設計した。



模型写真

2つの空間の在り方



イメージパース（2つの空間の在り方）

担当教員コメント

都市部においては建築の内部が肥大した結果、外部が内部化していくサイクルが生まれる。渋谷駅前交差点のもつ劇場のような空間性を増幅する建築として迫力のある提案になったと思う。（河内一泰）

模型俯瞰写真

Personal Culture Village

美濃加茂市における多民族共生空間の提案

TOP11

計画全体図

水野華澄
Kasumi Mizuno
［山﨑俊裕研究室］

本卒業設計では日常的にそれぞれのもつ文化をまちの中で共有し、新たな文化を創造する多民族のための居住空間を提案する。住宅エリア・商業エリア・活動エリアの3つのエリアに区分し、公私の領域を平面的にも断面的にも曖昧にし、より近くで互いの生活習慣や価値観が見える生活空間を計画した。

1階平面図

2階平面図

担当教員コメント

美濃加茂市の新旧の店が混在する「商業エリア」、地域住民の「クラブ活動エリア」、生活空間としての「住居エリア」の3地区を対象に、巧妙な空間操作（公的・私的・中間領域形成）により、日常的な国際交流・コミュニティ形成の場が提案されている。（山﨑俊裕）

断面図

常に手を動かしながら建築と向き合う

卒業生インタビュー　Graduate Interview

佐々木大樹

Daiki Sasaki

［2019年度TD賞受賞／
高松建設株式会社 設計部勤務］

2020年東海大学工学部建築学科卒業、2019年度TD賞（最優秀学士設計賞）・日本建築学会優秀卒業設計展出展、KD最優秀賞受賞、『卒業制作2020』（近代建築）掲載、JIA神奈川卒業設計コンクール出展（審査員賞／日野雅司）、赤れんが卒業設計展出展（全国26選）。2020年高松建設株式会社入社。

── 野口研究室ではどのように取り組みましたか？

自分の興味や趣味を分析した独自の設計方法で機能的なファッションの視点からプレゼンしました。自分の好きなことへの理解を深めるため最初1カ月は建築には触れなかったです。

── テーマの決め方や時期について教えてください。

ポケットがたくさんある服が好きという点を別の物事に変換していくうちに、寿司のようにいろいろなものを味わうことが好きだとわかり、料理の食べ比べがテーマになりました。敷地はそのあとの議論を経て10月に決まりました。

── 就活と学校の両立は？

周りの人よりも先手で動こうと意識して、3年生6月頃から動きました。企業でみる視点が違うので、プレゼン方法を変え、就活ノートを作成し自分なりに分析しました。

── 設計をするときに何を大切にしているのか？

在学中の課題ではコンセプトに縛られないよう意図しました。敷地から直感的に出てくる面白い形や空間を模型にする設計スタイルが自分に合っていると思っています。

── 在学期間中にやっておいてよかったことと、やっておけばよかったことは？

建築学科で無駄な科目は何もないことを痛感しています。良いと思う建築をコメント付きでスケッチしたことが就職活動や卒業設計でも武器になりました。

（インタビュアー：土谷野絵・岩瀬和宏）

7・8 semester

卒業設計 2020年度

Graduation Design, 2020

2つの地区の様相をとりこんだモデル

都市の「非場所化」

モルフェームを用いた
これからの渋谷商業空間の再構築

三尾圭祐

Keisuke Mio

［岩崎克也研究室］

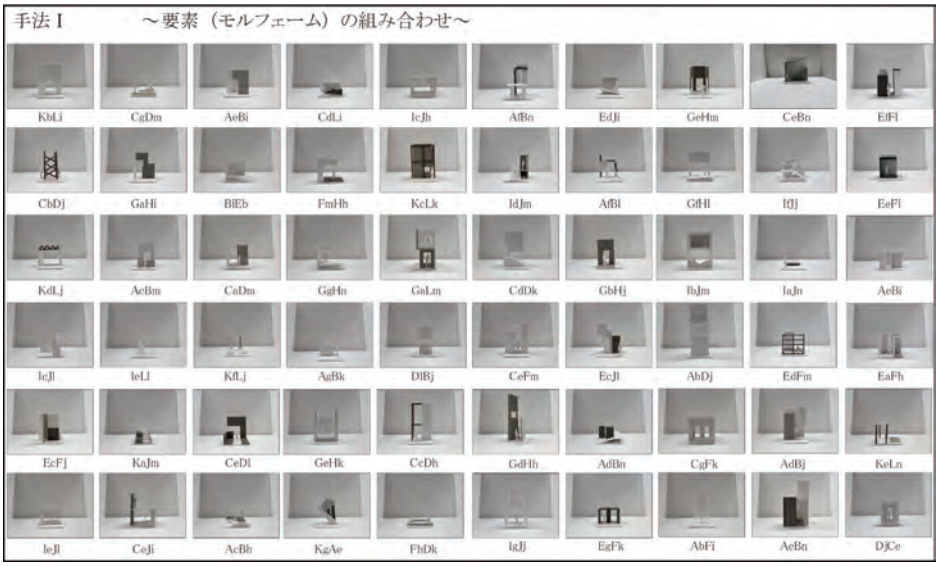
都市の開発や発展が進み従来の場所性という概念が薄れている。ここでは街の場所性を示す敷地特性空間を細分化し、そこでかつての場所性のある空間を体感する施設を計画する。

TD賞（最優秀学士設計賞）、JIA神奈川卒業設計コンクール総合資格学院賞、日本建築学会優秀卒業設計展出展、『卒業制作2017』（近代建築）掲載

断面構成図

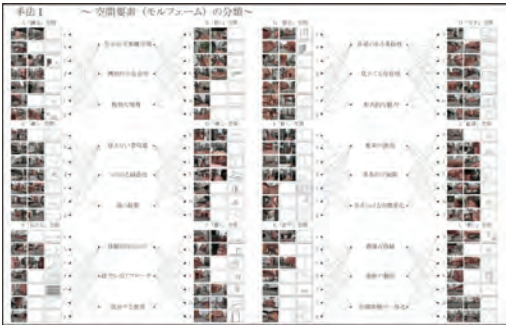
担当教員コメント

土地に組み込まれたダイヤグラムとモルフェームモデルを骨格とすることで、「部分」と「全体」をハーモナイズさせ緩やかな全体像を構築した作品である。それは、通奏低音の響きが見え隠れする中で、あたかもJAZZのような空間の振る舞いを連想させる建築である。（岩崎克也）



ダイヤグラム1：モルフェームの組み合わせ

床と天井高さによる空間の変化



ダイヤグラム2：モルフェームの分類

内外が交錯する商業空間

モデルのバリエーション

閉鎖的であった住宅の壁や塀を柔らかく開くことで、祝い時には三味線の音が周囲に響き渡る

徳之島を筆す

行書の身体的作法で集落に脈を持たせる

優秀学士設計賞、KD奨励賞、学生設計優秀作品展(レモン展)出展、JIA神奈川卒業設計コンクール出展

栄 杏奈

Anna Sakae

［野口直人研究室］

鹿児島県の徳之島では、文化として人々の密な関係性が深く根付いているが、住宅や敷地はブロック塀で閉じられていて環境として閉鎖的である。そこで行書による身体的な動きや流れを設計手法として応用し、閉鎖的であった徳之島の環境を集落一体でつながりをもたせ、動線や風の通りを新たに生み出す。

担当教員コメント

書は記号化された文字に身体的な動きを付加させる。建築において抗うことができない用途の記号化に対しても、そっと寄り添い柔らかく変化させるスタンスは、既存環境に対する「作法」であるといえよう。(野口直人)

集落の拠点となる場

塀を操作し、新たな集会の空間をつくる

・行書の特性を設計手法として応用し、徳之島の住居環境に取り入れていく

〈行書の特徴〉

非物質的な繋がりである「筆脈」

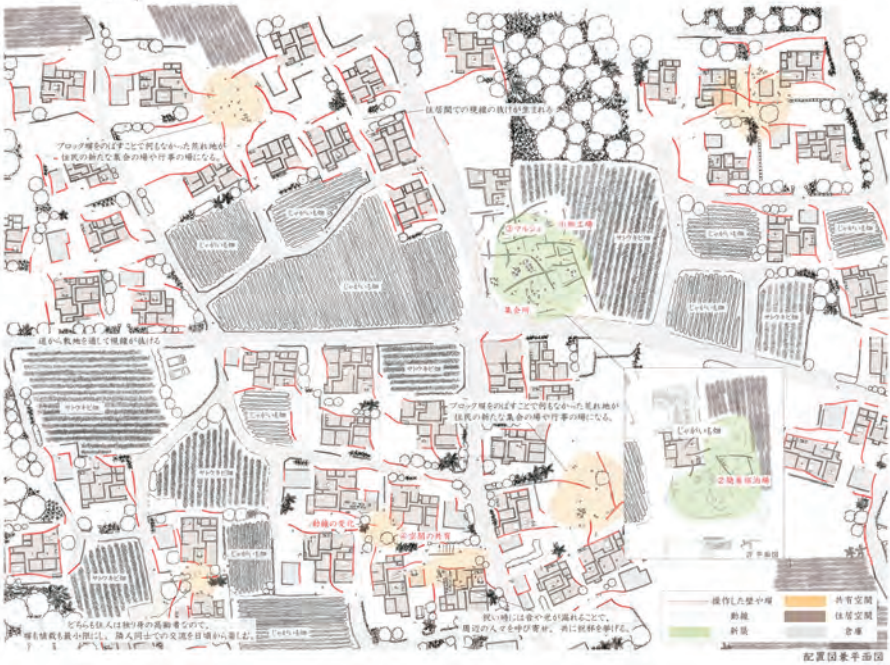
〈徳之島について〉

文化や伝統が継承されている自然豊かな島

成人祝いの様子

→しかし、住宅敷地はコンクリートブロック塀で囲まれており、住居環境として閉鎖的である

・徳之島の集落に脈を持たせる



配置図兼平面図

断面図

街区全体に反転の操作を与え、渾然一体の賑わいを創出する

高円寺再反転

街の雑然性と規則性から創り出す高密度街区の再編計画

山田康太

Kota Yamada

［野口直人研究室］

高円寺に潜む街の規則性「内外の反転」を手法とし、既存の内部空間を共用空間、街区の路地や隙間を内部空間へと、既存機能と一転した高密度街区の再編計画を提案する。反転し生まれた空間が既存建築の完結性を揺らがせ街区全体が一体的に機能し、既存のスケールを継承しながら雑然的な魅力を増大する。

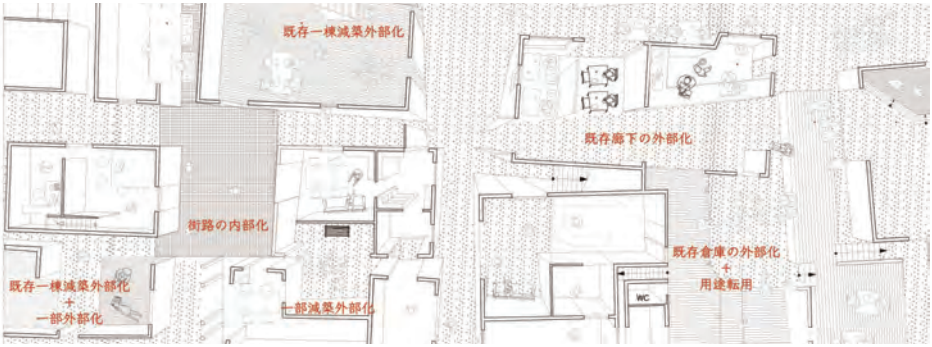
担当教員コメント

建築群の小さく弱い規則性を拡幅させ、街区という大きな環境を知らず律する。それは従来の建築デザインの手法とは一線を画すスタンスであり、他者にはない環境を読む嗅覚と大胆かつ繊細に手を施す触覚に優れている。（野口直人）

優秀学士設計賞、JIA 神奈川卒業設計コンクール出展、第8回都市・まちづくりコンクール2021出展（全国8選・審査員賞／小林正美）、赤れんが卒業設計展出展2021（全国85選）

多様な素材の外壁に囲まれた内部空間

裏路地に賑わいが溢れるように



平面詳細。内外・マテリアルを混在させ、空間や活動の境界を揺らぎ、いままでにない関係性を生み出す

住人と客人のエントランスには
光が落ちる

住人動線と公共化された
動線が交差する

大通りから人々は奥の魅力に
引き込まれていく

平面計画。反転し、接続することでいままで「影」として捉えられてきた部分がこの街区の活動の主となる場へと転換される

住居はレイヤー状に重なることで、外部からの住居単位の認識が曖昧となる

枠を跨ぎ街を繋げる居住

優秀学士設計賞

高密度なジョージタウンにおける新しい暮らし方の提案

ニクソン・リン・ジュン・ユー

Nickson Lim Tjun Yuu

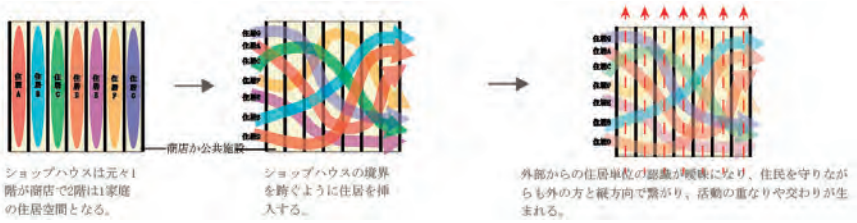
［野口直人研究室］

マレーシアのジョージタウンは85%の建築物がショップハウスと言う細長い建築形式により形成され、特徴のある街である。今回の提案では、その特徴を活かし、より人々がつながる街になるように、元々あったショップハウスに新たな住居を挿入したうえ、ヒエラルキーをもったストリートを設計した。

細長いショップハウスにより形成された独特な街並み

担当教員コメント

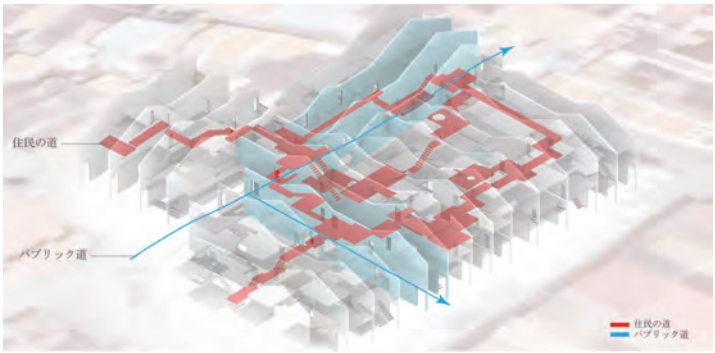
強い形式に真っ向から挑み、住居を解体してまちとつなげる。一見強引とも思える操作は、極めて繊細な空間デザインによって成立しており、この文化における居住の新たなスタンダードであると認識させる力がある。（野口直人）



ショップハウスの特徴を利用し、商＋住という機能を継承したまま、建築のリノベーションをする

内部写真

俯瞰写真



ヒエラルキーをもったストリート：住居を縫う住民の道＆街区をつなぐパブリックの道

2種類のストリートが街の中に交わりながら街全体をつなげてゆく

ズレと歪みで住宅街に生じた公共の空間

住宅街を歪ませる

優秀学士設計賞

日常の距離感をずらして生まれる新たなお出かけの形

雨宮 巧

Takumi Amemiya

［野口直人研究室］

対岸までの距離や乗り物のスピード感などは、距離感を自身の経験により補完することで認識している。そこで空間にズレや歪みなどの操作を加えれば、実際とは異なった認識が得られると仮定した。単調な住宅街の中にズレや歪みの操作を加えた公共施設をつくることで、住む以外の価値を提案する。

担当教員コメント

ズレや歪みとは、基準があったうえで成立する状態であり、周囲の単調な環境を基準とする操作の絶妙なバランス感覚に優れている。オープンスペースの既成概念に対峙する、新しい公園の在り方を指し示している。（野口直人）

急にパースが効き、距離感が変わる内部

小学生の通学路。
内側にずれた壁が通学路を長く感じさせる

1.常に補完され、認識している

我々人は常に自身の経験によって、視界に入った情報をもとにその先の空間を想像し距離感などを補完して認識している。
そこで、空間にズレや歪みの操作を加えることで、実際の距離とは異なった認識が得ることができると仮定した。

二枚の屋根地点から先の建物までの距離は同じだがサイドの建物1点（左）や高（右）などが何を対象にして認識するかで感じる距離感が変わってくる。

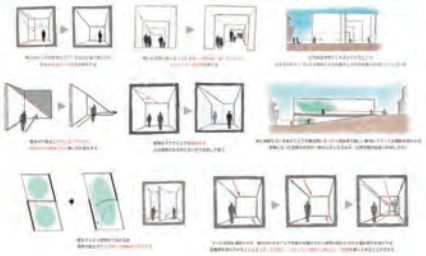
知の領域は狭い range 建物がないため、驚てしなく広い 造だと認識する。お辻実際に歩く際や物とはかの率向と比較しておおその距離を認識する。このような現象を認知的により、首々の広狭は大きく変わる。

首々は自身の経験から蓄積に入った情報をもとにその先の空間を無意識に想像することで補完され、認識している

操作を加えていない空間を通常とし、壁・床・天井を狭くしてパースを強かす、物1d切り取り方を変えて
実際の空間とは異なる印象をうえるなど、人りに立っただけでは当初の認識がなされない空間をつ出すことができる。

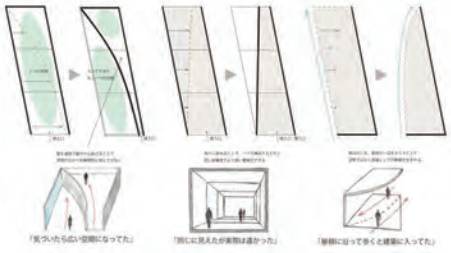
3．ズレと歪みによって住宅街に距離をつくる

空間の歪みやズレによって我々の認識が常に変わることから、認識を変えることによって新たな空間の使い方、見え方を生まれると考える。
そこで使なこの操作を加えて道路の狭窄を解消し、体験としてすまでの間では起きなかったことが生じる可能性のある空間を用当箇所に

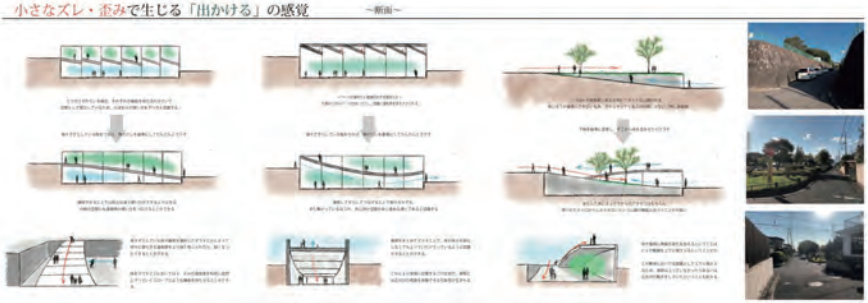


小さなズレ・歪みで生じる「出かける」の感覚　～平面～

周辺をなるべく消去法的手法をなるべく状況下において、この形には「階段」や「扉」などの付属空間に加え「窓」や「扉」などの付属空間に加え「窓に行く」「扉に通う」などの
両の間で起きる非日常体験を起こすことが求められる。そこで以下のような空間操作を組合して展開することで私本的空間内では起きない「出かける」感覚を発生させる。



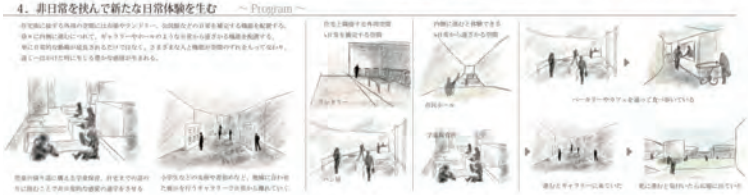
小さなズレ・歪みで生じる「出かける」の感覚　～断面～



4．非日常を挟んで新たな日常体験を生む　～ Concept ～

この広域おさとの時代が特徴であるがこの広域に断層が切っきりしていて反対側まで行くのが面倒・大変と感じてしまう。そのためその断層を感じてしまう人の認識を破壊し、あったい同に感じてしまう工夫が必要であると考える。
そして同時に広域を繋げるように展開していた生活動線が広域内を巡り、新たな交流・すれ違いなどが生まれ広域として活性化して、「生活」の中心となるような建物を展開する。

4．非日常を挟んで新たな日常体験を生む　～ Program ～



街を着崩す

KD最優秀賞、TOP12

ワンピースの構造を用いた文化創造拠点の提案

大塚麻奈

Mana Otsuka

［野口直人研究室］

ファッションと建築は身体を守るシェルターとしての本質を共有しており、ワンピースは洋服のなかで原始的ながら多様性に優れる。ワンピースの構造を空間設計に応用し、これらを用いた柔らかな空間が街へと拡張し、形式ばった街並みを着崩していくことで表参道と人々のつながりを豊かにしていく。

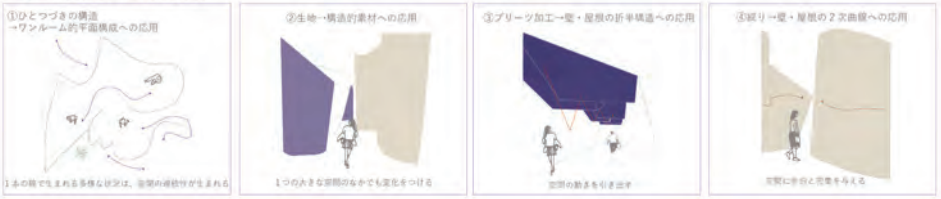
担当教員コメント

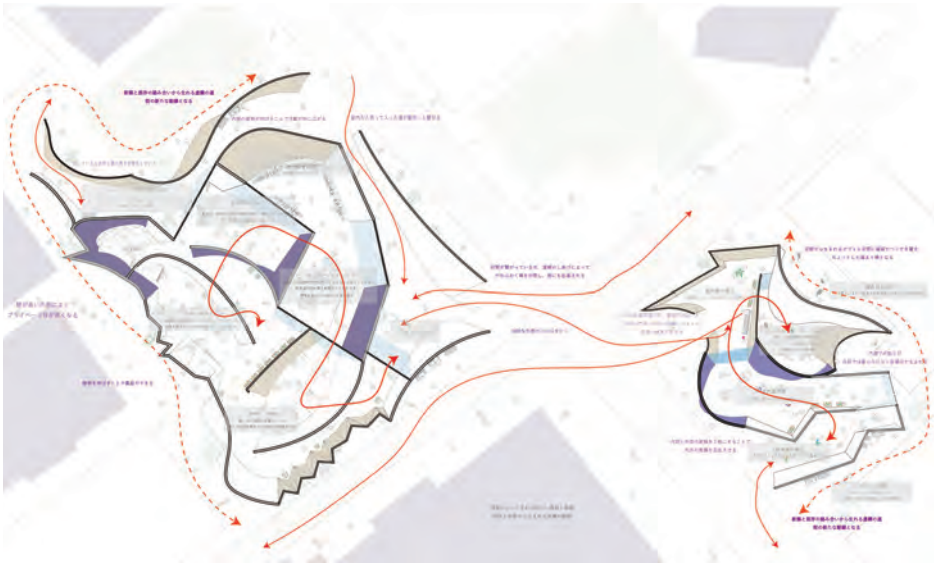
生み出した空間の魅力がずば抜けている。強烈なまでに身体と空間の関係に向き合い、デートに着ていくワンピースをつくるがごとく感情のこもったデザインは何にも勝る。建築の原点に立ち返ったような作品である。（野口直人）

無造作な膨らみの変化が空間の動きを引き出す

壁の大きさの変化により空間のリズムを体感する

■空間設計への応用





平面図。分断化していた表参道を一体化させる

地形が創出する活動と街並み

奇地形に淀む代官山

「痩せ尾根」から生まれる暮らしのかたち

KD優秀賞、TOP12

木村 岳

Gaku Kimura

［野口直人研究室］

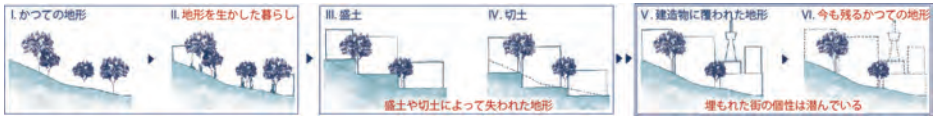
地形は街の不変的な個性として存在し、その街特有の空間をつくり出しているが、近年地形は多くの人工物に埋もれてしまい、街の個性は失われつつある。代官山特有の奇地形「痩せ尾根」から生まれる活動を、壁や屋根の設計によって引き出すことで、地形と暮らしがより密接に補完し合う街並みが生まれる。

担当教員コメント

建築のはじまりをずらしているのだろう。整地からスタートするという現代建築の常識を疑い既存地形と分解されたエレメントによってはじめて成立する空間は、都市部だからこその強烈な個性と人々の活動をあぶり出す。（野口直人）

埋もれた岬を表出させた見渡し岬

崖線の切り取りにより生まれる崖線劇場

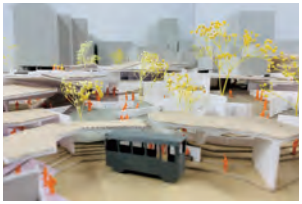


街が均質化されていく今、街の個性は地形にあり既に固有の空間は存在している

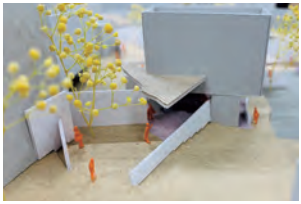
地形をよりミクロな視点で見ると、その街特有の地形「奇地形」が存在する

連続した痩せ尾根を跨ぐ裏道の一部を計画敷地とすることで
新たな人の流れを創出する

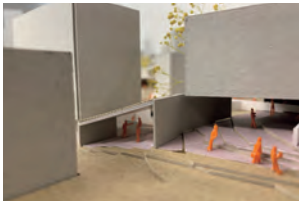
すり鉢状の広場が本能的な活動を促す



既存路線を地形に沿って
引き込んだ沢バス停

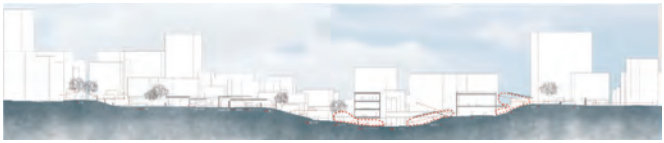


谷筋に沿って導線を
既存建築内に引き込む



既存建築を屋根でつなぐことによる
空間の拡張

配置図・平面図



A-A'断面図

飛び出た床や壁が、あまりとなり空間に広がりをもたせる

袖や袂を利かせ、空間を広ぐ

KD奨励賞、TOP12

和服的仕立ての法則を応用した空間設計

近岡 直

Nao Chikaoka

［野口直人研究室］

和服的裁断方法は、一反の布を余すことなく直線的に裁断し立体的に仕上げるという制限があることで多様性を生み出している。同じ面積・表裏を基に切断と組み方を変化させることで、飛び出た壁や床が空間としての余りとなり空間のつなぎ目を曖昧にし、袂を振り、招くように空間とまちをつなげる。

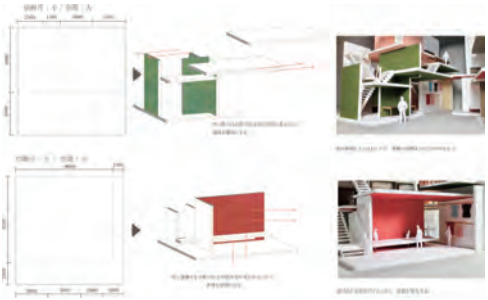
担当教員コメント

形態そのもののメタファーによるデザインとは明らかに異なる。和服の構成・構造をメタファーとした空間は、規律がありながらもさまざまな隙や色気を生み出し、結果として和服のもつ魅力の本質に迫っている。（野口直人）

回遊している間に他の領域に足を踏み入れている

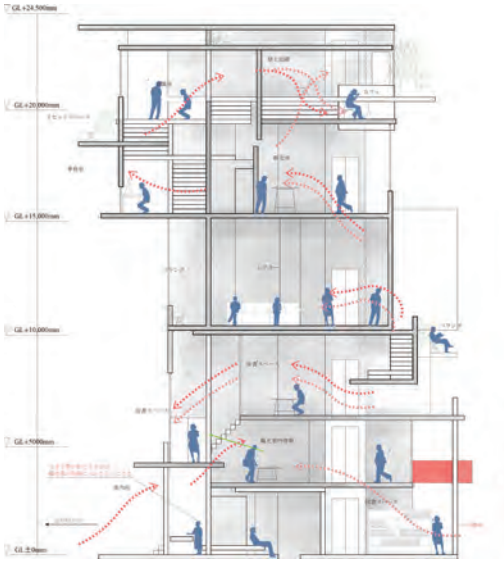
隙間から外の気配を感じる

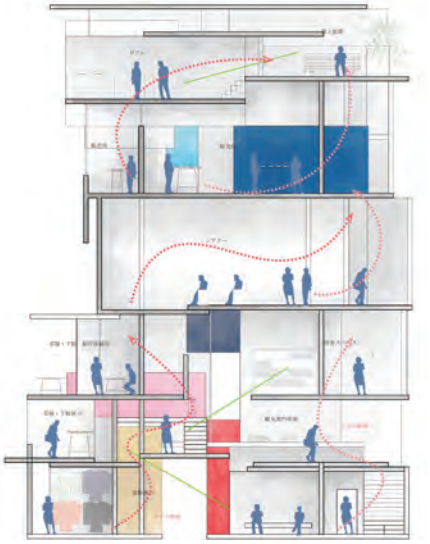
和服的仕立ての法則



和服的裁断方法の空間への応用

積層空間モデル一例





断面図

154階建てのまち

感覚のずれと重なりによる多層商店街の提案

齊藤朱音

Akane Saito

［野口直人研究室］

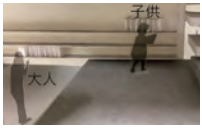
猫と人との認識の差により、異なるスケールの同居が生まれ空間の多様性が浮かび上がる。既存の商店街に動物的な動作を生む操作を加えることで、さまざまなスケールの人々がまちに溶け込みながらも個の居場所として機能する。そして、スケールの変化に伴い使い方が変化し、成長とともに在り続ける商店街となる。

担当教員コメント

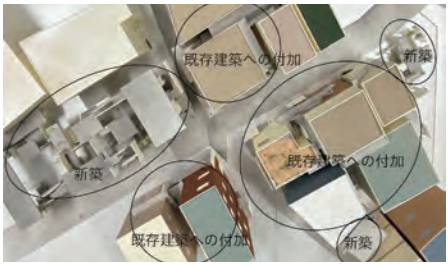
齊藤は猫である。その動物的感覚から生み出された空間は、従来の常識的スケールや構成から逸脱し、人間本来の原始的感覚や行動を呼び起こす。合理的計画では得られない、身体の延長のような空間群が魅力的である。（野口直人）

TOP12、赤れんが卒業設計展出展（全国80選）

機能の多様化



使い方の変化



建物外観

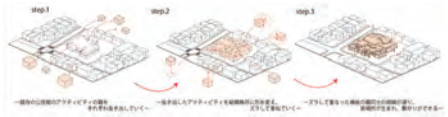
ズレで生まれる新たな繋がり

相模原市東林公民館の再構築

TOP12

永渕光啓
Mitsuhiro Nagafuchi
[河内一泰研究室]

閉鎖的でアクティビティを認知されなくなった現代の公民館。そんな公民館を空間ごとに分解し、ボリュームを平面、断面方向にズラし再構築することでさまざまな機能間に関係性を生む。一つに縛られない自由な空間と人のつながりのある公民館を設計した。



ダイアグラム

断面パース

内観パース

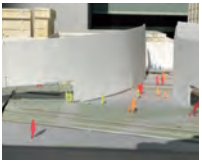
担当教員コメント

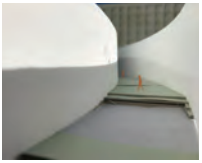
既存の公民館は諸室を並べ廊下で接続した建物である。その諸室をずらしたり重ねたりしてさまざまな活動が交わる形式をつくっている。「分割するための計画」から「交わるための計画」の方向性に共感をもった。(河内一泰)

5000m^{3}の絵本

環境のフレーミングにより変化する境界

TOP12



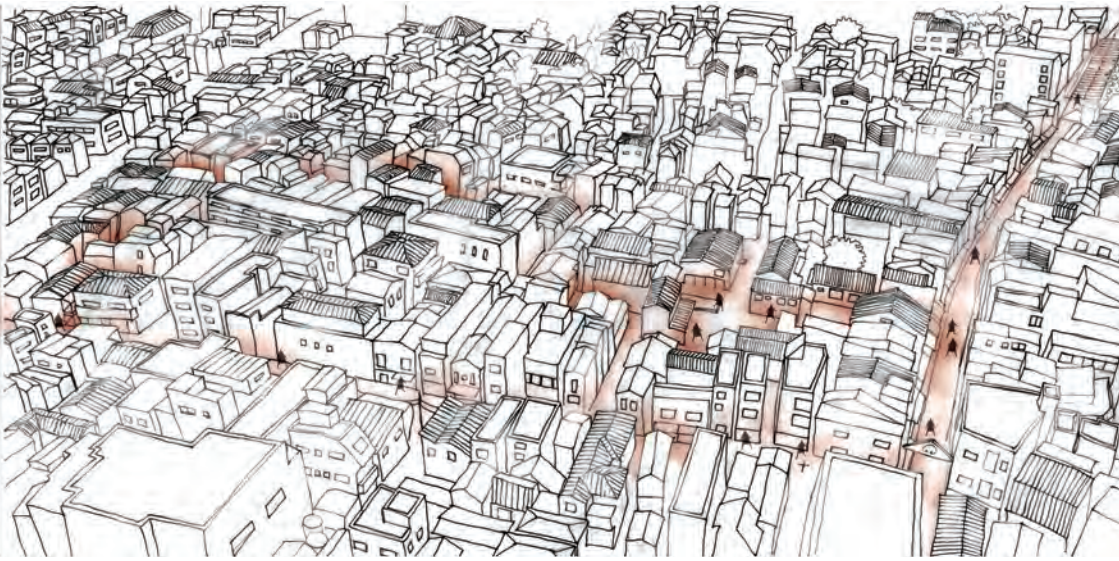


所 巨晃
Naoaki Tokoro
［野口直人研究室］

絵本は思い浮かべた世界をフレームで切り取って見せることによって、枠を超えた世界観を想像させることができる。強い境界線によって閉ざされた既存環境に、境界線をまたぐようにフレームをかけることで周辺環境が混じり合い、意識的・空間的につながりが生まれ、境界にとらわれない活動を創出する。

担当教員コメント

既存環境に対する価値観を大きく変化させた問題作。手法や効果において従来の建築とはまったく異なるアプローチであり、賛否を巻き起こした。新しい概念をつくろうとするスタンスは卒業設計においてとても重要である。（野口直人）



谷中の都市の風景を建築に落とし込む

TOP12

街を結ぶ緩い紐帯

街と共生する分散型宿泊施設の提案

大渕光佑
Kosuke Oobuchi
[岩崎克哉研究室]

都市の開発や発展が進み従来の場所性という概念が薄れている。ここでは街の場所性を示す敷地特性空間を細分化し、そこでかつての場所性のある空間を体感する施設を計画する。

配置兼平面図

谷中の分散宿ネットワーク

担当教員コメント

谷中の街の魅力を引き出し、インバウンドを期待した観光と結びつけた時代を読んだ作品である。都市の中に分散宿を創るという着眼点は良いが、形にする段階でさらなるデザインのブラッシュアップがあると飛躍できた。(岩崎克也)

周りに流されない

卒業生インタビュー　Graduate Interview

三尾圭祐

Keisuke Mio

［2020年度TD賞受賞／
鉄建建設株式会社勤務］

2021年東海大学工学部建築学科卒業、2020年度TD賞（最優秀学士設計賞）受賞・JIA神奈川卒業設計コンクール総合資格学院賞受賞・『卒業制作2017』（近代建築）掲載。日本建築学会優秀卒業設計展出展。2021年鉄建建設株式会社入社。

── 卒業設計はどのように進めましたか。
最初におおまかな年間のスケジュールを決め、テーマは5月頃に決定しました。先生や周りに相談したり意見を聞いたりするというより、「次はこうしよう」と、どんどん案を出して自分の主観を中心に進めていきました。

── 作業に行き詰った時はどうしていますか。
行き詰まったことがあまりなかったですね(笑)。考えがどんどん積み重なって、それに向かって作業していく感じでした。

── 就活と学校の両立はどうしていましたか。
就活では学校の推薦があったので、3月には決定していてそこまで苦労せずに終えました。また、1・2年次に単位を多めに取ったので、3年次では外部で建築に関することを勉強していました。前期にはゼネコンの設計部でバイトをしていて、そのようなところを就職先にと考えました。割とバランス良く両立できていたと思います(笑)

── 設計を行う際に大切にしていることはありますか。
学生の時は自分の考えを突き通すことを意識していました。自分の見せたいという欲や、見せる力を身に付けていくことが大事だと思います。先生からいろいろ意見をいただいても、譲れない思いがあるなら突き通していくことは大事ですね。与えられたことを客観視することも大事ですが、自分の先入観や主観を強く入れた方が学生のうちはいいと思います。一方で社会人になってからは、仕事である以上、自分の意見を通すことよりも誰にとっていいものかを考えるのが重要になるので、利己的に考えるよりも利他的に考えることを大切にしたいと思っています。

── 大学で建築を選択した理由はなんですか。
もともと家具など小さいものに興味がありました。ですが、学校の課題をやっていくうちにスケールの大きいものに興味をもつようになりました。今は現場に出ていて設計にあまり関わっていないのですが、来年以降は設計の部署に配属になるので先程の考えをもって仕事に取り組んでいきたいです。

──パソコンの技術はいつ頃身に付けましたか。
2年生の始めあたりからパソコンの学習を始めました。パソコンを操作することが楽しかったので、割とすぐに覚えられました。課題の模型をつくることより、プレゼンテーションボードをいかに綺麗に見せられるか考えるのが楽しかったですね(笑)

── 学生のうちにやっておくべきことは何ですか。
資格の勉強をした方がいいと思います。社会人になると時間が取れなくなるので、今のうちにやっておくといいですよ。あとは、アルバイトをしておくと
社会人になってからの人間関係に役立ってくると思います。建築とは全然違うアルバイトをやるのもいいと思いますよ。たとえばですが、電話の取り方とか言葉遣いも学生のうちに学ぶことができて今後に必ず活きてきます。

(インタビュアー:倉光汐里・須藤有弥)

研究室紹介01　laboratory 01

建築から都市を、都市から建築を考える

「プロジェクトX」を囲んだゼミの風景（中央が岩崎先生）

岩崎克也

Katsuya Iwasaki

［学部長〈予定〉・教授／
建築設計・都市デザイン］

1964年千葉県生まれ。東海大学大学院工学研究科博士前期課程修了。1991年より株式会社日建設計勤務・建築家。設計部長を経てダイレクターアーキテクト。主に大学キャンパス計画を中心に設計を行い、BCS賞、建築士会連合会賞、図書館建築賞。他多数受賞。2020年東海大学工学部建築学科教授、プロフェッサーアーキテクト・ユニバーシティービューロー付。著書に『未来を拓くキャンパスのデザイン』（彰国社）。詳細はhttp//www.iwasakilab.com/に記載

プロジェクトXを通じたワクワク体験を共有

「建築から都市を、都市から建築を考える」これが私たち研究室の基本となるテーマです。この考え方を実践の場に連動させ、今期の研究室では大学院生を中心に具体的なプロジェクトに参加をして一緒に建築の計画に取り組んでいます。考えたものが形になって出来上がって行くワクワク・ドキドキを一緒に体験しています。この試みは上手くいけば、来年度もさらに継続発展ができ、きっと活きた教材になることでしょう。また、関連して湘南キャンパスをモデルとしたアクティビティを調査・分析してそれらを形につなげる研究を行っています。

建築を統合的にとらえ、遠くの射程を目指す

建築の設計はデザインだけでなく、あらゆるものが総合的にも求められます。そこに建築を創る意義や価値をはじめ、独創性や社会性、コンセプトの力強さ、造形力。さらには、構造や設備、ランドスケープといった分野を統括する力が必要です。皆さんもぜひ感性を研ぎ澄ませて、好きな建築空間の中に身を投じて自問してみてください。設計を通じて、「自分の目指すものは何か？」をよく考え、できるだけ遠くへ跳躍してほしいと思います。

ゼミ活動や卒業設計を通じて「建築デザインの面白さ」を一緒に発見していきましょう。

研究室紹介02　laboratory 02

豊かな建築のかたちを考える

2020年度河内研究室の卒業生（中央が河内先生）

河内一泰

Kazuyasu Kochi

［特任准教授／建築設計・
都市設計］

1973年千葉県生まれ。1998年東京藝術大学美術学部建築科卒業。2000年同大学院修了後、難波和彦＋界工作舎入所。2003年河内建築設計事務所設立。2008-19年芝浦工業大学非常勤講師、2008-10年京都精華大学非常勤講師、2010-15年日本大学非常勤講師、2012-19年東海大学非常勤講師、2013-15年東京藝術大学非常勤講師、2016-18年武蔵野美術大学非常勤講師、2017-19年千葉工業大学非常勤講師、2019年より現職。

河内研究室は建築デザインを専門とする研究室です。建築は廃墟になっても使われ方が変わってもその形と空間性は残ります。「豊かな建築のかたちとは何か」が研究室のテーマです。私自身は大学での教育と自分の事務所での設計活動を行っており、その中で「かたち」について研究と実践をしています。

4年生のゼミでは学部3年生までの設計の授業とは違い、自発的に目的をもちながら毎週の成果を積み上げなくてはいけません。まず春学期のゼミではに日常の風景や建築などから自分が魅力を感じる空間のかたちの働きや効果を分析してもらいます。秋学期にその分析を卒業設計のプロジェクトとして形にします。大学院ではさらに分析を深め、自分が魅力を感じる空間の原理を発見してもらいます。家具から都市までスケールを問わず、自分が興味のある空間について考え形にすることで将来自分がどんな種類の建築設計に関わりたいのかを見つけてほしいと思っています。

研究室紹介03　laboratory 03

個人的興味を建築につなげる

2020年度野口研究室3期生（中央が野口先生）

野口直人

Naoto Noguchi

［助教／建築設計・都市設計］

1981年神奈川県生まれ。2000年東海大学付属相模高等学校卒業、2004年東海大学工学部建築学科卒業、2006年横浜国立大学大学院修了、2006–12年SANAA勤務、2013年野口直人建築設計事務所設立、2013–15年横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手、2014–17年東海大学非常勤講師、2016–17年横浜国立大学非常勤講師、2017年より現職。

――研究室ではどのようなことをするのですか？

個人的な興味や経験などを、どうやって建築のデザインにつなげていくかを考えます。スポーツや音楽、映画や小説などなど。一見、建築と無関係に思えることでも、根底に潜む概念であったり、問題意識をあぶり出すことで、建築を考えるうえでの独自の切り口を見つけ出します。

――どうやって建築につなげるのですか？

建築とは、人々がそこでどのように生きるのか、「出来事」を生み出すものであって、それを考えるためには、自分ならではの価値観が必要です。独自のフィルターを通して、建築や環境、人々の行動などを捉え直し、分かりやすく抽出します。それを設計の主軸とすることで、建築のデザインへとつなげていきます。そういった個人的思想から、建築の新しい可能性が開けると考えています。

――卒業設計をする意味はなんですか？

自らの思考と思想を確立することです。それは建築設計以外でも十分に活かすことができます。下手でもいいから、自分にしかできない設計をしてほしい。しかし、それが独りよがりで表面的な提案にならないためにも、いろいろな知識を得たり、経験したりして、他者が共感できる論理的な言葉や表現方法を身につけてください。

研究室紹介04　laboratory 04

建築事始め：ビフォア&アフター

上：2020年度卒業生。
　研究室前にて（中列左から3番目が山﨑先生）
左：2019年度研究室ゼミ旅行で訪れた太宰府天満宮にて
　（左端が山﨑先生）

山﨑俊裕

Toshihiro Yamazaki

［教授／建築計画学・
環境心理・環境行動学］

1958年京都府生まれ。福井大学建築学科卒、東京都立大学大学院博士課程修了。東京都立大学移転準備室・非常勤講師、東京電機大非常勤講師、職業能力開発大学校専任講師、東海大学助教授を経て、現職。著書に『フィールドワークの実践』朝倉書店、『建築系学生のための卒業設計の進め方』井上書院など。計画・設計に「植草学園大学新棟、同図書館棟」、「千葉市南小中台保育園」（こども環境学会デザイン奨励賞受賞）など。

建築に関わるきっかけは、小学校時代、絵を描いたり木工などの立体物をつくることが好きだったからでしょうか。大学時代は山歩き、オートバイ、空手サークルに属しながら建築をボチボチ学んでいました。大学4年の研究室で小学校の基本設計に関わったことから学校建築に興味をもち、大学院時代は障碍児の生活行動に関する調査研究の他、いろいろな学校建築の計画・設計プロジェクトに参画しました。大学院の恩師が「一人ひとりの子どもに対してどのような場が必要か？」といつも問うていましたが、これは人間の多様性・個別性を踏まえた建築を考えよという教えでした。現在、研究室では教育、医療福祉、庁舎など、公共建築を中心とした調査研究を行っていますが、これらの建築の望ましい規模・機能を考えること（ビフォア）、そして建物がどう使われ改善すべきかを考えること（アフター）が重要なテーマだと思っています。

建築の楽しさの原点は五感を通して得られる現場体験であり、多様なユーザーから教えられる個別解としての建築の難しさ、奥深さではないでしょうか。

さあ学生の皆さん、フィールドに出て、現場で大いに楽しみ感動しましょう。

研究室紹介05　laboratory 05

非常識に潜む光る種

「宇宙建築賞」中村好文氏による公開審査（前列右から2番目が十亀先生）

十亀昭人
Akito Sogame

［准教授／宇宙建築学･建築計画］

1970年愛媛県西条市生まれ。東海大学工学研究科建築学専攻修了、東京工業大学大学院総理工修了。文部科学大臣表彰。宇宙開発担当大臣表彰。松前重義賞（最優秀）受賞。現在は、全国の大学教員、ゼネコンの方々らと「宇宙建築の会」を立ち上げ、宇宙建築のアイデアコンペを企画している。著書に『ケンチクノキソ』（共著、東海大学出版）など。

「世の中は常識で曇ったガラスのようなもんや。そんな常識は直ぐに手で拭きとって外を見えるようにせないかんのや……」これは、瀬戸内豊島の産廃問題の改善に奔走した中坊公平さんの言葉です。

自分の学生時代、突然宇宙に目覚め月に家を建てたいと言い出しました。当時の先生方からはずいぶんあやうく見えていたことでしょう（笑）。しかし20年経ち振り返ってみると、曲がりなりにも大学で研究を続けることとなったのは当時の優等生たちではなく、彼らから笑われていた私だったのです。今の皆さんは、先生に褒めてもらうことも嬉しいことかと思いますが、得てして私たち教員はついつい常識的な考えに縛られた評価を与えがちになってしまいます。しかし、時には目の前の評価など気にせず、自分の信じた道を一歩ずつ進み続けることも必要かもしれません。学生時代に手に負えなかった学生が、将来立派になった姿を見せてくれる……、教員としては、それはそれで楽しみなところでもあるのです。失敗を恐れず突き進んでいく、それは若者の特権なのですから……。

ぜひ行って見て欲しい、
美しい都市
「フィレンツェ旧市街」（世界遺産）イタリア
ドゥオーモからの俯瞰［写真：山﨑俊裕］

ぜひ行って見て欲しい、
美しい広場
「シエナ旧市街 カンポ広場」（世界遺産）イタリア
マンジャの塔からの俯瞰［写真：鈴木裕一］

5・6 semester

建築設計論1-2　2019年度

Architectural Design Theory and Practice 1–2, 2019

建築設計を本格的に学ぶ授業です。実際的な設計作業に準じる課題が出され、第一線で活躍する建築家によるエスキスチェックを少人数で受けます。設計論1では、低層建築と多層建築を対象に建築計画から考えていく設計方法を学び、設計論2では、複合建築や劇場などを設計する総合力を学びます。

Architectural Design Theory and Practice 1 and 2 are advanced subjects focused on larger buildings, more complex programs, and full-scale process of architectural design practice, which includes planning, structure, equipment, etc.

建築設計論2　プレ卒業設計

自分の興味を建築のかたちにする

担当教員：河内一泰、野口直人

この課題は卒業制作のための練習です。これまでは与えられた課題を解いてきましたが、卒業制作では自分で課題を設定し、自分で解かなくてはなりません。大学で建築を学んだ数年間の中で、みなさんの中にそれぞれ建築についての興味が芽生えたことと思います。この課題では、自らの建築への興味を掘り下げ、建築の提案として表現してもらいます。課題はリサーチ課題と設計課題の2段階に分かれます。課題の進め方のルールは以下の2つです。

1）本をつくりながら進める
　毎回のエスキスにA3の素材を数枚枚持ってきてください。各A3用紙を2つ折りにして観音開き製本にします。

2）ショートプレゼンとブレストを隔週で行いながら進める
　ショートプレゼン1〜2分を全員の前で行なってもらう週とグループで学生同士のブレストを行ってもらう週を交互に行いながら進めます。

敷地
・各自設定、架空の敷地でも可

設計条件
・建築条件：建築的・都市的な提案であること
・建築規模：各自設定、テーマに応じて設定すること
・施設内容：各自設定、抽象モデルでも可

出題教員コメント

この課題ではそれぞれの学生が個人的で身近な興味から始めて、他人や社会と共有できる建築へ発展させます。学部3年生の秋学期の課題（建築を学び初めて2年半）で自分の建築への興味の核を定めるのはやや早いような気もしますが、この時期だからできる自由な発想もあるはずです。建築はクライアントがいるので基本的に受身の仕事ですが、そのなかでも設計者の意思のようなものが必要だと思います。敷地やコストの条件があり、求められる機能や性能があるなかで、現代的にみんなが知っていて正しいと思っている合理だけではなく、新しい建築の価値や面白さをデザインの中に含められるか。それが将来的に建築設計に携わる原動力になると考えています。（河内一泰）

脈のある街

行書の特性を取り入れた空間の連続

栄 杏奈
Anna Sakae

行書には文字の点画を気持ち的につなげる「筆脈」がある。この筆脈を設計手法として応用し、鎌倉の裏道に潜む商店に取り入れていく。隣接する商店の空間を感覚的につなげ、静寂で人通りの少なかった裏道に人を引き込む。

内壁と外壁が混在し空間が交わる

担当教員コメント

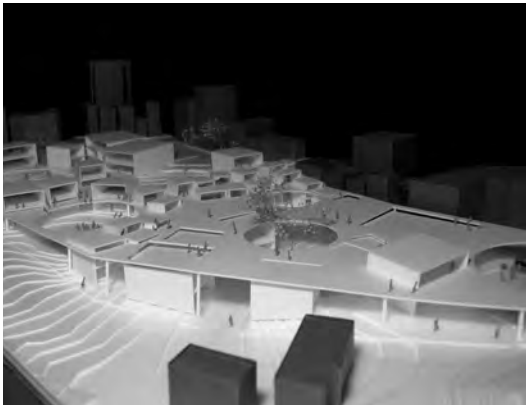
文字同士のつながりを表す筆脈からヒントを得て、箱の単位で分かれた建物同士をつなぐストーリーは説得力がある。閉じた箱の壁が開かれ、内外を含めた連続的な経験として街を捉える視点はとても面白い。(河内一泰)

地形を縫う

奇地形「痩せ尾根」から生まれる
街のかたち

木村 岳
Gaku Kimura

その街にしかないキャラクターをもつ「奇地形」に着目し、地形から生まれる街を創出する。代官山の「痩せ尾根」に潜む魅力を建物の配置等によって表出させることで、埋もれた地形を縫うように体感する街並みとなる。



担当教員コメント

その後の卒業設計につながるモチベーションを得た作品。奇地形・痩せ尾根など独自の言葉をつくることで既存地形のもつ価値を顕在化し、他者に地形の魅力的使い方の想起を促すことに成功している。（野口直人）

担当教員コメント

「巣」から建築を考える案。動物の巣は閉じた箱ではない。内外が連続しながら奥に居心地の良い場所をもっている。この集合住宅では住戸を閉じた箱にせず街や他の住戸への連続性をつくっている点が良い。（河内一泰）

生活の「境」を考える

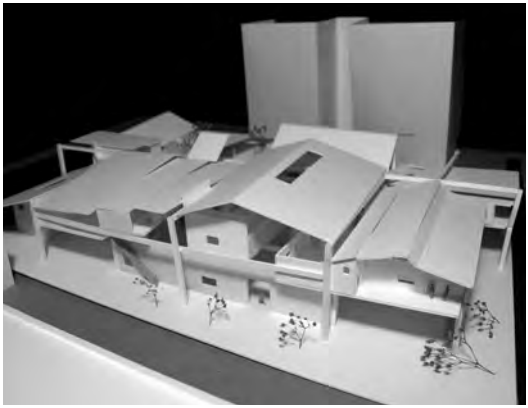
難波豪一
Goichi Namba

この課題では、さまざまな性格や趣味をもつ人が集まるシェアハウスを設定し、一人一人の「食べる」「寝る」といった生活行動に最適な（壁、屋根、床などの）境界を考えることで、日常が豊かになる提案をした。

分解して、再構築する

澁谷虎大
Kodai Shibuya

減少傾向にある大田区町工場。それを解決すべく区が建てたキューブ型の工場マンション「大田テクノコア」の形態に疑問を抱き、職と住のモジュールが混在する建築形態とフレームを用いて町工場を分解、再構築する。



担当教員コメント

町工場の大きな架構と住宅の小さな箱が混じり、2つのスケールが同時に存在する建築を目指した点はとても面白いと感じた。その同時性を体感できるような空間であればなお素晴らしかったと思う。（河内一泰）

混沌包むマチ

内外認識を多様化する設計手法の提案

山田康太
Kota Yamada

高円寺駅前の一街区に、既存建物の躯体と表裏を基準とした、図と地の反転による空間の再構築を行う。立体路地や外階段を介し渾然一体となった空間が、今まで閉鎖的・表面的であった高密度街に奥行きをもたせる。

担当教員コメント

高密度なまちの表層に現れる魅力を裏返すように建築の内部にも引き込み、街区全体をひとつの建築とした点が興味深い。現段階では感覚的であるが、その後の卒業設計につながる価値観を得たのではないだろうか。（野口直人）

建築設計論1　第1課題

銀座パーク

新しい公共的な多層建築のかたちを考える

担当教員：山崎俊裕、河内一泰
手塚由比、篠崎弘之、長谷川祥久

敷地は有楽町駅前の大通り交差点に面する角地です。2017年に旧ソニービルが解体され、高密度な商業地の街に余白をつくるというコンセプトでギンザソニーパークができました。2022年には公共スペース（パーク）を含んだソニーのショールームのビルを建てる予定とのことです。
この課題ではそのストーリーを引用して、公園のようなビルを設計してもらいます。日本人や海外の観光客など多くの人が集まる銀座の街にふさわしい文化施設とともに、歩道や広場、公園など屋外の公共スペースを立体的に織り上げ、新しい公共的な多層建築のかたちを提案してください。この課題では閉じた箱ではなく屋外や半屋外の空間を活用する新しい建築のかたちを期待しています。

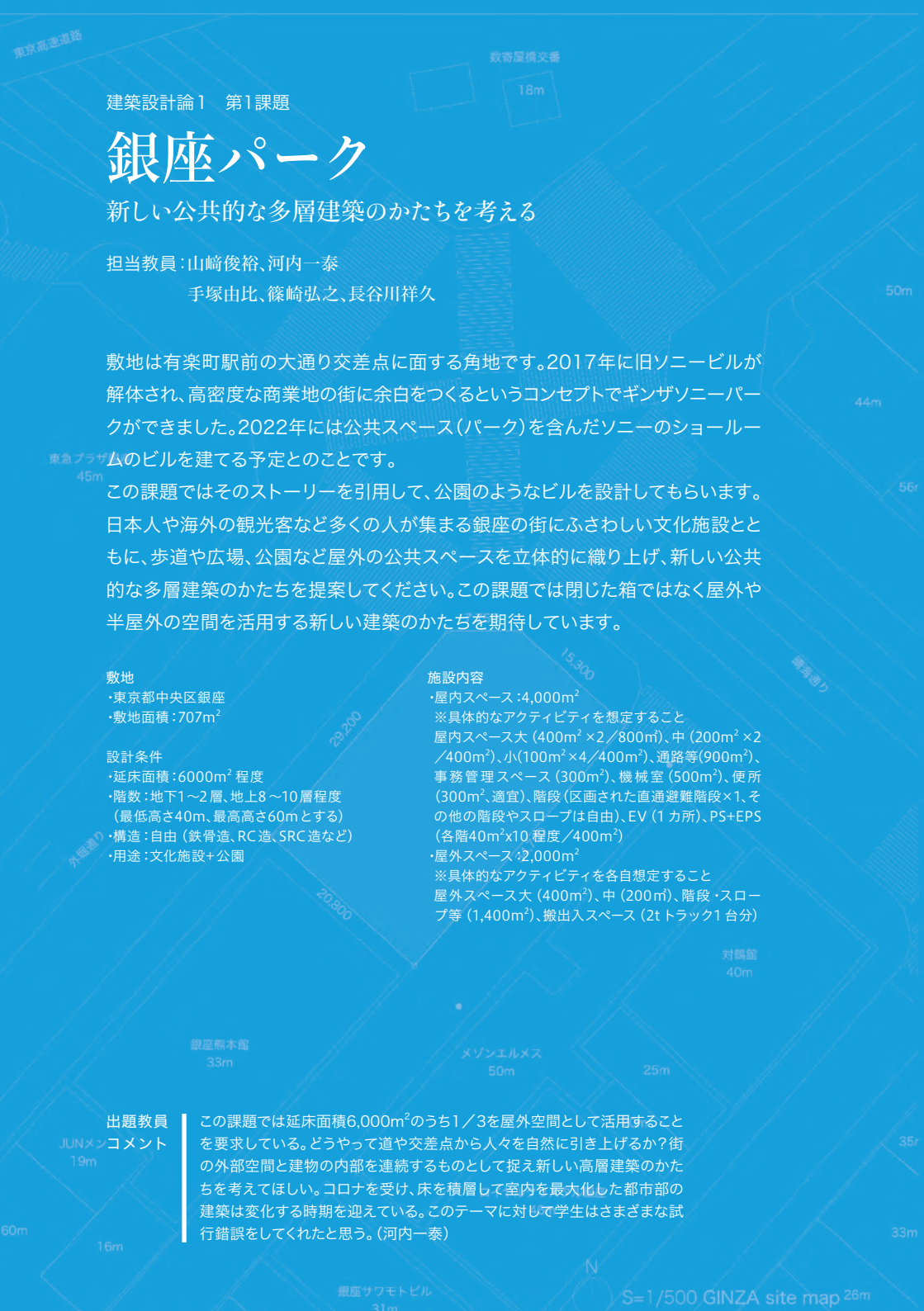
敷地
・東京都中央区銀座
・敷地面積：707m^2

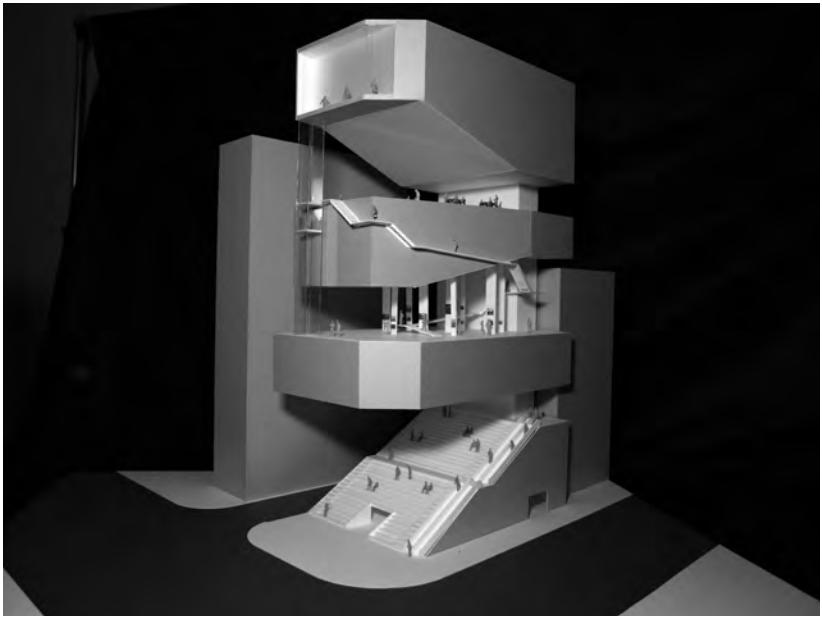
設計条件
・延床面積：6000m^2 程度
・階数：地下1～2層、地上8～10層程度
（最低高さ40m、最高高さ60mとする）
・構造：自由（鉄骨造、RC造、SRC造など）
・用途：文化施設+公園

施設内容
・屋内スペース：4,000m^2
※具体的なアクティビティを想定すること
屋内スペース大（400m^2×2／800㎡）、中（200m^2×2／400m^2）、小（100m^2×4／400m^2）、通路等（900m^2）、事務管理スペース（300m^2）、機械室（500m^2）、便所（300m^2、適宜）、階段（区画された直通避難階段×1、その他の階段やスロープは自由）、EV（1カ所）、PS+EPS（各階40m^{2}x10程度／400m^2）
・屋外スペース：2,000m^2
※具体的なアクティビティを各自想定すること
屋外スペース大（400m^2）、中（200㎡）、階段・スロープ等（1,400m^2）、搬出入スペース（2tトラック1台分）

出題教員コメント

この課題では延床面積6,000m^{2}のうち1／3を屋外空間として活用することを要求している。どうやって道や交差点から人々を自然に引き上げるか？街の外部空間と建物の内部を連続するものとして捉え新しい高層建築のかたちを考えてほしい。コロナを受け、床を積層して室内を最大化した都市部の建築は変化する時期を迎えている。このテーマに対して学生はさまざまな試行錯誤をしてくれたと思う。（河内一泰）



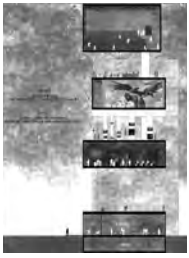


「都市の余白」

大渕光佑
Kosuke Obuchi

銀座の街に突然現れる余白。もともとソニービルがあったこの敷地は銀座のビル街に埋もれているが、今でも多くの人々が足を止める公園として機能している。この居心地の良い空間を備えた「都市の余白」を設計した。

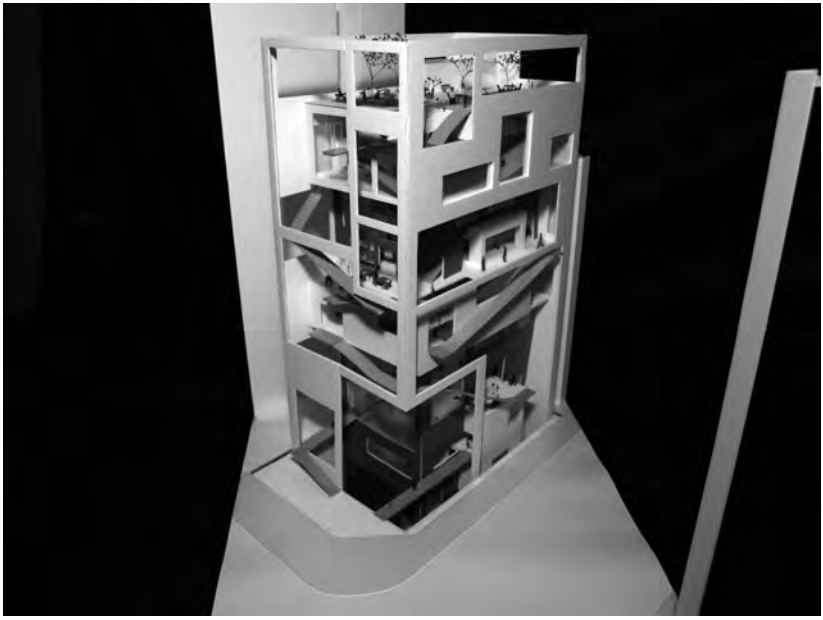
断面図1



断面図2

担当教員コメント

一見すると大味な造形に見えるが、有楽町駅前の巨大な交差点の対面する屋外空間として、適切な大きさで立体的に配置されている。屋内と屋外を表裏一体にして街を立体化する形式が面白い。（河内一泰）



寄り道ビル

斉藤朱音
Akane Saito

内外を分ける二重の壁と大きな開口を有するビル。子どもの遊び場や待合室、外国人観光客に向けた展示場、動物との触れ合いの場、イベントスペース、カフェ、レストラン、映画館、屋上庭園があり、さまざまな活動ができる。

担当教員コメント

タテヨコに多層的な入れ子形式の建築。内側の箱から外皮へ向かって開口率をあげ、要求面積の1/3を占める屋外空間を多重に配置している。高層建築にもかかわらず縦方向に伸びやかな空間をつくっている点が良い。（河内一泰）

ビルを貫くパーク

ニクソン・リン・ジュン・ユー
Nickson Lim Tjun Yuu

この建物は日本文化施設である。外の方とも交流ができるように、気軽に入れるパークのような公共スペースを地上階から上の階まで建物を斜めに貫くように設けた。パークを通して各スペースがつながり、コミュニティがつくれる。

担当教員コメント

角地であること、中層の高さであることの条件に上手くフィットする提案である。階高設定とは違うルールで挿入された、重層しながら形を変化させていく床的な要素によって人や活動の流れを立体的につくり出している。（篠崎弘之）

展開する路地

三尾圭祐
Keisuke Mio

銀座の表向きにはショッピングモールなどがあるが裏の路地に行くと喫茶店やバーが存在する独特な空間がある。そこに、銀座の表裏を路地でつなげるようなタワーパークを提案する。

担当教員コメント

銀座周辺特有の、大通りと路地がそれぞれの顔をもちながら混在している敷地環境を読み解き、それを全体の構成として取り込んだ意欲的な提案である。設定モジュールを利用しながら変化に富む空間をつくり出している。（篠崎弘之）

担当教員コメント

山田さんの案は、道からシームレスに上の階にスロープで上がっていける案です。床全体がスロープになっていて、そこを積極的に使っているところが良いです。ところどころ大きく外部化されていて、公園が立体化された感じに見えるところが魅力的です。（手塚由比）

Uplift Building

曖昧な境界性と交錯する時間

山田康太
Kota Yamada

少しずつ異なる起伏をもったスラブを積層させ、鉛直方向への緩やかな歩行体験を生み出す。ファサードに断面を見せることで、活動の見えない不透明な銀座で完結性のない広さをもった空間を体感させる。

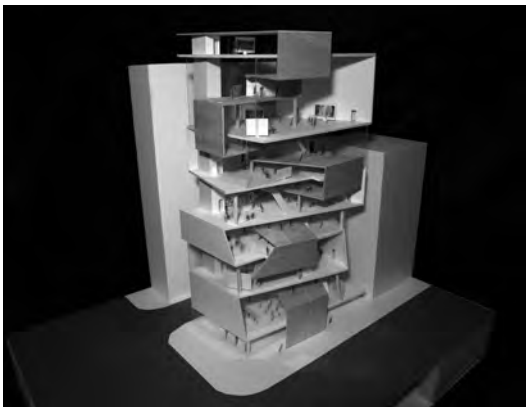
覗く・覗かせるビル

栄 杏奈
Anna Sakae

銀座には、ハイブランドのショーケースが数多く並んでおり、外から見る・覗くといった行為が多く生まれる場である。その銀座の特性を活かし、五角形の筒にコ型のキューブを差し込み覗く・覗かせるビルを提案する。

担当教員コメント

コの字で囲われた場所が自由に浮遊しているような建築。イメージは良いが、不透明なコの字を支えている半透明のガラスのシリンダーは構造の役割をもつはずである。構築と非構築の両面があればなお良いと思う。(河内一泰)



3IN Building

河野岳歩
Gakuho Kono

SONY の企業理念である3IN(誘う、刺激、織り込む) から空間を構成した。コトの帯とモノの帯を織り込む操作により、モノとコトのアクティビティを生み、そこにヒトが混じわることで、新たな「遊び場」が生まれる。

担当教員コメント

下層から上層につづら折れ状の壁とスラブを連続させることで、都市の立体回遊が具現化された作品といえる。巧妙に仕込まれた空間操作で形成されたシーケンシャルな空間は、ランドマークとしての魅力も大いに感じられる。(山﨑俊裕)

建築設計論1　第2課題

代官山スポーツ･カルチャーパーク

スポーツを楽しみ、その空間を利用した文化･交流のための公共空間

担当教員：山崎俊裕、河内一泰
手塚由比、篠崎弘之、長谷川祥久

敷地は、代官山T-SITEとその周辺の場所です。この場所にスポーツを楽しむ場所、スポーツを通して交流･練習する場所、知識を得る、グループ活動や支援を受ける場所をつくります。スポーツは、種類によって空間のサイズが決まっています。敷地には限度がありますので、都心の良好な環境のなかで、スポーツとそれを介した交流がより活発に行われると思える競技を選定してください。この課題は、必要となるさまざまな規模の空間を調査し、把握し、その大きさを体感してイメージしたうえで、リアリティをもって人々の活動を想像し、空間を構想することを目的としています。人々の個々の公共空間の使い方の例はすでに敷地に提案されています。そこに、少し大きな規模の空間で、多数の人々が同時に利用、鑑賞できる空間を含めて、施設全体がスポーツと文化の新しい公共空間となるように計画してください。

敷地
･代官山T-SITE とその周辺敷地
･容積率：300%
･建ぺい率：60%
･用途地域：第二種中高層住居専用地域

設計条件
･延べ床面積：6,000m^2 程度
（内外のスポーツ施設を含む）
･構造：自由
･階数：地下1 ～2 階、地上3 階程度（高さ2m まで）

施設内容
･スポーツ施設（競技を決め、それが可能な施設と観客席500 席程度、1000m^2 ～1500m^2）、屋外イベント広場兼運動場（適宜）、準備･更衣･洗面シャワー･トイレ･休憩･備品倉庫等（合計300m^2）、トレーニングルーム（400m^2）、ワークスタジオ（400m^2）、展示スペース（400m^2）、さまざまな用途に用いる貸しスタジオ（60m^{2}x3室）、ロビー空間（1000m^2、閲覧･椅子スペース300m^2 を含む）、カフェ（200m^2、屋外テラス100m^2 を含む）、レストラン（200m^2、屋外テラス100m^2 を含む）、スポーツショップ（100m^2、スポーツ施設やロビー空間の一部に取り込むことも可とする）、ストックヤード（100m^2）、事務管理スペース（100m^2）、トイレ（各所に合計100m^2）、車寄せ、身障者駐車場（2 台）、搬出入車スペース、搬入口、倉庫･機械室（300m^2）、その他共用部分

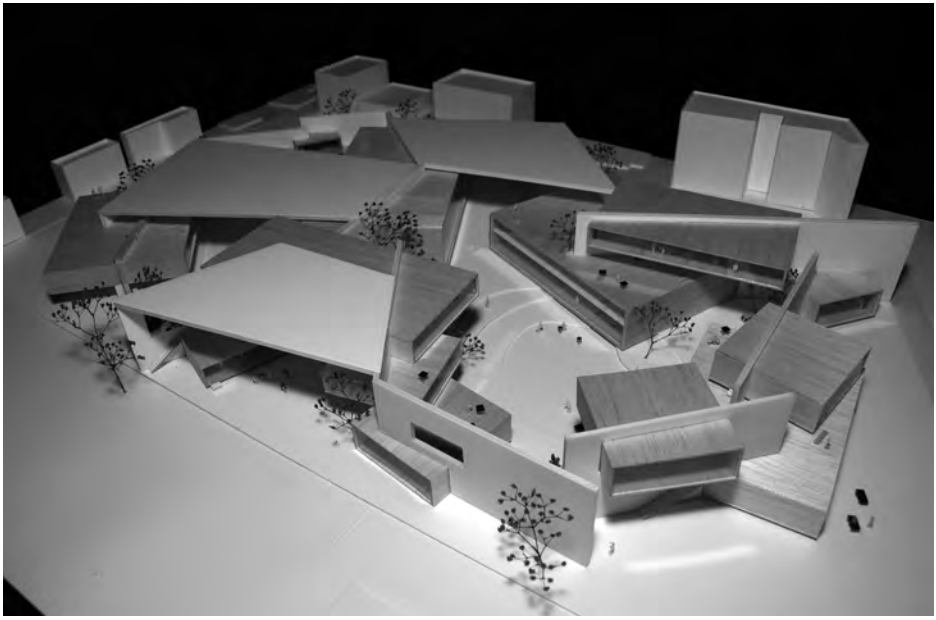
出題教員コメント

スポーツの空間は種目それぞれに形と大きさがあります。通常は安全面や光や音の環境から閉じた箱の中で行われ、観戦する場所も限られています。またスポーツは体育館やフィールドによって、どの街でも行うことができるコンテンツです。この課題では、代官山の街の空間（カルチャー）とスポーツの空間を混ぜ、この敷地ならではの形で街の人とスポーツが出会う建築をつくってほしいと考えています。（河内一泰）

DAIKANYAMA site map

N

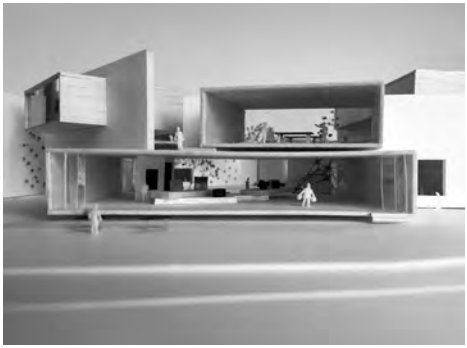
S=1/1000



代官山スクリーン

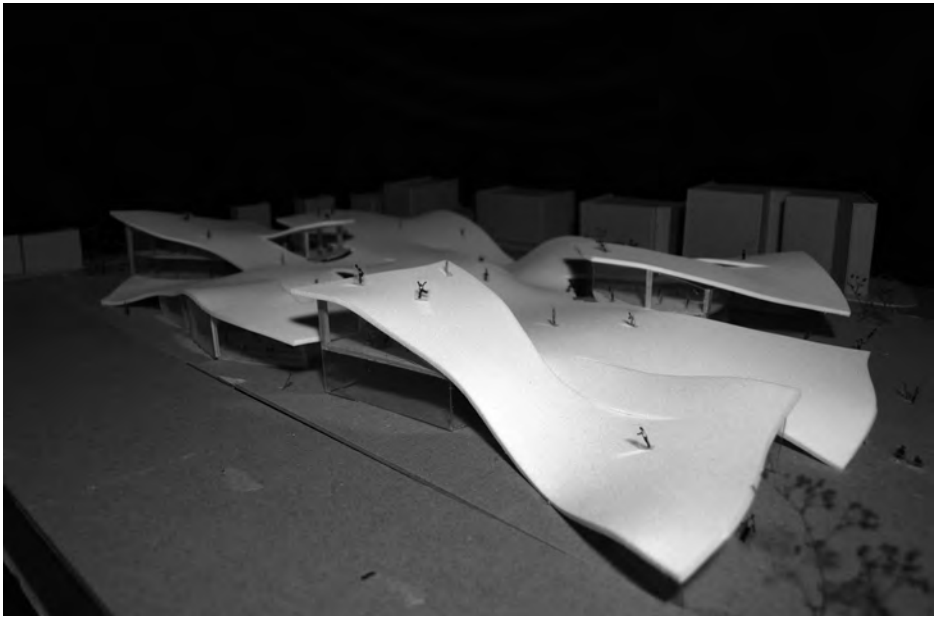
ニクソン・リン・ジュン・ユー
Nickson Lim Tjun Yuu

この建物はスポーツを中心とした複合施設であり、機能の異なる部屋がそれぞれワンボックスでつくられている。そこに生活のシーンを見せるための開口部を、配置を工夫しながら設け、人々のつながりを生み出している。



担当教員コメント

機能的に完結したボックスとそれを貫きつなげる壁という2つの要素だけで全体をつくりあげている案である。シンプルな要素でありながらも、その配置や交わり方をあえてルール化しないことで複雑性を生み出している。（篠崎弘之）



多様な空間

栄 杏奈
Anna Sakae

代官山は日常的にさまざまな人が集結することから誰もがどんなスポーツでも楽しめる空間を提案した。周辺環境に沿って起伏をつけた1枚の屋根を敷き、上ではスケボーを下ではその起伏によって応じたスポーツが楽しめる。

担当教員コメント

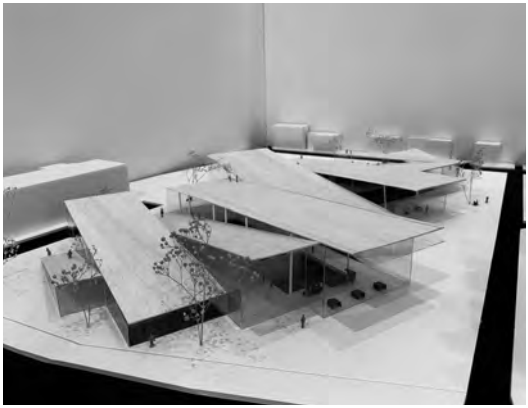
スポーツ・カルチャーパークというテーマに対して、分節された曲面屋根を媒介として魅力的な空間・場が各所に巧妙に計画され、建物全体は軽やかで羽衣のような美しいランドスケープを形成する作品となっている。(山﨑俊裕)

重なる時間

木村 岳

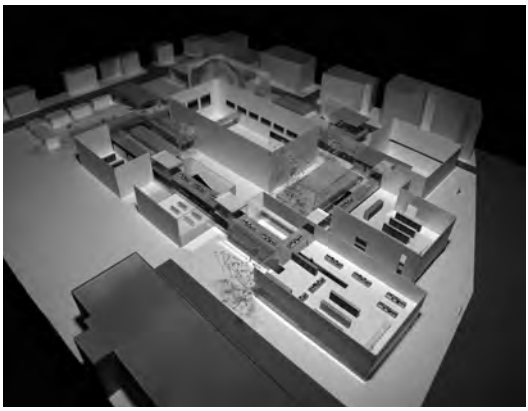
Gaku Kimura

代官山の落ち着いた空間の中に、スポーツのスピード感をもった空間を融合させる。地下に短距離走のレーンを設けることで、地上階の日常のなかに吹き抜けを介して瞬間的に非日常が現れる刺激のある生活空間が生まれる。



担当教員コメント

木村さんの案は、片流れになった屋根が地面に擦りついていて、屋根の上に上がって行ける案です。屋根の傾きが交互に切り替わるようになっていて、その屋根を渡り歩きながら敷地の奥まで行けるところがいいです。傾きによって人が座ったりする居場所ができそうです。（手塚由比）



担当教員コメント

大小の空間をつなげるように回遊性のある回廊でつなげていくことで、さまざまな出会いと体験を生み出している。スポーツセンターという機能に相応しく、活動そのものが場所をつくりながら、高い設計力で構成している。（篠崎弘之）

散策を建築する

難波豪一

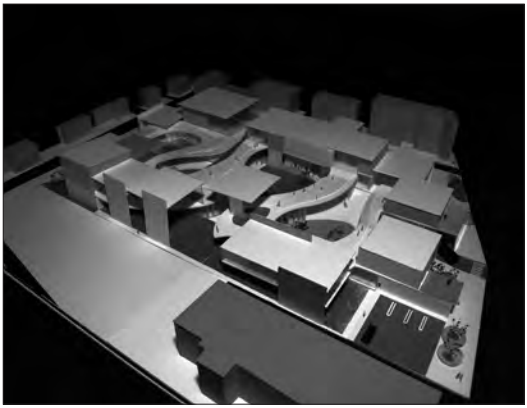
Goichi Nanba

代官山の魅力である「散策」を建築に落とし込む。本課題では、さまざまなスポーツ施設を敷地全体に配し、それらを縫うように図書館機能をもった通路が通ることで、思いがけない出会いや発見に満ちた建築空間を設計した。

弓矢の杜

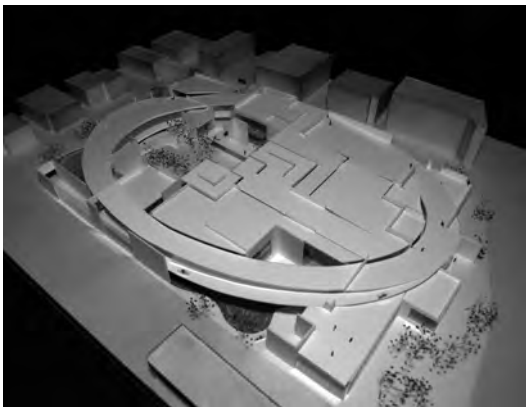
雨宮 巧
Takumi Amemiya

アーチェリーは有名なスポーツであるが、日本では弓道の方が親しまれている。そこでこの2つを「見て」「体験して」「比較」できる施設を提案する。凹凸のある空間を巡る中で交流が生まれ、互いの文化を知るきっかけを生む。



担当教員コメント

競技用の直線的な空間と対比的に回遊動線を曲線的にからめていく平面構成は明快である。しかし競技用の空間のスケールや階高が小さい点がやや残念である。直線の空間性をもっと差別化しても良かったのではないか。(河内一泰)



担当教員コメント

代官山の小さなの街のスケールを引き込んだような諸室の配置に大きな楕円の自転車の道を重ねた構成は面白い。異なる速度の世界が接している境界は具体的にどうなっているのか、興味をそそられる作品である。(河内一泰)

代官山Cycle Terminal

多種多様なバイカーと
代官山来訪者を繋ぐ道の駅

山田康太
Kota Yamada

閉じ切らない不完全なヴォリュームに自転車が通行できる楕円形の道を貫入し、さまざまな速度をもった人の流れと場を生み出す。場面の切り替わりやあやふやな境界性により、新たな自転車競技の発信と交流を促進する。

ぜひ行って見て欲しい、
美しい集落
「アルベロベッロの美しい屋根波 トゥルッリ」
（世界遺産）イタリア［写真：渡邉研司］

ぜひ行って見て欲しい、
歴史的建築物の保存と再生
「ドイツ連邦議会新議事堂 屋上ドーム」ドイツ ベルリン
（設計：ノーマン・フォスター、1992〜1999年）［写真：山﨑俊裕］

研究室紹介06　laboratory 06

建築の「なぜ?」を解き明かす

飛騨高山へのゼミ旅行（左端が小沢先生）

小沢朝江

Asae Ozawa

［教授／日本建築史・近代建築史］

1963年神奈川県横浜市生まれ。東京理科大学工学部建築学科卒業、神奈川大学大学院修士課程修了。湘北短期大学助手を経て、2002年東海大学助教授、2007年より現職。1999年度日本建築学会奨励賞受賞。著書に『和室学―世界で日本にしかない空間』（共著、平凡社）、『住まいの生命力―清水組住宅の100年』（共著、柏書房）、『明治の皇室建築―国家が求めた〈和風〉像』（吉川弘文館）、『日本住居史』（共著、吉川弘文館）など。

建築史は、建築の「なぜ?」を解き明かす学問です。ある建築が、いつ、誰によって、何のために、どのようにつくられたのか?平面やデザインにどんな思想が込められたのか?それを実測や痕跡調査、史料から探ります。実際に建築を見たり、町を歩いたりするのは基本中の基本で、ゼミの学生と一緒に日本全国を飛び回っています。

建築史を選んだきっかけは、大学3年の時に他大学の調査に飛び入り参加したこと。実際の建物を測り、屋根裏や床下まで調べ、自分の手で図面を描いて初めて、建築を深く知った気がしました。建築はモノを言わないけれど、人の生活や社会・思想の変化を秘めた存在で、その声なき声を「聞く」ことがこの学問の楽しさです。近年は、古建築や歴史的景観の保存、和室文化を継承するための子ども向けのイベントなど地域に関わる仕事も多く、神奈川県藤沢市・茅ヶ崎市・伊勢原市等で自治体やNPOと協力して活動しています。

学生に一番言いたいのは、建築を好きになってほしいということ。建築は、実際に見て、空間を体験して、知れば知るほど面白くなる。生活のどんな場面にも関わる身近な存在だけど、奥深い。「好きになる」ことがその魅力を知る第一歩になるはずです。

研究室紹介07　laboratory 07

晴耕雨読。建築を全身で感じて、深く考えること

ゼミ生と入門ゼミ1年生合同の江戸東京たてもの園でのスケッチ会（後列右端が渡邉先生）

渡邉研司

Kenji Watanabe

［教授／近代建築史・建築論・保存再生］

1961年福岡市生まれ。日本大学大学院修士課程修了。芦原建築設計研究所で公共施設および都市事務所ビルの設計を担当。AA Graduate School留学。帰国後、博士（工学）取得。2005年本学助教授。2011年より現職。DOCOMOMO日本支部代表。著書に『論文はデザインだ！』（彰国社）、『ロンドン建築と都市の歴史』（河出書房新社）、訳書として『世界の廃墟・遺跡60』（東京書籍）『オーヴ・アラップ 20世紀のマスタービルダー』（東海大学出版部）。

大学院生の時にバックパッカーとしてヨーロッパ、モロッコ、トルコを1カ月半にわたって一人旅をしてきました。現地で購入した4冊のスケッチブックに建築や都市、集落、人間、風景などを描き、その時の経験が私の建築に向き合う姿勢となっていると思います。それは、晴耕雨読。晴れたなら建築を自分の目で見て、手を動かして描き、全身で建築を感じること。雨が降れば本を読んで自分の頭で建築を考えてみる。AI社会がすぐそこまで来ている今だからこそ、学生たちに実践させたい建築の学び方だと考えています。大学院を出て建築家の芦原義信さんが主宰する設計事務所で、建築設計の基本を学びました。設計図面の描き方もあるのですが、もっと重要なこととして人間関係つまりコミュニケーションの築き方があります。これもSNSなど便利なツールがある時代だからこそ、おろそかになりがちな人間がもつべき能力であり、直接人と出会い、話をして、顔色、声色などから関わり方を判断すること、これも若い時に身につける大切なことだと思います。最近は、留学するという学生は減ってきていますが、私の場合、建築に対するスキルを身につけ、一級建築士の資格を取ったうえで英国に行ったことで、さまざまな経験をすることができました。ただ、結婚が遅れてしまいましたが（笑）。

研究室紹介08　laboratory 08

要するに、何に困っているの？

2020年度のコロナ禍で着任し、1期生と初めて撮った卒業式での集合写真
（左から5番目が後藤先生）

後藤 純

Jun Goto

［特任准教授／比較都市計画、
協働のまちづくり、総合老年学］

1979年群馬県生まれ。東京理科大学理工学部建築学科卒、東京大学大学院都市工学専攻博士課程修了。博士（工学）。東京大学高齢社会総合研究機構特任講師を経て、2020年度より現職。2011年日本都市計画学会論文奨励賞、2013年・2015年グッドデザイン賞。著書に『コミュニティデザイン学』（東大出版会）など。

私たちの都市・まち・むらを、人口減少や超高齢社会に対応した、暮らしやすく何世代にも渡って住み続けられるような人間生活圏（ハビタット）へと成熟させていく、新しいまちづくりの技術と理論について研究しています。

高齢化の進む郊外住宅地や空き地の増える地方都市の中心市街地など、まちはいまさまざまな課題を抱えています。まちづくりの難しいところは、まちの課題といっても、たとえば「病気」と「健康」のような明確な境目がないことです。鎌倉や京都などの細い路地は交通の面から見れば課題ですが、街並みの面から見ると地域の個性（魅力）であるとも考えられます。課題か個性かを巡って、住民同士の価値観が対立することもあるのです。

当研究室は、都市・まち・むらにおける私たちの生活に、いまどのような課題が生じているか、それはなぜか、このまま何もしないで放っておくとどうなるのかを、実証的に明らかにすることに関心があります。そのために必要であれば、建築学だけでなく、法学や経済学、社会学や哲学、福祉論や医学などにも関心をもち、さまざまな学問領域、実務家や住民と連携して、まちづくりに科学的に取り組みたいという、意気込みだけはある研究室です。

ぜひ行って見て欲しい、
都市のシンボルとして存在する美術館
「ビルバオ・グッゲンハイム美術館」スペイン ビルバオ市
（設計：フランク・オーウェン・ゲーリー、1997年）［写真：鈴木裕一］

ぜひ行って見て欲しい、
美しい木造の大学図書館
「国際教養大学 中嶋記念図書館」秋田市
（設計：仙田満＋環境デザイン・コスモス設計
共同企業体、2008年）［写真：山﨑俊裕］

6 semester（新型コロナ対応で３年秋学期開講）

建築デザイン演習５（旧 建築設計論１）2020年度

Architectural Design 5
(Former Architectural Design Theory and Practice 1), 2020

建築デザイン演習5　第1課題

銀座パーク

新しい公共的な多層建築のかたちを考える

担当教員：渡邉研司、河内一泰
手塚由比、篠崎弘之、長谷川祥久

敷地は有楽町駅前の大通り交差点に面する角地です。2017年に旧ソニービルが解体され、高密度な商業地の街に余白をつくるというコンセプトでギンザソニーパークができました。2022年には公共スペース（パーク）を含んだソニーのショールームのビルを建てる予定とのことです。

この課題ではそのストーリーを引用して、公園のようなビルを設計してもらいます。日本人や海外の観光客など多くの人が集まる銀座の街にふさわしい文化施設とともに、歩道や広場、公園など屋外の公共スペースを立体的に織り上げ、新しい公共的な多層建築のかたちを提案してください。2020年のコロナウイルス感染症拡大により、都市における人の集まり方や居場所が変化し始めています。この課題では閉じた箱ではなく屋外や半屋外の空間を活用する新しい建築のかたちを期待しています。

敷地
・東京都中央区銀座
・敷地面積：707m^2

設計条件
・延床面積：6000m^2 程度
・階数：地下1～2層、地上8～10層程度
（最低高さ40m、最高高さ60mとする）
・構造：自由（鉄骨造、RC造、SRC造など）
・用途：文化施設＋公園

施設内容
・屋内スペース：4,000m^2
※具体的なアクティビティを想定すること
屋内スペース大（400m^2×2／800m^2）、中（200m^2×2／400m^2）、小（100m^2×4／400m^2）、通路等（900m^2）、事務管理スペース（300m^2）、機械室（500m^2）、便所（300m^2、適宜）、階段（区画された直通避難階段×1、その他の階段やスロープは自由）、EV（1カ所）、PS+EPS（各階40m^{2}x10程度／400m^2）
・屋外スペース：2,000m^2
※具体的なアクティビティを各自想定すること
屋外スペース大（400m^2）、中（200m^2）、階段・スロープ等（1,400m^2）、搬出入スペース（2tトラック1台分）

出題教員コメント

この課題では延床面積6,000m^{2}のうち1／3を屋外空間として活用することを要求している。どうやって道や交差点から人々を自然に引き上げるか？街の外部空間と建物の内部を連続するものとして捉え新しい高層建築のかたちを考えてほしい。コロナを受け、床を積層して室内を最大化した都市部の建築は変化する時期を迎えている。このテーマに対して学生はさまざまな試行錯誤をしてくれたと思う。（河内一泰）

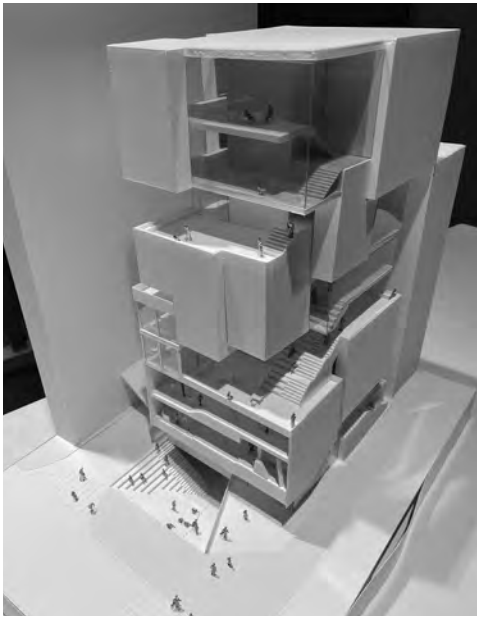
ノマドの巣窟

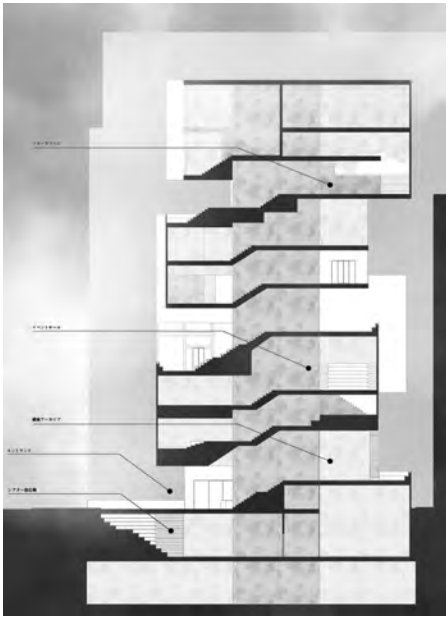
太田 匠
Takumi Ota

銀座本来の主人公を再考し、公園のようにビジネスにおけるさまざまな空間性を高層建築の中で立体的に組み上げる。どこでも仕事が出来る現在、目的に応じた街があるように銀座が仕事をしに行く街となる、その第一歩を踏み出す建築を目指す。

担当教員コメント

都市的なスケールでのこれからの銀座のあり方を表現していくことを主題に捉えた、大変魅力的な提案である。機能的な分析と全体の造形の関係性として、建築をつくりあげるための現代的な新しい手法となっている。（篠崎弘之）





価値の累乗

五十嵐拓巳
Takumi Igarashi

螺旋状にボリュームが巻き上がるビルである。銀座にはモードとクラシックのコンテンツが乖離的に存在している。それらを集積することで気付きと選択が連続する新たな銀座における商業施設のモデルとなる。

プロジェクションマッピングで、銀座のアーカイブを映し出す

担当教員コメント

銀座周辺の主な建物の規模や歴史性を調べ、それらを巡るルートを立体化し、なおかつ新しさと伝統というカテゴリーで建物内の機能と空間をまとめ上げており、その造形力並びに表現力において優れた作品となっている。（渡邉研司）

銀座スカイビル

佐藤裕輝
Yuki Sato

銀座のビル群はファサードにさまざまな要素を足すことによってお互いに主張し合っている。そこからファサードの引き算をすることによって銀座の余白が生まれるのではないかと考えた。

歩行の可能性

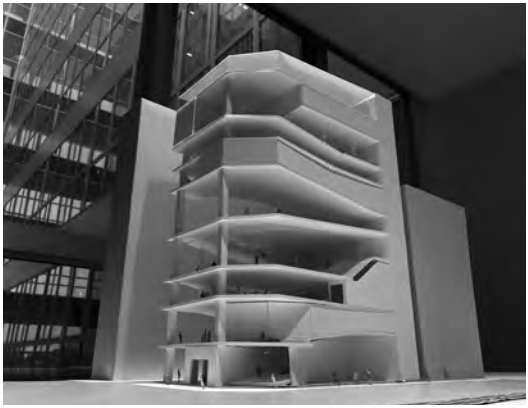
土谷野絵
Noe Tsuchiya

道をひとつ挟んでブランドショップと路地裏の居酒屋という正反対の空間が存在することは銀座の隠れた魅力である。2つの空間をずらしそこに銀座の始まりともいえる道を通すことで銀座らしくも新しい場所が生まれる。

Migratory

夏目 健
Takeru Natsume

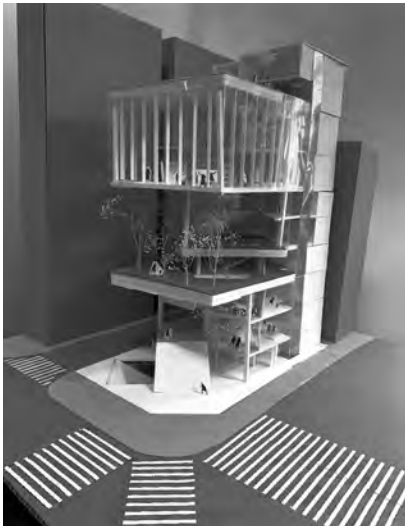
スロープ式の新しいウィンドウショッピングを軸とした提案。スロープで起こるアクティビティはフラットな床で起こるものとは違い、機能と機能を緩やかにつなぐ効果を生み出し、建物全体として楽しさを提供できる。



銀座のオアシス

須藤有弥
Aya Sudo

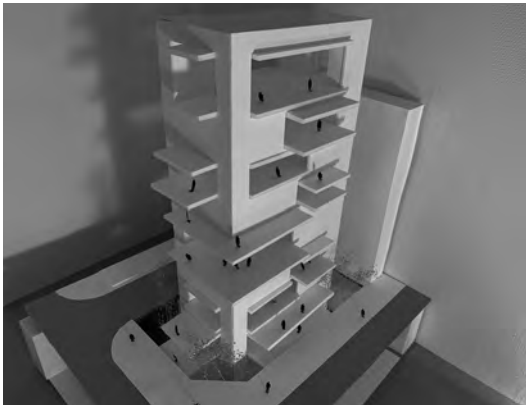
大人の街というイメージが強い銀座で、気軽にフラッと立ち寄れるようなオアシス的空間を提案した。階段を大通りに対し45度振り、木を囲うように配置し、中のアクティビティが外からでも見やすく、入りやすくなるようにした。



デマドから。

蒲谷勇太
Yuta Kabaya

従来の開口部の垂直方向を操作してスラブを発生させ、「デマド」という内外部空間を生み出した。デマドからスラブ・内外部空間・人の居場所・人のアクティビティが順に生まれ、デマドから緩やかに銀座の街につながる。



積層する森

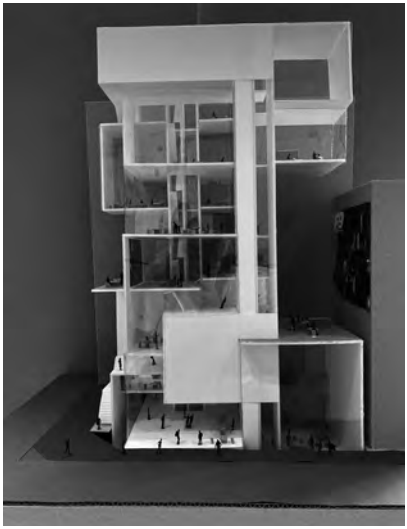
佐藤拓海
Takumi Sato

高層ビルが並ぶ銀座の街に柔軟性をもたせるため、森を積層する形式を用いた。木々が建築を覆うことで建築と自然が一体となり、類似したファサードが並列する銀座に新たな風景が形成される。

［銀座パーク］

岩瀬和宏
Kazuhiro Iwase

隣接する建物の壁を活用し、壁・床・屋根をボリュームの異なったコの字で積層させ、屋外・半屋外・屋内を明確に区別するのではなく、混在させて計画し、銀座の喧騒の中にも人がたまりやすい空間を演出した。



銀座の息抜き
凹凸がつなぐ

鈴木裕稀
Yuki Suzuki

高密度な商業地に新しく必要なものは、息抜きの場であると考えるがそれは平面的な余白ではない。断面的に余白を創り出し、銀座の息抜きの場として周囲の環境を生かしつつ、空間や人々を立体的に引き込みつないでいく。

建築デザイン演習5　第2課題

代官山スポーツ・カルチャーパーク

スポーツを楽しみ、その空間を利用した文化・交流のための公共空間

担当教員：渡邉研司、河内一泰
手塚由比、篠崎弘之、長谷川祥久

敷地は、代官山T-SITEとその周辺の場所です。この場所にスポーツを楽しむ場所、スポーツを通して交流・練習する場所、知識を得る、グループ活動や支援を受ける場所をつくります。スポーツは、種類によって空間のサイズが決まっています。敷地には限度がありますので、都心の良好な環境のなかで、スポーツとそれを介した交流がより活発に行われると思える競技を選定してください。この課題は、必要となるさまざまな規模の空間を調査し、把握し、その大きさを体感してイメージしたうえで、リアリティをもって人々の活動を想像し、空間を構想することを目的としています。人々の個々の公共空間の使い方の例はすでに敷地に提案されています。そこに、少し大きな規模の空間で、多数の人々が同時に利用、鑑賞できる空間を含めて、施設全体がスポーツと文化の新しい公共空間となるように計画してください。

設計条件
敷地
・代官山T-SITE とその周辺敷地
・容積率 :300%
・建ぺい率 :60%
・用途地域 :第二種中高層住居専用地域

設計条件
・延べ床面積 :6,000m^2 程度
（内外のスポーツ施設を含む）
・構造 :自由
・階数 :地下1 ～2 階、地上3 階程度（高さ2m まで）

施設内容
・スポーツ施設（競技を決め、それが可能な施設と観客席500 席程度、1000m^2 ～1500m^2）、屋外イベント広場兼運動場（適宜）、準備・更衣・洗面シャワー・トイレ・休憩・備品倉庫等（合計300m^2）、トレーニングルーム（400m^2）、ワークスタジオ（400m^2）、展示スペース（400m^2）、さまざまな用途に用いる貸しスタジオ（60m^{2}x3 室）、ロビー空間（1000m^2、閲覧・椅子スペース300m^2 を含む）、カフェ（200m^2、屋外テラス100m^2 を含む）、レストラン（200m^2、屋外テラス100m^2 を含む）、スポーツショップ（100m^2、スポーツ施設やロビー空間の一部に取り込むことも可とする）、ストックヤード（100m^2）、事務管理スペース（100m^2）、トイレ（各所に合計100m^2）、車寄せ、身障者駐車場（2 台）、搬出入車スペース、搬入口、倉庫・機械室（300m^2）、その他共用部分

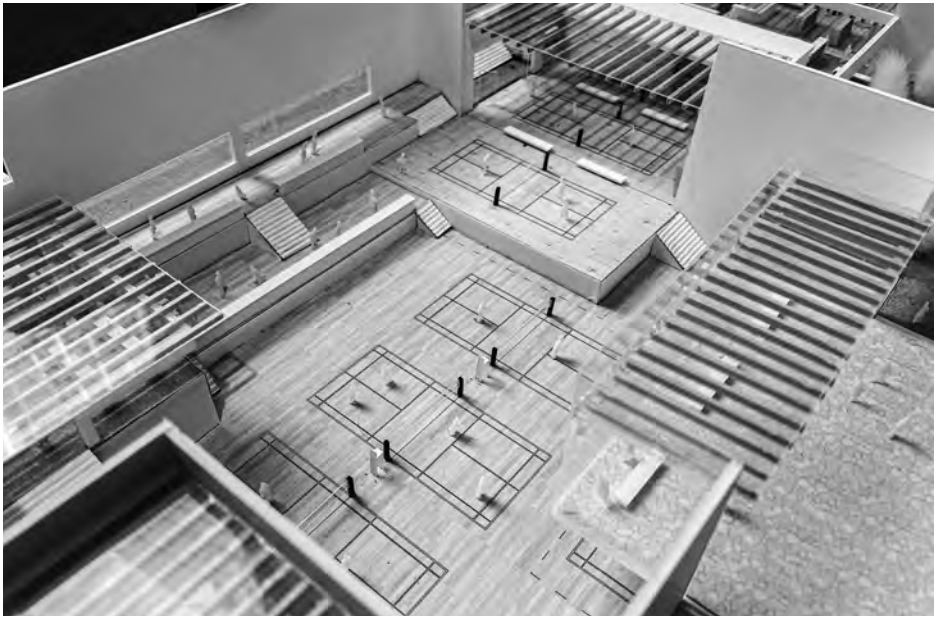
出題教員コメント

スポーツの空間は種目それぞれに形と大きさがあります。通常は安全面や光や音の環境から閉じた箱の中で行われ、観戦する場所も限られています。またスポーツは体育館やフィールドによって、どの街でも行うことができるコンテンツです。この課題では、代官山の街の空間（カルチャー）とスポーツの空間を混ぜ、この敷地ならではの形で街の人とスポーツが出会う建築をつくってほしいと考えています。（河内一泰）

DAIKANYAMA site map

N

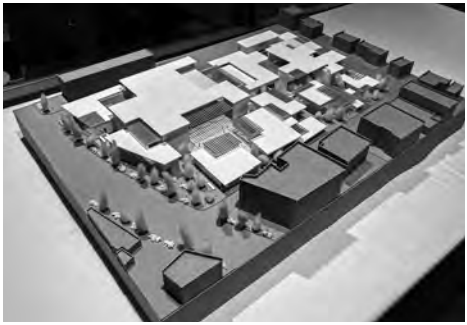
S=1/1000



放物線が架ける代官山とスポーツ

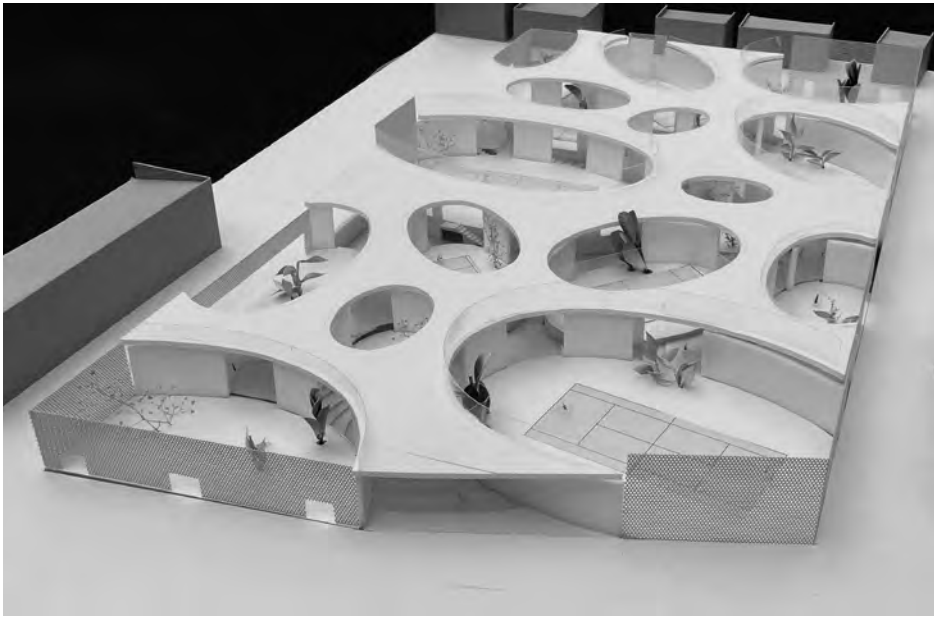
太田 匠
Takumi Ota

代官山とは一見相容れないスポーツセンターをスケールのシークエンスをもって共存させる。段階的に変化していくプログラムは時期に呼応して入れ替わり「街の個性」と「スポーツ」の二面性をもった複合施設となる。



担当教員コメント

本格的にスポーツをする場所とカジュアルに楽しむ場所、街の人が散策する場所など異なる種類の空間の交わりをベン図の形式を用いて解こうとした建築である。周辺の街から建物内部まで連続的に捉える視点が良い。(河内一泰)



代官山アレーサイド

菅谷有祐
Yusuke Sugaya

外部空間を、楕円形の外周をもつ分棟として敷地に配置する。棟と棟の間に屋根を架け、代官山の道と連続した上下の起伏をつくる。テニスや広場で使う外部の水平面は内部の上下する鑑賞空間と対比し、内外が反転する。

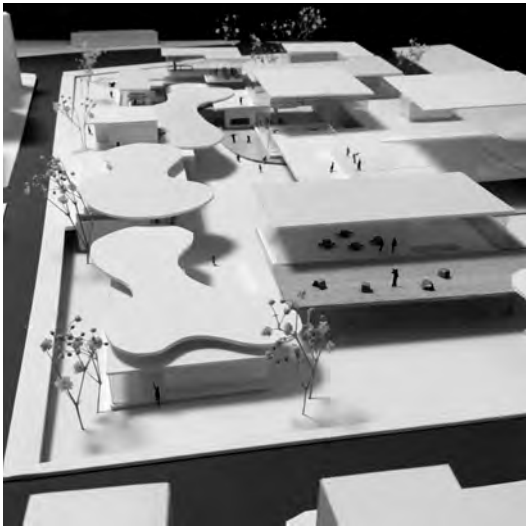
担当教員コメント

通常、街区を構成する空間のポジネガを反転させながら、主体となるスポーツ施設であるテニス場を円形空間として地下に埋め込んだことで、傾斜を有した独特の地下街のような街並みを構成することができている。（渡邉研司）

まちから始まる物語

木村莉彩
Risa Kimura

代官山の良さとは、歩みを進めるたびに新たな発見をする楽しさである。スポーツ空間とそれ以外の空間が所々でつながりをもつように配置することで、街を歩いた際に自然とスポーツ空間に招かれるような構成にした。

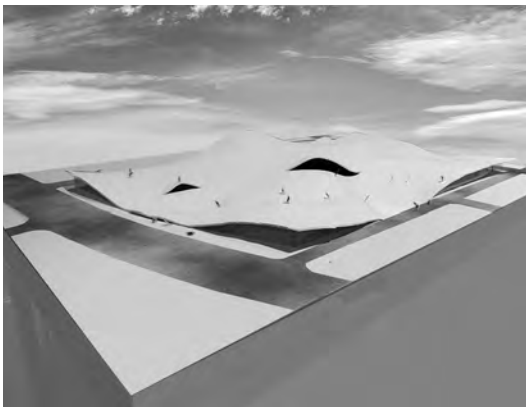


Become one

スケートボーダーを核とした交流の施設

松本乙希
Itsuki Matsumoto

街中のスケートボーダーは敵対視されている。そこで代官山という敷居の高い場所にスケートパークを提案する。代官山の地形がもつ、有機的な曲面を建築に取り込んだ。それにより、さまざまな人のセクションが生まれた。



床・柱・屋根全てが競技場

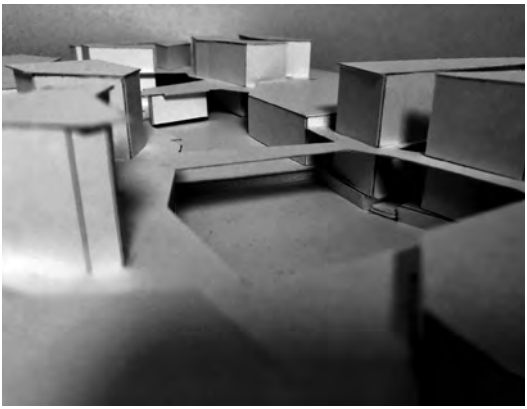
相沢悠斗
Yuto Aizawa

代官山にパルクール施設を提案した。屋根、柱、床すべてを競技会場とすることで、観客がプロの選手を近い距離で見ることができる。安全性や商業性を保つため、競技レベルを3段階に分類し、領域を分けている。

うらの代官山

佐藤拓海
Takumi Sato

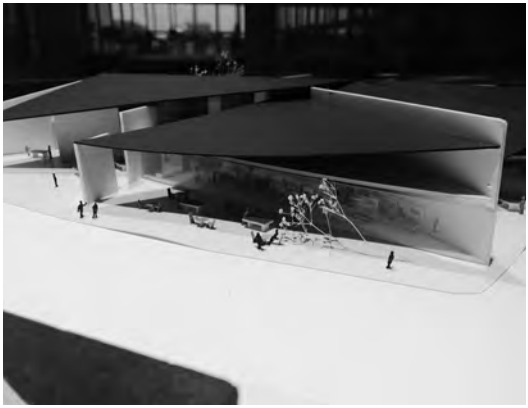
お洒落で静的な都市・代官山の裏側には、生活感のある雑然とした空間が存在する。ストリートスポーツが行われている中庭を回遊するよう建物が分割され、都市の表裏が一体となった空間を提案する。



卓球する人しない人

後藤龍之介
Ryunosuke Goto

近年、卓球の事業が拡大しつつある。カフェなどの商業施設に卓球が介入することで、人との関係が活発化されている。代官山でさまざまな種類の卓球を交わらせることによって、人々の行動を誘発させる提案である。

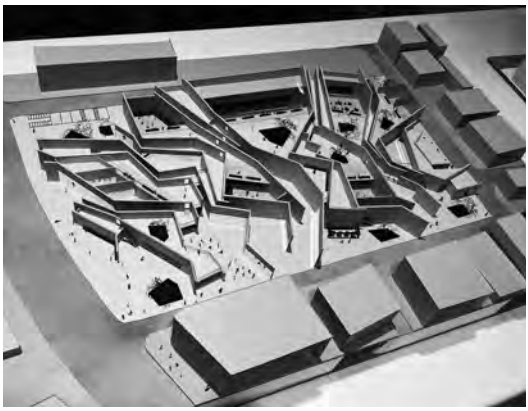


CULTURAL LAYERS

dance×daikanyama

五十嵐拓巳
Takumi Igarashi

ダンスを選定スポーツとしてダンスカルチャーを代官山に落とし込む。レイヤー状の壁よって構成される空間は、タテヨコそれぞれに対し熟練度とジャンルのグラデーションを展開し、利用者の行動意欲を刺激する。



ぜひ行って見て欲しい、
美しいランドスケープと建築
「風の丘葬祭場」大分県中津市
（設計：槇文彦、1996年）［写真：山﨑俊裕］

ぜひ行って見て欲しい、
大学キャンパスの象徴的建築
「イリノイ工科大学 クラウンホール」アメリカ シカゴ市
（設計：ミース・ファン・デル・ローエ、1956年）［写真：山﨑俊裕］

学生インタビュー　Student Interview

渡邉優太

Yuta Watanabe

［東京建築士会「住宅課題賞2020」
審査員賞受賞／4年次生］

1999年生まれ。2018年千葉県安房高等学校卒業。現4年次生。東京建築士会「住宅課題賞2020」古澤賞受賞。

学外の賞へ挑戦する

東京建築士会による「第20回住宅課題賞2020」にて当時3年生の渡邉優太さんが「古澤賞」を受賞しました。この賞は関東圏大学の41大学／53学科の住宅課題優秀作品を一堂に集結し審査するもので建築デザイン演習4の住宅課題「動物と暮らす家」（出題：河内一泰、指導：佐屋香織）の作品を学科代表として出展し、上位7名の審査員賞の「古澤賞」をいただきました。出展者本人である渡邉さんにお話を聞きたいと思います。

── 「動物と暮らす家」の課題では、最初に何を考えましたか？
実際に犬を飼っているのですが、外で飼っているので人間も外で暮らすとどうなるかというところから考え始めました。

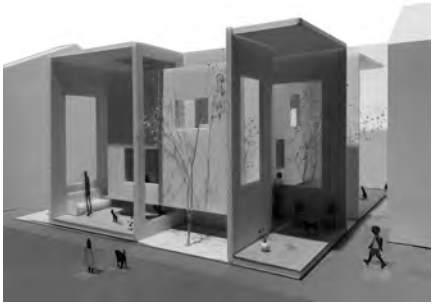
── それでどのような建築を設計したのですか？
人間が住む四角い箱とひだ状に内外を行き来する2種類の壁が重なる家を考えました。外部が入り込んだり、内部が出たり、犬が自由に行き来できる空間です。街や都市とも打ち解ける空間となる住宅をつくりました。

── コンペに向けて佐屋先生の指導のもと、どのようなバージョンアップをしたのですか？
建築のダイアグラムが概念的だったので、建築の形として伝わりやすいように整理しました。2種類の壁の違いが空間として体験できるように垂壁を追加しました。また、生活の機能が四角い箱の中に収まりすぎていたのでキッチンやお風呂を半屋外の場所へ移しました。その他にはプレゼンテーションボードのレイアウトをグリッド配置に揃えて図面をできるだけ大きくしたり、模型写真を撮り直したりしました。

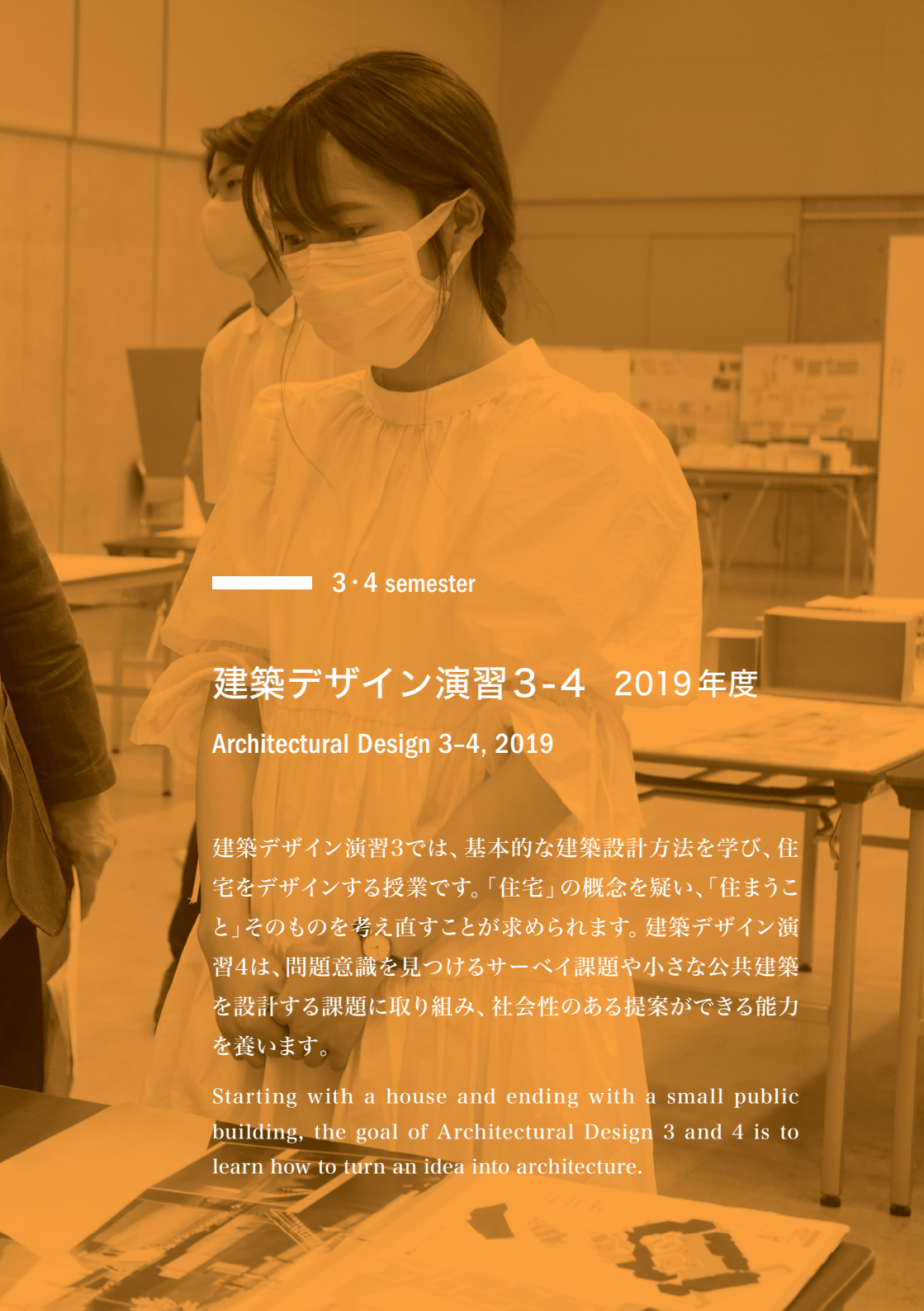
── 審査会当日はオンラインで見ていたとのことですが、どのような様子でしたか？
1次審査では展示物を見て5人の審査員が気に入った作品に投票するのですが、2人が投票してくれて、午後の2次審査に残りました。2次審査では審査員の方の講評があるのですが、古澤さんに「壁を増やすと普通は空間の透明性が失われるが、この作品は逆に壁を増やすことによって内外のつながりを強めている。壁をつくることに対してしっかりと向き合っている」と講評をいただきました。

── 今、卒業設計に取り組んでいると思いますが、将来像などありますか？
卒業設計で建築に対して興味を深めて、将来は建築家になって面白い建築をつくりたいと考えています。

（インタビュアー：河内一泰特任准教授）



2019年度課題「動物と暮らす家」
作品名「犬と人と犬の家」



3・4 semester

建築デザイン演習3-4　2019年度

Architectural Design 3-4, 2019

建築デザイン演習3では、基本的な建築設計方法を学び、住宅をデザインする授業です。「住宅」の概念を疑い、「住まうこと」そのものを考え直すことが求められます。建築デザイン演習4は、問題意識を見つけるサーベイ課題や小さな公共建築を設計する課題に取り組み、社会性のある提案ができる能力を養います。

Starting with a house and ending with a small public building, the goal of Architectural Design 3 and 4 is to learn how to turn an idea into architecture.

建築デザイン演習４　第１課題

シモキタ・スモールリノベーション

街をサーベイし、小さな操作で大きな変化をつくる

担当教員：河内一泰、渡邉研司、山崎俊裕
納谷 新、白子秀隆、山口紗由、山下貴成、佐屋香織、富永哲史

建築の周りには街があります。建築は敷地の大きさを超えて周辺と関係をもち、影響を与えます。つまり建築を考えることは街を考えることから始まります。この課題の目的は街のスケールの視野をもてるようになることです。課題のタイトルの通りシモキタ（下北沢駅北口周辺）を対象にしてスモール（小さな）リノベーションを行ってもらいます。リノベーションとはゼロからつくる新築とは違い、元になる建物を改修する時に使われる言葉です。この課題では元になる素材は下北沢の街です。街をサーベイ（調査）し、小さな操作で大きな変化をつくる提案をしてください。必ず街を素材としたデザインとすることがルールです。変化を起こす対象は街の風景だけでなく人の溜まり方、流れ方も含まれます。ものには「形」と「意味」があります。街の中の多くのものは「形＝意味」で個々のための形で具体的なものです。これを操作し「形＜意味」にする事で抽象化してください。

敷地
・下北沢駅周辺で各自設定する。

設計条件
・建築的・都市的な提案であること。
・規模は特に規定しない。
・周辺との関わりに配慮した提案であること。
・新しいアクティビティを発生させるために必要な機能を含むこと。

出題教員コメント

この課題は他の設計課題とは違うタイプの課題です。街をリノベーションする視点をもって都市のサーベイを行う点が特徴です。街を体験しながら同時に頭の中で街の構造を考え、その構造を少しだけ変えてみる。そして街の風景がどのように変わっていくかを想像してみる。体験者と設計者の2つの人格が必要となります。街の構造を抽出することーサーベイと、それを操作することーデザインは似ているのかもしれません。（河内一泰）

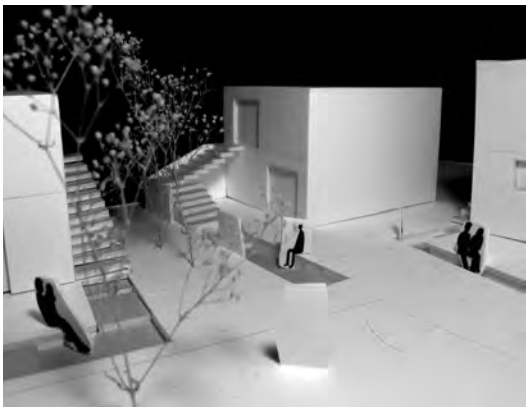
Hanomichi

菅谷有祐
Yusuke Sugaya

道を建物の中に延長し、貫通させる。そして、道に沿って建物を断面的に削り、二分する。下北沢の路地にはみ出すアクティビティと新たな道はファサードを閉じながらも求心性のある建築の可能性を示す。

担当教員コメント

下北沢の路地を延長する地図的なリノベーションである。建物を貫通する路地や街区の中央にある小さな広場へのつながりなど、新たな路地によって街の経験が広がっていくのが良い。（河内一泰）



担当教員コメント

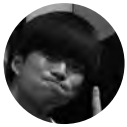
既存の屋外階段の手前を少し掘り下げ、そのまま拡張することで、道路レベルから2階以上にある場所を可視化させた提案。積層建築の道路と「階」の関係性をさりげなく変換させているところが面白い。（白子秀隆）

階段の延長でミつかる下北沢

徳留慶太郎
Keitaro Tokudome

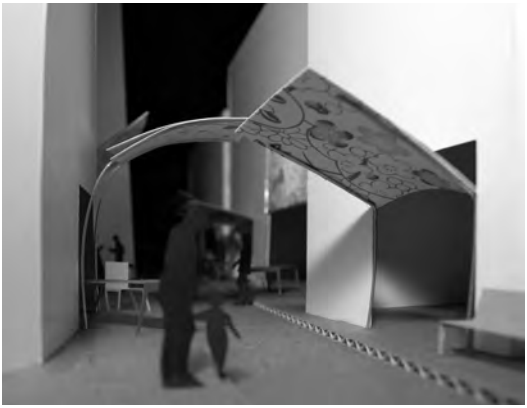
建物の距離が近い下北沢では2階への階段の存在感がないと感じた。そこで階段の入り口を延長させ、目線を上げなくても入り口がわかるようにをし、下北沢の魅力を最大限引き出すことを考えた。

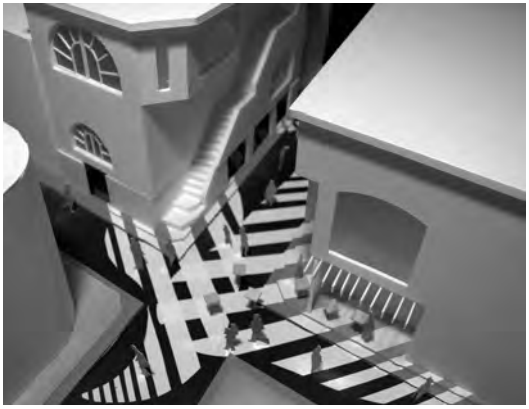
上を向いて歩く下北沢



小松 悟
Satoru Komatsu

ボランティアや美術学生によって描かれたシャッターアートが有名だが、お店が開くと同時に見ることができなくなる。そこでシャッターの開け方を変えることで、いつでも見ることが可能になり新しい空間が生まれる。





拡張し、導く、縞模様

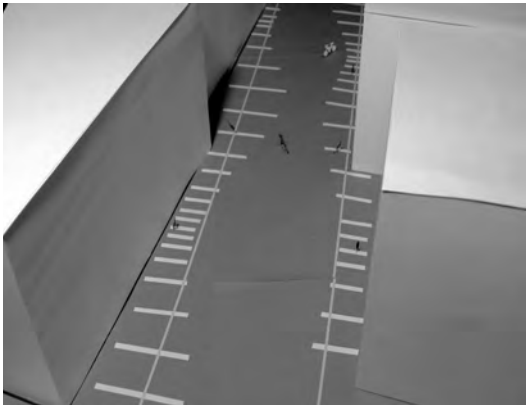
太田 匠
Takumi Ota

ヒューマンスケールの残る下北沢において、車社会でアイコン化しているボーダーをプロットする。刻々と変化する下北沢のキャラクター性を跨ぐボーダーは、閉鎖的な店舗に人を導き、個性的な店舗を外へと展開する。

ウラキタ

佐藤裕輝
Yuki Sato

下北沢は道が不整形なため、街に迷い込む楽しさがある。壁のセットバック、建物の裏にも出入口を設けることにより街区内にも道が生まれ、下北沢の魅力を拡張させた。



誘導をデザインする

木村莉彩
Lisa Kimura

次から次へと足を延ばしたくなるこの街の魅力を大切にしたいと考えた。道路幅員の広い道に対して白線を連ね、新たな道をつくり出す。白線の密度や長さを変化させることによって店舗への誘導を促している。

表裏の迷い道

相沢悠斗
Yuto Aizawa

下北沢は、古着や演劇などサブカルチャーに溢れている。向かいの道から入店するという流れから、お店同士を連結するように道を増設し、必然の出会いから偶然の出会いを目指した建築である。

曖昧にする円

後藤龍之介
Ryunosuke Goto

下北の街では人は目的がないと店に入らない。そんな人々が行き来する道の中に、円の操作を加える。その円は店と道との境界を曖昧にさせ、行き来する人々が店に寄らずとも店の中にいるような空間をつくり出した。

雨を待つ路

岩瀬和宏
Kazuhiro Iwase

サーファーが、天気図を見ながら良い波を待つように、ミュージシャンや路上パフォーマーが、天気予報を気にしながら雨を待つ。下北沢の街中に、雨が降ると出来上がる「水たまり」に囲まれた「居場所」をつくる。

建築デザイン演習４　第２課題

シモキタプレイス

これからの下北沢のための「図書館のようなもの」

担当教員：河内一泰、渡邉研司、山﨑俊裕
納谷 新、白子秀隆、山口紗由、山下貴成、佐屋香織、富永哲史

下北沢の北口の商業地と住宅地の混在するエリアの一角に、10〜20代の若者が利用する「図書館のようなもの」を設計してください。下北沢の小さなスケールの街並みや路地などの人々のアクティビティを引き込みながら、建物内外で起こるさまざまな活動が緩やかに交わる建築のかたちを考えてください。

敷地
・東京都世田谷区代沢　小田急鉄道小田原線下北沢駅下車数分
・敷地面積：1,450m^2
・用途地域：商業地域
・建ぺい率80%
・容積率500%
・南側と東側道路は現況の道路中心線から2m セットバックして敷地境界線を設定する。

設計条件
・構造自由、階数自由、地下可能
・延床面積：1,500m^2 程度
・施設内容：エントランスホール（500m^2、イベントスペース大300m^2 を含む）、図書学習スペース（300m^2）、カフェ（100m^2）、メディアラウンジ（200m^2）、イベントスペース小（100m^2）、事務室（80m^2）、機械室（80m^2）、倉庫（40m^2）、トイレ（2カ所）、階段（2カ所）、EV（1カ所）、屋外広場（300m^2、ピロティーや屋上も可）、駐輪場、搬入荷捌スペース（2t トラック1台分）

出題教員コメント

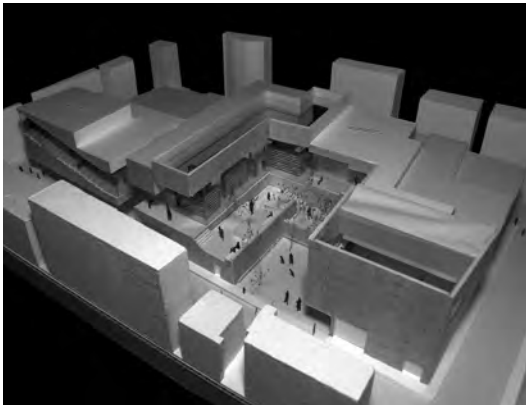
この図書館に訪れる人は下北沢の街を通ってきます。それは下北沢の小さなスケールの街並みや路地の楽しさなど街の経験と連続するものとしてこの図書館を体験するということです。また、建築は敷地境界線を越えて街に影響を及ぼすものです。建物立面の向かいには周辺建物の立面があり、路の空間をつくっています。断面図や平面図に周辺の街を描くということは、そういうことを意図しています。（河内一泰）

S=1/500

and read

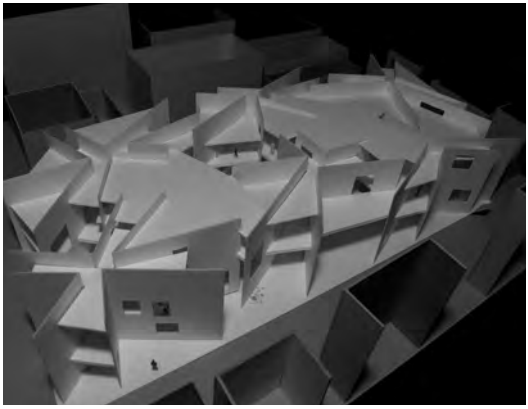
太田 匠
Takumi Ota

本来「地」である路地空間こそ下北沢の魅力とし、路地空間を断面的に展開する。都市の地と図を反転させるとともに、図書館の空間構成の地と図を反転させ、下北沢の個性を書架空間がつなぐ図書館とする。



担当教員コメント

下北沢の魅力を路地などの残余部分ととらえ、地と図を反転させた立体的な構成の図書館。洞窟の内部にいるような魅力的な空間が連続している。複雑な空間をまとめるための膨大なスタディも評価したい。（白子秀隆）



担当教員コメント

下北のサーヴェイから抽出した直交軸の配置グリッドを、人間のアクセス動線を誘発するための半外部空間と諸機能を設置しながらダイアゴナルに変換し、空間にダイナミックな動きを感じさせる作品となっている。（渡邉研司）

シモキタパレット

渡邉優太
Yuta Watanabe

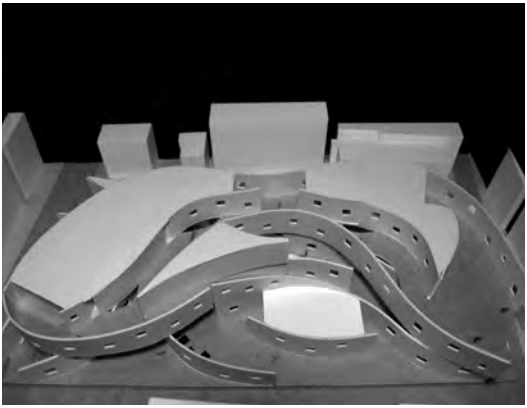
グリット状に構成された街の一区画に、下北沢を構成している6つの独特な色を抽出し、本を媒体にして混ぜ合わさるパレットのような場所を提案する。街の特徴である路地に回遊性をもたせ、街に開く建築を設計した。

Shimokita Expression

佐藤裕輝

Yuki Sato

街に迷い込む楽しさがある下北沢。それを構成する要素を建築に変換することにより下北沢の表現ができると考えた。たとえば壁を曲げることにより、視野を制限して先を想像させることを促す。



Simokita Side

菅谷有祐

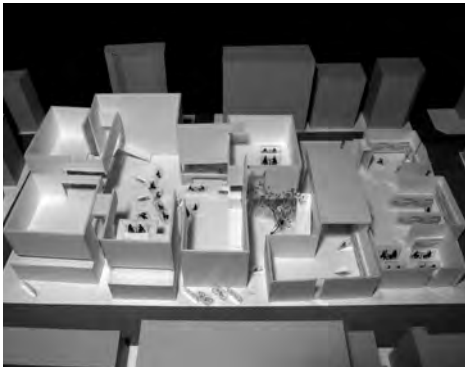
Yusuke Sugaya

建築計画で求められる諸機能を分棟型に配置し、ガラスの空間でくり抜く。それにより足りなくなった面積を補うように内側に機能がはみ出し、下北沢の路地のような目的が一つではない多様な空間をつくりだした。

スキマプレイス

榎本直子
Naoko Enomoto

建物の密度が高いシモキタには至る所にスキマがある。このスキマを使って居場所をつくることで、人々の活動や視線、風や音、光を引き込む。シモキタスケールに分けられた空間同士は、スキマによって緩やかにつながる。



流動的図書リズム

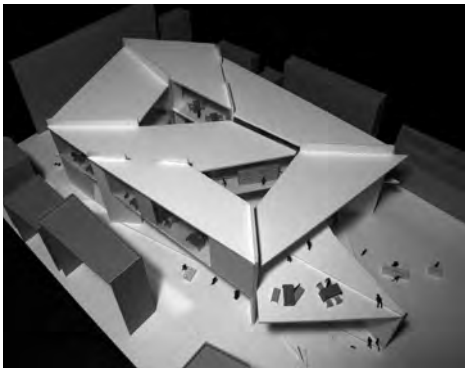
相沢悠斗
Yuto Aizawa

過去に闇市が存在し、道幅が狭いという特徴に対して、個性豊かなサブカルチャーが絡み合っている。横ルーバー構造のみで構成し、ルーバーが家具や本棚を担う高密度でありながら低圧迫な建築の提案。

シモキタを引き込む、広げる

後藤龍之介
Ryunosuke Goto

2階で図書館として使いながら、1階は屋外空間にすることで、下北の特徴を内外で交わらせるような提案だ。壁柱を用い内部空間の認識を曖昧にすることで、多様なアクティビティが広がることを期待した設計である。



建築デザイン演習４　第３課題

動物と暮らす家

ウチの生活とソトの生活が重なる家

担当教員：河内一泰、渡邉研司、山﨑俊裕
納谷 新、白子秀隆、山口紗由、山下貴成、佐屋香織、富永哲史

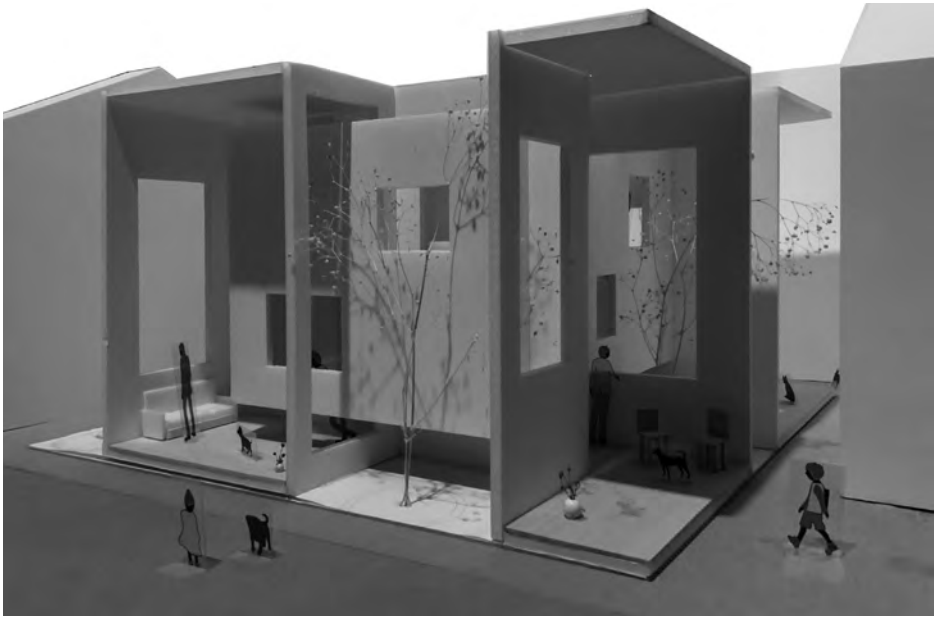
郊外の住宅地に人間2人以上と動物1匹が住む家を設計してください。2人だけの生活でも動物と過ごす空間があれば楽しいでしょう。室内の広さは80㎡以下で最小限の広さとします。人間は室内で生活をしますが、動物は屋外で生活をします。犬や猫のように内外両方で生活する動物もいます。一方で人間も庭で畑をしたり、ガレージで日曜大工をしたり、富士山を眺めるテラスで食事をしたりと外で生活することもあります。本来、建築は雨風、寒さ暑さといった厳しい外部環境から人間の生活空間を確保するためのシェルターです。人間と動物の生活の重なりを考えることはウチとソトの重なりを考えることであり、シェルターとして閉じた建築を開き、ソトへ広がる豊かな建築を考えることでもあります。動物は寸法や移動の仕方が人間と違います。人間のための建築と動物のための建築を考えることは寸法について考えることでもあります。

敷地
・山梨県甲府市の住宅地
・敷地面積144m^2
・建ぺい率：60％
・容積率：150％

設計条件
・階数自由（2 階建て以上、地下は半地下であれば可）、最高高さ10m。
・構造は木造とし「900 モジュール」を基本とする。
・住人は人間2 人以上、動物1 匹以上（各自設定のこと）。
・動物エリア、庭、駐車場1 台を含む敷地内のすべての外部を設計すること。

出題教員コメント

人間2人以上と動物1匹以上が住む家を設計する課題です。人は家の中に住み、動物は外で暮らしています。人間と動物の生活の重なりを考えることはウチとソトの重なりを考えることであり、シェルターとして閉じた建築を開き、ソトへ広がる豊かな建築を考えることにつながります。またスケールの異なる2つの世界を同時に考えることで寸法解像度の高い設計を身に付けてもらうことを意図しています。（河内一泰）



犬と人と犬の家

渡邉優太
Yuta Watanabe

有機的な壁により、外部が入り込んだり、内部が出たり、犬が自由に行き来できる空間へ。そうして内と外がひっくり返り始め、窓はフレームとなり家族内の距離感だけではなく街や都市とも打ち解ける空間、場所となる。

担当教員コメント

この作品は、内部なのか外部なのか、境界となるのは壁なのか床なのか、用途があるのか無いのか最終形に至るまで解釈の幅を広げながらつくられています。既存概念を安易に受け入れない姿勢と作品に好感がもてました。(佐屋香織)

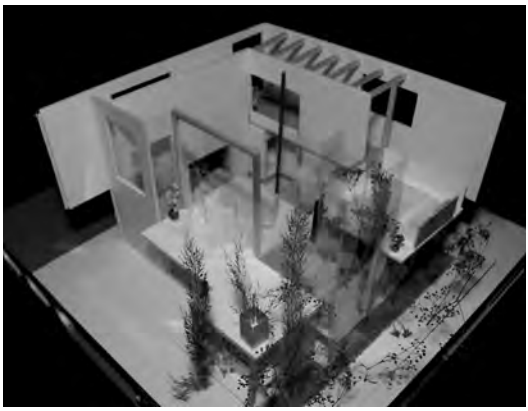
ヒトとネコの家と家

太田 匠
Takumi Ota

人の内外と猫の内外の捉え方を等価に扱い、人の空間構成で猫のような空間体験を目指す。人は機能ごとに内部をもち内外を横断した生活を促すことで、猫と住むことで生まれる住まいの豊かさを目指した。

担当教員コメント

各部屋を独立させながら、それぞれにおいてペットと住み手が共存し、見え隠れができるような楽しい空間的な仕掛けを施し、全体的にも中央に庭を配置するなど、自然の要素を取り入れた工夫がなされている。（渡邉研司）



担当教員コメント

一見単純な入れ子の案だが、内側ではレベルもさまざまで、内外も入り混じっている。レベルのズレがヒューマンスケールだったり動物のスケールだったりすることで、あちらこちらに動物たちの居場所が点在している。（納谷 新）

共に暮らす

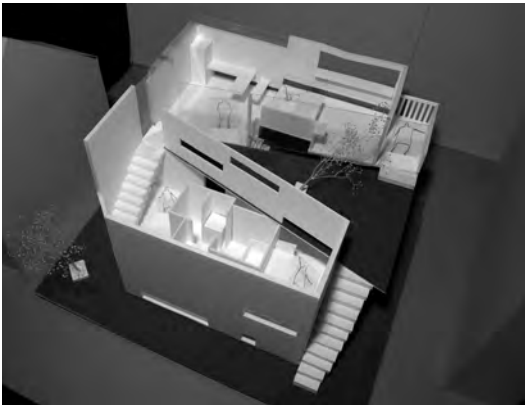
木村莉彩
Lisa Kimura

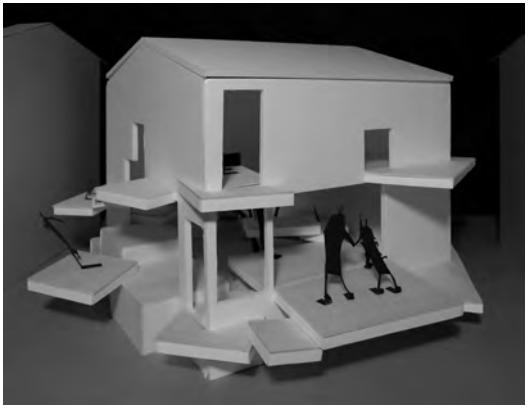
自身の経験をもとに“生活を送るなかで生まれる人と犬のストーリー”を想像し、両者が心地よく過ごせる住宅を設計した。それぞれの快適なレベルや環境を考慮した結果、内外が入り混じるスキップフロアの住宅となった。

走り回る

須藤有弥
Aya Sudo

大型犬のボルゾイとともに暮らす家を考えた。ボルゾイの性質上、多くの運動時間と広い空間を必要とするため、自宅でも運動ができる空間を提案した。1階、2階と家中走り回れることで、どの部屋にいても犬を感じられる。





遊べる家

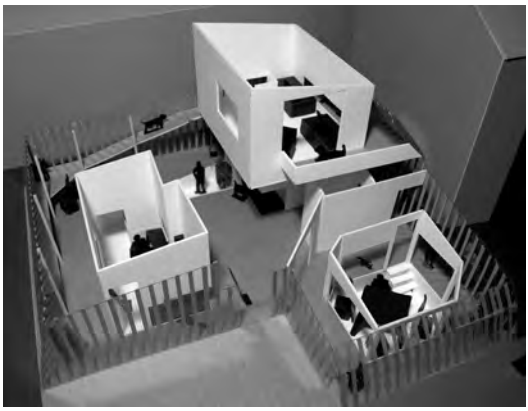
倉光汐里
Shiori Kuramitsu

床を細分化し断面方向に展開することで、猿のアクティビティが生きてくる住宅をつくった。内部ではイスや机などの家具は配置せず、積み上がっている床を人間はそれぞれを思うがままに利用し過ごすことができる。

住宅となにか

相沢悠斗
Yuto Aizawa

自然との向き合い方や野生の生き物とは何か、再検証した建築である。従来のハウスメーカーの住宅形状を分解し、その際にできた余白を、生物に提供した。それにより、整理された自然から分かち合う自然に変わっていく。



500mmの共生

岩瀬和宏
Kazuhiro Iwase

犬と人の目線には、約1mの差がある。人間の生活を犬のGLより下げることで、犬と同じ目線の高さで生活し、犬と過ごす豊かな空間を演出した。犬と人のモジュールを交互に配置し、多用途に広く楽しめる空間とした。

建築デザイン演習３　第１課題

非日常としてのTea House

担当教員：野口直人、渡邉研司、小沢朝江
井上 玄、白子秀隆、彦根 明、山口紗由、明野岳司、森屋隆洋、富永哲史、伊藤州平

日本の伝統的な建築のひとつに「茶室」がある。
一番小さな交流施設ともいわれ、日常生活から切り離された非日常体験を可能とする空間でもある。小さいがゆえに、空間スケール、空間構成、各部寸法が身体感覚を伴って捉えられる。
本課題では、現代における「tea House」を設計する。
「tea House」とは、日常と切り離された空間で、2人以上でお茶のセレモニーができる建築とするが、伝統的な茶道に沿ったものに限らず、交流の形式は自由である。
あなたが考える日常とは何か、その対比としての非日常とは何か。そうした状況で生まれる交流とは何か。自分ならではの考えを元に、それが可能となる最小限の空間をデザインしてほしい。

敷地
・東海大学湘南校舎敷地内

設計条件
・建築面積：10m^2 以下
・延床面積：15～20m^2、2 層以上が必要
・構造：自由
・常設、ポータブルな組立て式、セルフビルド可能など、設定は自由。

出題教員コメント

「茶室」という最小限空間を通して、人と人との新たな交流の場を創造すること、人体寸法に応じたスケール感を考えることがこの課題の目的である。伝統的な茶室では、非日常性を演出するためにスケールや素材、光や音など五感すべてに関わる工夫が施される。大学内という「日常」の場に置かれる「非日常」の空間をどう演出するのか、新鮮な試みを期待した。（小沢朝江）

スキマティーハウス

渡邉優太
Yuta Watanabe

茶室までの道のりに着目した。伝統的な茶室には庭があり外露地、内露地、にじり口と身も心も清め順を経て茶室に行く。日常から非日常に徐々に切り離されていく、小さな空間に多様性をもつ１つの建築にした。

担当教員コメント

渡邉君の案はシンプルでわかりやすく、コンセプトがそのままかたちになっているところが良いですね。形態的にも違和感なくまとまっていますが、上に行く程プライバシーが高まるかわりに景色も見えなくなる点がいま一つ。（彦根 明）

ぱらぱら

榎本直子
Naoko Enomoto

大きな床の上で家具によって居場所が決まることを「日常」と考えた。１人あたりの最小空間を1辺900mmの立方体とし、床を可動式にすることで、居場所の大きさや距離感を選ぶ「非日常」体験を演出した。

担当教員コメント

空間を柱梁のフレームで分割し、行為と視線を考えながらたくみにレベルを変え、非日常としての茶室空間をつくり出すとともに、外壁を水平連続窓とスパンドレル並びに大きなガラス面にして表情に変化を与えている。（渡邉研司）

三つ子の一畳半

相沢悠斗
Yuto Aizawa

私は、四畳半の茶室が美しいと感じる。その基本形を一畳半に三等分し、立体的に空間を積み上げることで、現代の茶室としての価値を引き出した。内部は半畳をさらに四等分し、動線や溜りとして利用した。

担当教員コメント

日本建築の規格寸法「畳」を、基本モジュールとした階段状のミニマムな空間構成であるにも関わらず、個性のあるいくつかの場が設けられそれぞれの場に光の採り入れ方の工夫など、非日常を体感できる空間構成を評価した。（明野岳司）

高さと奥行き

金澤里奈
Rina Kanazawa

1階は柱だけで空間をつくり、外部との境界を曖昧にして「日常」を表現する一方、2階は壁が厚い静寂な空間で「非日常」を表現した。さらに1階と2階をつなぐスロープで日常と非日常の「時間的空間」を表した。

担当教員コメント

天井高を押さえた平たい空間と、狭く高さのある空間を行き来する構成である。2つの相反するプロポーションの空間を日常と相対化させることで、それらを非日常として表現したユニークな案である。（伊藤州平）

建築デザイン演習３　第２課題

部屋とリビングと隣

担当教員：野口直人、渡邉研司、小沢朝江
井上 玄、白子秀隆、彦根 明、山口紗由、明野岳司、森屋隆洋、富永哲史、伊藤州平

高度経済成長期の郊外では、地方から大都市への流入人口の受け皿として、同時期に大量かつ画一的な住宅が供給されました。しかし近年、人口減少や超高齢化により郊外の住宅の魅力は失われ、虫食い状に空き家が発生し、住環境が悪化しつつあります。

また、新型コロナウィルスの影響により、私たちをとりまく環境や生活への意識が大きく変化しました。リモートワークの普及により家で過ごす時間が増え、仕事とプライベートの境界が曖昧になり、家族との距離にストレスを感じることもあるでしょう。従来のnLDKに捉われず、今までと異なる快適さや便利さが住まいに求められるのではないでしょうか。

本課題では家族「部屋」とのつながり方、地域「隣」とのつながり方を考えてください。「リビング」の価値を再考し、もっと外に開かれた居場所となることを期待しています。既成概念に捉われない自由な発想で、郊外が活性化するような魅力的な住宅を提案してください。

敷地
・神奈川県横浜市都筑区
・敷地面積：222m²
・建ぺい率：40%
・容積率：80%
・最高高さ：10m
・用途地域：第一種低層住居専用地域

設計条件
・要求面積：120m² 程度
・構造：自由
・建物だけでなく、敷地内のランドスケープも提案すること。

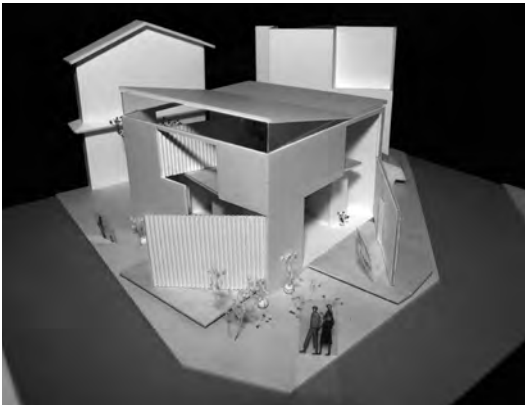
出題教員コメント

新型コロナウィルスの影響で環境や生活への意識が大きく変化している。普段、何気なく生活している住まいに対して、なんらかの問題意識をもってほしかった。プライベートの領域を「部屋」、パブリックの領域を「リビング」、地域や周辺環境を「隣」とし、開くことと閉じることの関係性を考慮しながら、新しい生活の形式と魅力的な空間を提案してほしい。（白子秀隆）

社会とつなぐ扉、家族をつなぐ扉

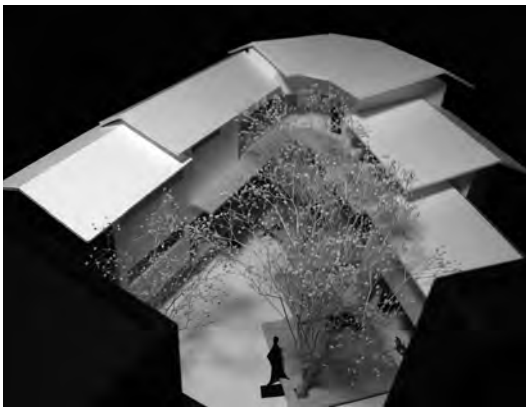
渡邉優太
Yuto Watanabe

壁のような扉、扉のような壁は自由にスペース、間取りを変えられ、新しい場所、空間をつくり出す。硬い仕切りのない、100年住んでも家族内や周りの環境に柔軟に対応できる家を設計した。



担当教員コメント

外周や内部を区切る壁を扉のように可動にして、住宅にフレキシビリティを生み出す提案である。大きく開かれた壁は、角地の敷地形状を活かして道までリビングに取り込み、新たなコミュニティを提案している。（小沢朝江）



担当教員コメント

角地の変形した敷地、各方位の街との関係を読みとった配置計画。住宅と街との接点と境界をそれぞれの場所に応じた形で提案し、暮らしへも提案もしているなど、設計のプロセスが積まれてきていることを評価した。（明野岳司）

Interwined House

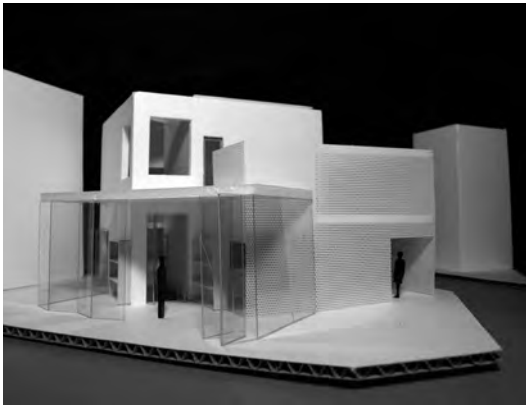
太田 匠
Takumi Ota

住宅における「プライベートの最深部」と「パブリックの外周部」を一方向に連鎖的につなぐのではなく、敷地の特徴である角地を活かし、パブリックスペースが放射状に多世代とさまざまな関わり方を助長する設計を目指した。

ウチとソトが混ざる家

五十嵐拓巳
Takumi Igarashi

ウチとソトがレイヤー状に重なる住宅である。ウチとソトを混同することで強い境界の認識がぼやけ、隔てる感覚が薄れることで、空間を超えて人と人がつながる。より開かれた住宅として街に展開することを期待した。



担当教員コメント

内外の境界操作、そこから生まれた空間同士の掛け合わせによって、多様な室内環境を数多く生み出している。図式的な平面は明確さがあるが、それがもう少し崩れていけばさらに構想が膨らんだはずだ。（野口直人）

ベランダで繋がる

後藤龍之介
Ryunosuke Goto

パブリック空間を核として、個人の領域を螺旋状に配し、全室にベランダ空間を設けた。個人の領域となるベランダは、壁柱で隔てることで、内部の交流空間とのギャップを生むよう意図した。

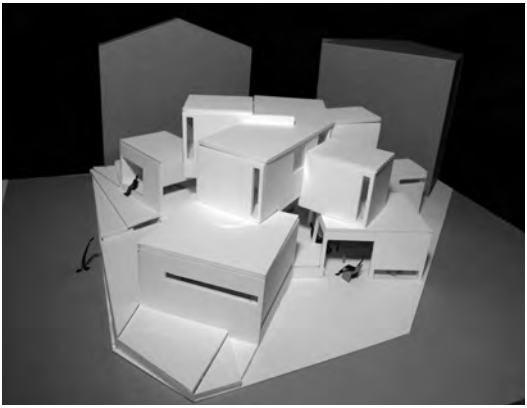
担当教員コメント

スラブのエッジと屋内外の境界をずらし、室内においてもスラブのレベル差のみで空間を隔てることを試みている。生活の領域の揺らぎという曖昧な状況を、具体性をもって表現できている。（野口直人）

だんだん家

榎本直子
Naoko Enomoto

住宅の各機能を中心とするアクティビイティが重なる部分を「リビング」と考えた。機能を段差に置き換え、さらに敷地境界を塀で隔てるのではなく高低差で表現することで、外に対して距離を取りつつ開くリビングを提案した。



Forest

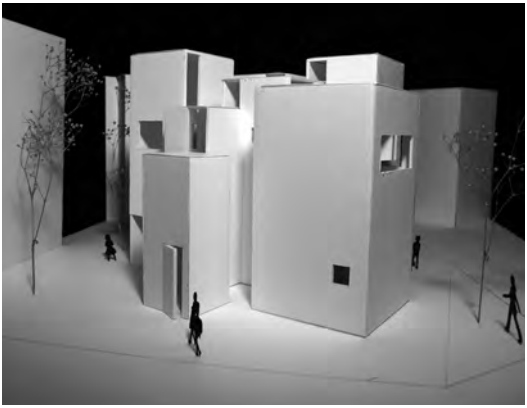
生田拓也
Takuya Ikuta

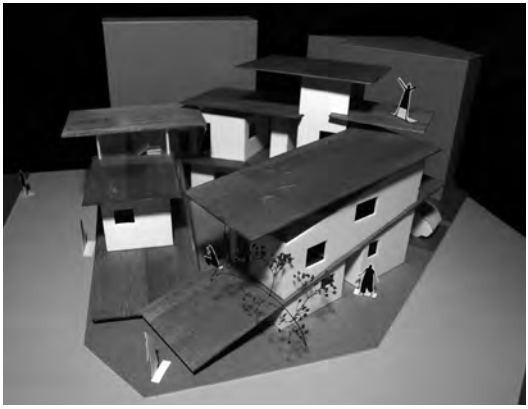
本課題のテーマである「つながり」について、私と公の中間となるセミパブリック空間に注目した。住人だけではなく地域とつながりがもてるよう、三角壁で内部が見え隠れする住宅を設計した。

つながる住宅

新村大輝
Daiki Niimura

地域とのつながりやコミュニティの形成を目指して、内部は扉を設けず一連でつながる空間として、地域に開放するスペースを設けた。人の視線が行き渡る空間構成が特徴である。





地域住宅にようこそ

相沢悠斗
Yuto Aizawa

通常、個人の敷地に地域の人は入らない。そこで、一塊ではなく、3つのボリュームによる住宅を提案した。屋根やスロープという共通箇所を設けて家族のつながりを確保し、地域の人も迷い込める空間をつくった。

建築デザイン演習３　第３課題

広く立体的であること

豊かな狭小都市型住まい

担当教員：野口直人、渡邉研司、小沢朝江
井上 玄、白子秀隆、彦根 明、山口紗由、明野岳司、森屋隆洋、富永哲史、伊藤州平

都心部の生活は、衣食住を自分の住まいの中で完結せず成立させることが可能である。たとえば、24時間営業のコンビニやレストランで食を補い、漫画喫茶やカプセルホテルで住を補える。また、ファストファッションによって外で着替えを入手することも簡単である。
家族をもたない単身者やカップルには、低家賃で狭小な集合住宅に住まいをもち、衣食住を街の中で補いながら、都心部での生活を楽しむ人も多い。
しかし、そうした生活の受け皿としての集合住宅は、高密度化された都心部において単なる小さな箱の集まりになりやすく、豊かな住環境の提供が難しい場合が少なくない。
本課題は、単身者・カップルのための住戸群を設計課題とし、床面積は小さくとも、空間的に立体的で大きく豊かな住環境が得られること、さらに住人同士がシェアできるスペースをもつことで、住人の生活スペースが拡張されて広く感じられ、都心部の生活が豊かになる住まいを求める。

敷地　目黒川
・東京都目黒区青葉台
・敷地面積：344m²
・用途地域：第一種低層住居専用地域
・建ぺい率：80%
・容積率：300%

設計条件
・要求諸室
住戸：5世帯分の住戸（単身者もしくはカップル、最低2組）。各住戸60㎡前後かつ最低2 層以上。各住戸にトイレ・浴室・キッチンなど最低限の機能を含む。

シェアスペース：住人同士がシェアし、街並みとつながることができるスペース。
・要求面積：300m² 程度
・高さ制限：20m
・構造：自由
・階数：3 層以上
・同じ平面のフロアを積み上げる設計はNG。立体的な住戸がどういった豊かさを獲得できるかを考えること。

出題教員コメント

過密で狭小となりがちな都市部に建つ集合住宅を考えるうえで、立体的な空間のつながりや外部環境との多様な関係性、シェアスペースを各住戸とうまく連関させることによる専有部分の認識的な拡張など、床面積としての評価とは異なった“体感としての空間の広さ”について考えてもらうことで、今の学生が高密度な都市部での生活を思い浮かべたときにどのような空間に住まうことが楽しいかを問いかけてみたい。（伊藤州平）

Complex Box

生田拓也
Takuya Ikuta

立方体と直方体を基準とし、5世帯にすべて採光・眺望・通風を配慮した。目の前に広がる桜並木と川の眺望を最大限に活かすことができるよう大開口を各世帯に設け、豊かな住まいをつくり出そうと考えた。

担当教員コメント

生田君の案は各戸のパブリックスペースが位置と高さを変えながら桜に対して顔を出しているという、かたちが意図を示す明快なアイデアでした。欲を言えば一階の奥のほうなどに、もう少し解決策や提案性があればなお良い。（彦根 明）

一筆からのいえづくり

渡邉優太
Yuta Watanabe

各世帯1本の生活動線を立体的に立ち上げ、各々を混ざり合わせることで共有空間をつくった。従来の集合住宅と異なり隣家との接点が多く、コミュニケーションが広がる建築を目指した。

担当教員コメント

帯状の構造体は各世帯（ユニット）に1枚割り当てられていて分棟案に近い発想であるが、この構造体が蔦のように絡み合い、補完しながら全体をつくることよって、ユニットの境界が溶けてなくなっていることに可能性を感じる。（森屋隆洋）

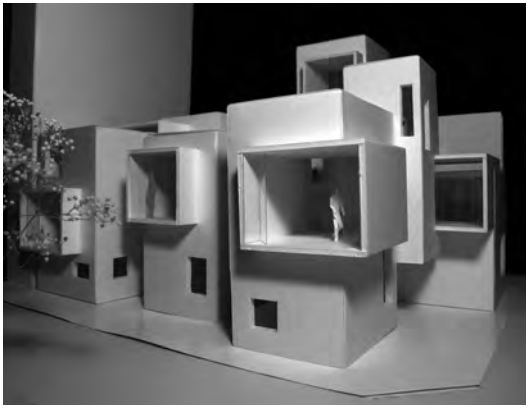
創造させるルーティーン

太田 匠
Takumi Ota

限られた敷地において物理的な「距離」を広さの定義とし、各住戸に距離が異なる「離れ」を設けた。「離れ」での生活のアクセントを育むライフスタイルが触発し合うことで、都心での共同生活を支えることを意図した。

担当教員コメント

1世帯の領域に離れをつくり、日々の生活に長い距離感を与えた。独自性のある案だが、単なる物理的距離だけでなく、そこから得られる新しい豊かさを想像させてほしかった。（野口直人）



担当教員コメント

主体となる各住戸ボリュームに対しさまざまなboxを貫入させて全体をつないでいる。boxは他住戸や外部環境とのつながりをON/OFFする機能をもち、住人が自由に広さを可変することのできる形式の発見となっている。（伊藤州平）

箱筒が繋ぐ家

五十嵐拓巳
Takumi Igarashi

分棟の住戸に貫入する「箱筒」により生活を拡張する提案である。住戸間をつなぐ箱筒はプライベートからセミパブリック・パブリックへ段階的に展開し、外部に向く箱筒はウチとソトを季節や気分によりスイッチできる。

あそびの上に暮らす

共有を用いた移転型住まい

松本乙希
Itsuki Matsumoto

高密度都市の生活は怠慢になりがちである。そこで活動の幅を広げるため、住戸の機能を解体して再配置し、それによってできた共有スペースである「遊びの空間」に各自の個性的な使い方を期待した。

担当教員コメント

住居の要素を最小単位に分解し、立体的に分散させたこの作品は、「住まう」という行為自体を細分化し、混ぜ合うことでともに住まう意味を再構築させた。住戸部分よりむしろその他の空間が主体性をもち始めているとも言えよう。（富永哲史）

Bird's House

大星史人
Fumihito Oboshi

各住戸を地上から浮かせた集合住宅を提案した。建築は人を空へ運び、鳥のように暮らすきっかけを与えてくれる。地面からの独立は「自由に暮らす」というこの作品のテーマを強く表現している。

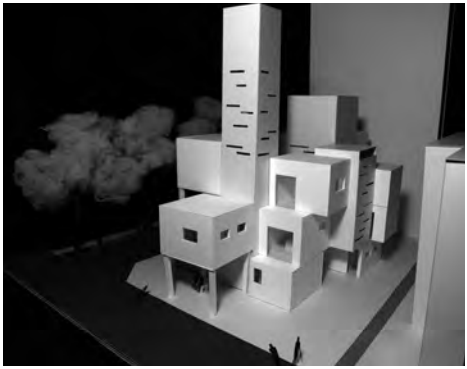
担当教員コメント

それぞれの住戸をできるだけ離し、ずらしながら立体的に配置した提案。開口部のバランスが秀逸で、どの住戸からもプライバシーに配慮された眺望を確保している。細い柱に囲まれた半屋外空間も魅力的でした。（白子秀隆）

2階が2階に無い

後藤龍之介
Ryunosuke Goto

2階という概念を崩し、1世帯の各室の機能を分解することで、部屋を使うために人々が生活の中で立体的に移動する。人との交流が部分的な集合住宅において、交流を増やそうと提案した。



rotation house

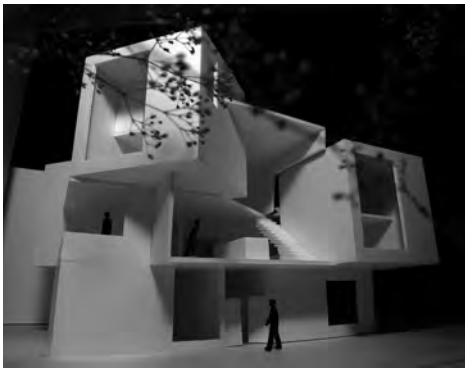
新倉穂香
Honoka Niikura

階段をシェアスペースにすることで斜めの移動を可能にし、すべての住居に桜を見る部屋をつくった。階段はそれぞれ特徴が異なるため、用途や目的によって過ごす場所を変えることができ、交流できる関係も異なる。

キューブ

手塚悠希
Yuki Tezuka

各住戸を一辺5,000mm、共同スペースを一辺6,000mmの立方体とし、その重なりを外部から可視化して、立体的になるよう計画した。裏庭の木が道から見た時に額縁に入った1枚の作品のように見える空間を創造した。



フィールドから考える

教員インタビュー　Faculty Member Interview

稲益祐太

Yuta Inamasu

［特任准教授／西洋建築史・西洋都市史］

1978年東京都生まれ。法政大学工学部建築学科卒業、同大学院博士後期課程満期退学、博士（工学）。在学中にイタリアのパーリ工科大学に留学。久留米工業大学特任講師を経て、2021年より現職。著書に『世界都市史事典』（分担執筆、昭和堂）など。

――どんな学生でしたか？

幅広くいろんな授業に出て、「建築」を多角的に理解したいと思っていました。ただ、そのなかでも西洋建築史の授業で聞いた話はもっと理解したいと思い、2年生の春休みにイタリアを一人で旅行しました。今思い返すと、実際に空間を体験したことで授業の内容が自分なりに理解できた気がしたことが、西洋建築史の研究室に進むきっかけだったと思います。

――西洋建築史の魅力はなんですか？

建築を通して今の自分とは違う時代や場所の生活や文化を知ることで、自分の世界を広げることができるところです。西洋建築史にはすぐに役立つ特効薬的な役割はないけれど、人類の長い歴史の中で思考を重ねてきた先人たちの軌跡を辿ることは、広く深く建築を理解し、未来について考えるうえで重要なことだと思いますし、他者への理解や想像力を培っていくことにつながると思います。

――研究室では、どのようなことをしますか？

私は、実際に研究対象地に出かけていき、建物や都市空間をよく観察して調べる「フィールドワーク」を重視しています。まだ研究室に学生はいませんが、今後はイタリアで現地調査をし、一緒にイタリア都市の研究をしたいと考えています。また、その研究方法を応用して、日本の都市についても研究したいと思っています。フィールドワークに出かけていくことで、社会や文化を触れて理解するきっかけにもなったらといいなと思います。

（インタビュアー：金澤里奈・新倉穂香）

4 semester（新型コロナ対応で２年秋学期開講）

建築デザイン演習３　2020年度

Architectural Design 3, 2020

建築デザイン演習３　第１課題

部屋とリビングと隣

担当教員：野口直人、山崎俊裕、小沢朝江
井上 玄、白子秀隆、彦根 明、山口紗由、明野岳司、森屋隆洋、富永哲史、伊藤州平

高度経済成長期の郊外では、地方から大都市への流入人口の受け皿として、同時期に大量かつ画一的な住宅が供給されました。しかし近年、人口減少や超高齢化により郊外の住宅の魅力は失われ、虫食い状に空き家が発生し、住環境が悪化しつつあります。
また、新型コロナウィルスの影響により、私たちをとりまく環境や生活への意識が大きく変化しました。リモートワークの普及により家で過ごす時間が増え、仕事とプライベートの境界が曖昧になり、家族との距離にストレスを感じることもあるでしょう。従来のnLDKに捉われず、今までと異なる快適さや便利さが住まいに求められるのではないでしょうか。
本課題では家族「部屋」とのつながり方、地域「隣」とのつながり方を考えてください。「リビング」の価値を再考し、もっと外に開かれた居場所となることを期待しています。既成概念に捉われない自由な発想で、郊外が活性化するような魅力的な住宅を提案してください。

敷地
・神奈川県横浜市都筑区
・敷地面積：222m²
・建ぺい率：40%
・容積率：80%
・最高高さ：10m
・用途地域：第一種低層住居専用地域

設計条件
・要求面積：120m² 程度
・構造：自由
・建物だけでなく、敷地内のランドスケープも提案すること。

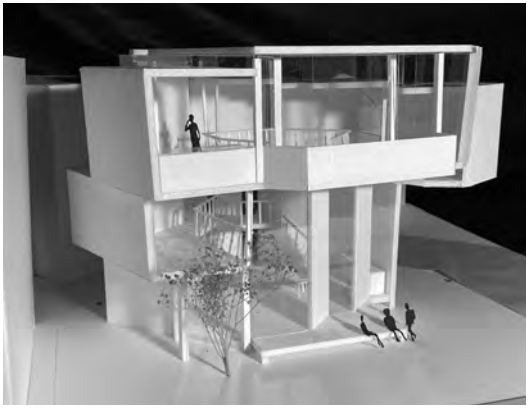
出題教員コメント

新型コロナウィルスの影響で環境や生活への意識が大きく変化している。普段、何気なく生活している住まいに対して、なんらかの問題意識をもってほしかった。プライベートの領域を「部屋」、パブリックの領域を「リビング」、地域や周辺環境を「隣」とし、開くことと閉じることの関係性を考慮しながら、新しい生活の形式と魅力的な空間を提案してほしい。（白子秀隆）

拡がるつながり

木村友香
Yuka Kimura

いろいろな“つながり”を考えた。外との“つながり”、家の中での“つながり”など、それぞれの場での“つながり”が縦横にひろがっていく空間を考えた。これらの“つながり”に合わせ建築の空間が生まれる。



担当教員コメント

粘土をこねるように領域を獲得し、柔らかく環境に馴染み、生活がつながってゆく。動物的な感覚が存分に発揮された案であり、デザインに対する独自のスタンスを確立しかけたのではないだろうか。（野口直人）

担当教員コメント

矢島さんの案はエスキスを重ねるなかで基本的なアイデアを残しつつ進化していきました。内部と外部の関係に多少強引なところがありますが、ライトウェルによる空間の分節化と模型写真による光の表現はとても誌的で秀逸。（彦根 明）

Spot light

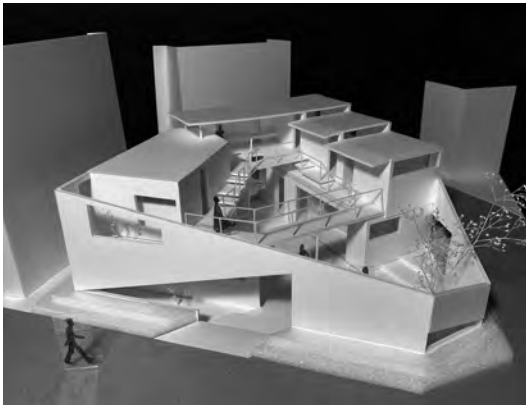
矢島里紗
Lisa Yajima

吹き抜けから差し込むスポットライトに照らされた場所にコミュニティが生まれる。あえて壁をつくらず、吹き抜けや階段を利用して空間をゾーニングし、家族間の関わりを形成する動線を計画した。

見え隠れする家

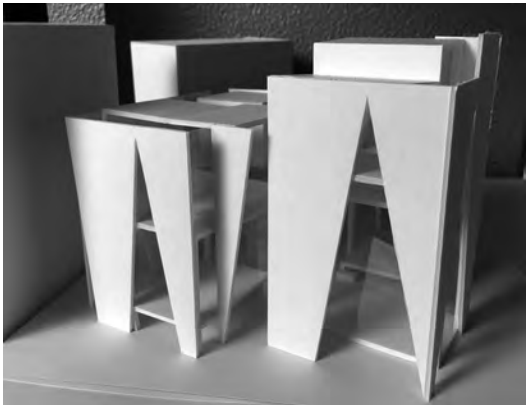
岩上奈菜美
Nanami Iwakami

「家族とのつながり」と「まちとのつながり」の2つのつながり方を考え、公的・私的空間が可変的につながるよう3つのリビングを計画した。またGLや壁に操作を加え、人の見え隠れを起こすことで、空間の在り方を考えた。



担当教員コメント

敷地境界に配された壁のデザインについては諸論があると考えられるが、小劇場風外部リビングと回遊デッキで囲まれた中庭を中心に、敷地内外の各部空間がそれぞれ魅力を発揮しながら、絶妙なバランスで全体・部分が巧妙に構成された秀作である。（山﨑俊裕）



担当教員コメント

三角形という強い形態を用いながらも、断面と平面の繊細な計画により屋内外の環境と人々との距離感をうまくコントロールしている。形式の強さだけでない丁寧なデザインの積み重ねの重要性を再認識させてくれる。（野口直人）

付かず離れず

大林 愛
Ai Obayashi

外とのつながりを意識しつつ、上に上がるにつれプライベートな空間としながら、部屋同士とのつながりを意識した。そのため、内壁がなく、部屋を段差で仕切り、高さによって異なった印象を与える住宅を設計した。

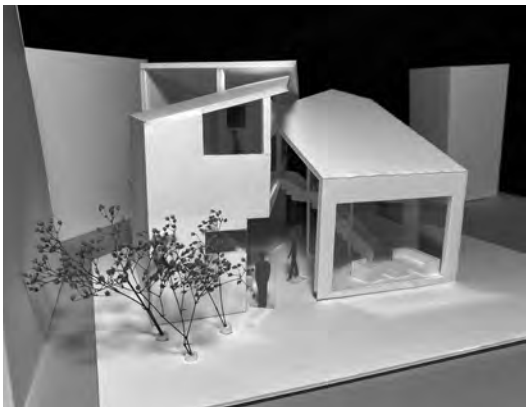
タマリバ

長瀬ルナ
Runa Nagase

箱を細かく分割し、回転させることで生まれた隙間・空間には、人々が集うタマリバができる。回転することで生まれた鋭角の壁から視線が抜ける。建物の間を縫うようにして迷い込みたい住宅である。

担当教員コメント

分解、回転、分解と回転の操作で、単純な正方形の箱から新しい建築空間を提案、敷地形状を活かした配置計画、住宅としてのプライバシーを最低限確保しながら街との結びつきの新しい提案を図面の完成度含め高く評価した。（明野岳司）



House Street

竹下日奈子
Hinako Takeshita

家族だけでなく、地域の人々も通り抜けられる道をつくり、地域とつながる住宅を考えた。段差によって緩やかに空間を仕切り、通り道とそこに面した部屋は地域に開かれた大きな空間となる。

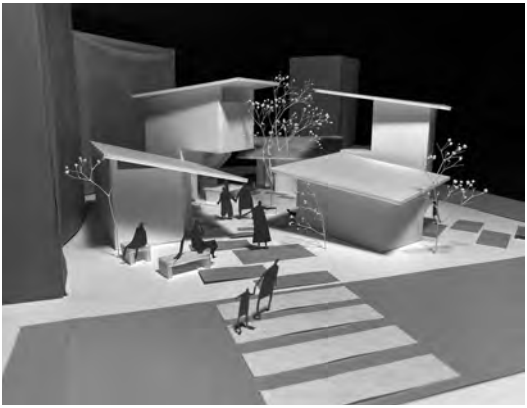
担当教員コメント

明快な平面構成であるが、各層と屋根を巧みにずらすことで多様な断面的つながりを可能としている。模型によるスタディがかなりうまくいっている提案である。（野口直人）

広がるリビング

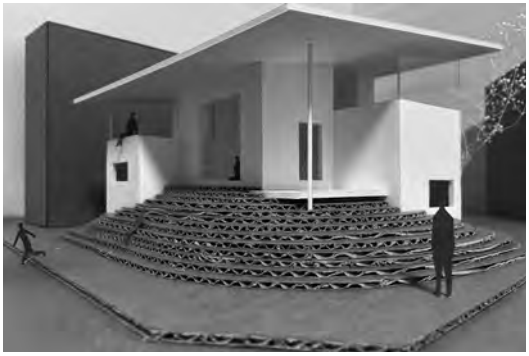
池谷琳花
Rinka Ikeya

部屋を分棟配置し、大屋根を架けて軒下空間をつくるという2つの操作によって、余白をゾーニングし、家族空間（部屋）と地域の人の空間（隣）が曖昧になり、敷地全体がリビングとなるような住宅を考えた。



担当教員コメント

池谷さんはまったく別の案で評価を受けていたのに行き詰まりを感じてこの分散案をまとめ直しています。共用部が軒下の外部というのは弱冠無理があるという意見もありましたが、短期間でここまでまとめたことは見事。（彦根 明）



担当教員コメント

丘を媒介にリビングとまちに緩やかなつながりを生み出している。スキップフロアと凹凸をつけた平面計画によってデッドスペースを低減し、大屋根により多様な居場所ができている。複数のアイデアを織り交ぜた秀作である。（森屋隆洋）

リビングから地域へ

清水愛夏
Manaka Shimizu

子どもたちが近所の公園へ遊びに行くことは地域のつながりになる。そこで考えた住宅が「丘の上のリビング」である。家に閉じこもって遊ぶようになった今の子どもたちが外へ遊びに行きたくなるような住宅を設計した。

建築デザイン演習３　第２課題

広く立体的であること

豊かな狭小都市型住まい

担当教員：野口直人、山﨑俊裕、小沢朝江
井上 玄、白子秀隆、彦根 明、山口紗由、明野岳司、森屋隆洋、富永哲史、伊藤州平

都心部の生活は、衣食住を自分の住まいの中で完結せず成立させることが可能である。たとえば、24時間営業のコンビニやレストランで食を補い、漫画喫茶やカプセルホテルで住を補える。また、ファストファッションによって外で着替えを入手することも簡単である。
家族をもたない単身者やカップルには、低家賃で狭小な集合住宅に住まいをもち、衣食住を街の中で補いながら、都心部での生活を楽しむ人も多い。
しかし、そうした生活の受け皿としての集合住宅は、高密度化された都心部において単なる小さな箱の集まりになりやすく、豊かな住環境の提供が難しい場合が少なくない。
本課題は、単身者・カップルのための住戸群を設計課題とし、床面積は小さくとも、空間的に立体的で大きく豊かな住環境が得られること、さらに住人同士がシェアできるスペースをもつことで、住人の生活スペースが拡張されて広く感じられ、都心部の生活が豊かになる住まいを求める。

敷地
・東京都目黒区青葉台
・敷地面積：344m^2
・用途地域：第一種低層住居専用地域
・建ぺい率：80%
・容積率：300%

設計条件
・要求諸室
住戸：5世帯分の住戸（単身者もしくはカップル、最低2組）。各住戸60㎡前後かつ最低2層以上。各住戸にトイレ・浴室・キッチンなど最低限の機能を含む。

シェアスペース：住人同士がシェアし、街並みとつながることができるスペース。
・要求面積：300m^2 程度
・高さ制限：20m
・構造：自由
・階数：3層以上
・同じ平面のフロアを積み上げる設計はNG。立体的な住戸がどういった豊かさを獲得できるかを考えること。

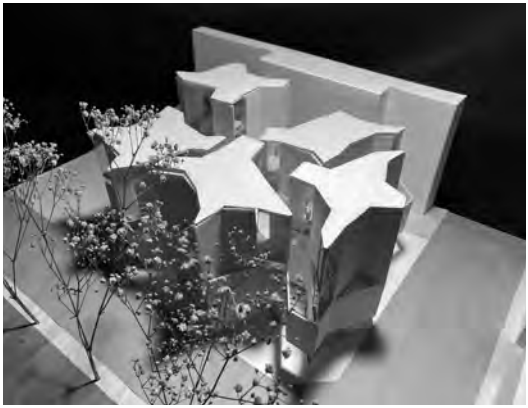
出題教員コメント

過密で狭小となりがちな都市部に建つ集合住宅を考えるうえで、立体的な空間のつながりや外部環境との多様な関係性、シェアスペースを各住戸とうまく連関させることによる専有部分の認識的な拡張など、床面積としての評価とは異なった“体感としての空間の広さ”について考えてもらうことで、今の学生が高密度な都市部での生活を思い浮かべたときにどのような空間に住まうことが楽しいかを問いかけてみたい。（伊藤州平）

でこぼこリズム

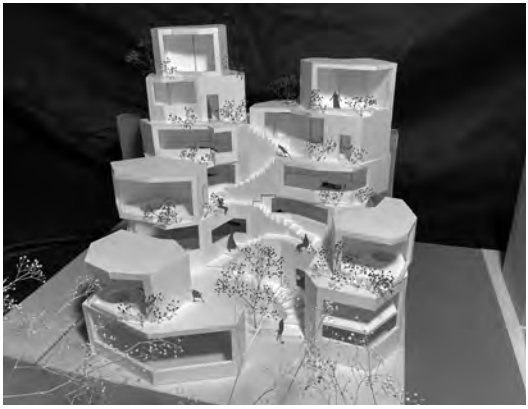
木村友香
Yuka Kimura

平面・断面ともにでこぼこさせることで、新しいスペースが生まれ、そこから新しい交流やつながり、新しい生活のリズム、街との新しい距離感が生まれる。この集合住宅の広さは無限に拡張されていく。



担当教員コメント

室内の視線を先に設けられた窓から外にまで伸ばし、また各戸の視線を感じさせない平面と、重なりあいながら回遊動線をもつ空間構成は広さを体感させる。街の風景となるデザイン。設計の完成度と熱意を高く評価した。（明野岳司）



担当教員コメント

視線を意識した計画は、まるで岩山集落を彷彿させる造形。中心から外側へ、前方上から後方下へと生まれる空間のグラデーションを利用し、外環境から内部空間、またコモンからプライベートへ滑らかに誘う緻密で合理的な提案である。（富永哲史）

見て・見られる

池谷琳花
Rinka Ikeya

住民の相手を見る・見られるの関係を立体的にした建物である。視界に入るからこそ相手を認識するきっかけとなりコミュニケーションが生まれるなど、視覚が要因となる関係性を生み出すことをコンセプトに考えた。

タテとヨコ

矢島里紗
Lisa Yajima

タテに伸びる螺旋階段からランダムに突出部分を形成する。5棟それぞれの突出部分が重なり合い、そこで人が生活することで、住戸間のヨコのつながりが生まれることを期待した。

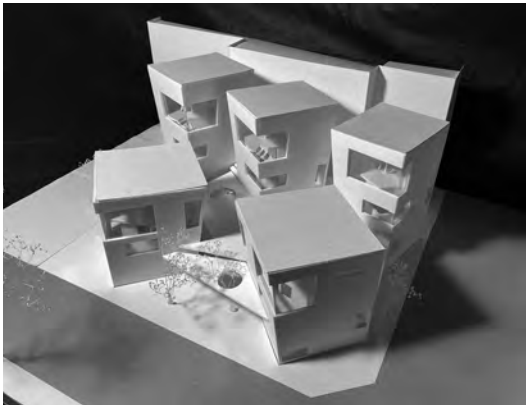
担当教員コメント

高さ方向にポテンシャルのあるレギュレーションに着目し、住戸ごとに塔状に分棟配置させ、縦に住む魅力を追求した大胆な提案。居場所と化した階段と、突き出したボリューム同士が関係性をもち始め、日常に多彩なシーンを生むであろう。（富永哲史）

外を取り巻く家

岩上奈菜美
Nanami Iwakami

各住戸を分棟配置し、それぞれ角度をつけ、さらに内部を視線の抜けに対して直角となるように入れ子状に配置することで、視野を拡大させる。各棟にさまざまな吹き抜けができ、外とのつながりをもたせることで広さを表現した。



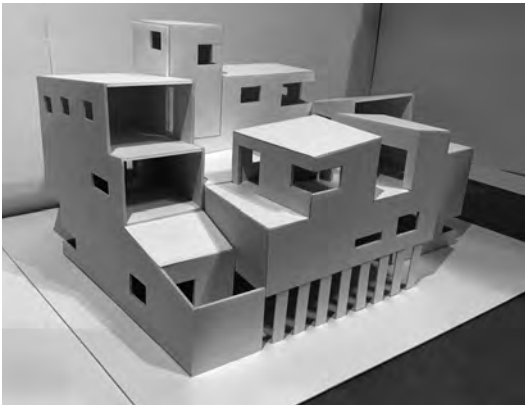
担当教員コメント

岩上さんの案は建物同士の関係性と共用部のデッキにもうひと工夫欲しいという意見も出ましたが、なんといっても個々の室内空間が素晴らしい。コアを取り巻くような階段を登っていくと徐々に展開するシーンが芸術的。（彦根 明）

広がる、繋がる

大林 愛
Ai Obayashi

「角度」「スキップフロア」「開口部」の3つをキーワードとした操作を行い、それぞれの操作によって視線を誘導することで、視覚的に広く立体的であり、どこまでも続いていそうに感じさせる集合住宅を設計した。



担当教員コメント

平面的・立体的な対角線に着目し、対角線を活かすための斜の壁とスキップフロアを取り入れ各ユニットを広く感じさせる提案。中庭形式とした一般的な計画だが、階段の配置など断面的に場の変化があり、新しい中庭の可能性を提案したことを評価した。（明野岳司）

担当教員コメント

部屋の面積よりも巨大な開口、傾けた外壁、そして群れとしての空隙によって、空や隣棟の外壁を含めた外部環境を室内に取り込み、新しい広さを獲得している。物理的ではない、広さの概念を揺らがせた案である。（野口直人）

斜めの壁の集合住宅

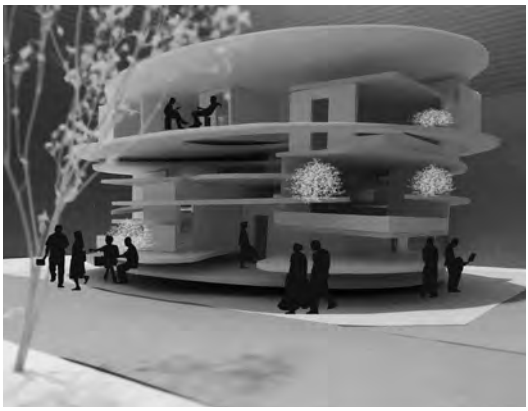
渡部裕介
Yusuke Watabe

壁を立面平面で斜めにする操作で多様な空間をつくる。空に向かって広がる形は上階の開放的で広いリビングを実現する。住戸に挟まれた三角形の共有空間は各住戸の土間と複合的に利用され、住民の行動を外部に引き出す。

Misaligned Squares

岩垣卓磨
Takuma Iwagaki

私的空間と公的空間を意図して使い分けることができ、全戸で使う共有空間だけではなく、2住戸のみが利用できる共有空間などが存在する。地域で少し目を引く「オープンでシンボリックな建物」を目指した。



重なる家

長瀬ルナ
Runa Nagase

主動線が住民たちと重なることで、集合住宅の住民が大きなファミリーであるような印象を与える。住民とのつながりを持ちながら、プライバシーも守られる空間を目指した。日常が重なり合う、心地の良い住宅である。

研究室紹介09　laboratory 09

再生可能資源（自然のめぐみ）で快適な空間をつくる

山梨県道志村における講演風景
（「住環境と自然エネルギー、薪ストーブの魅力」、https://rawcals.com/taitoruwu-si-41/）

高橋 達

Itaru Takahashi

［教授／建築環境学・環境配慮型の環境設備とライフスタイル・エコハウス・循環再生資源の活用］

1968年横浜生まれ。1999年武蔵工業大学大学院で博士（工学）の学位取得。2001年福岡工業大学社会環境学部専任講師、2005年東海大学工学部建築学科助教授、現在に至る。共著書に『エコリノ読本』（新建新聞社）、『最高にわかりやすい建築設備』（エクスナレッジ）、『設計のための建築環境学』（彰国社）、『エクセルギーと環境の理論―流れ・循環のデザインとは何か』（井上書院）など。

みなさん、快適なで過ごしたいすよね？その快適性の裏でいつかはなくなる資源を浪費しているようでは、後ろめたさを感じることと思います。そんな現代人の後ろめたさを少しでも小さくするための研究を続けています。

たとえば、日本の国土の7割を森林が占めますが、人工林は人間が間伐などの手入れをすることで保水を含めた環境の持続性が保たれます。間伐材を建材に成形すると木屑が発生します。そのような木屑を燃料にして暖房や給湯を行うことは技術的には十分可能で、むしろそれを地域の経済活動の中に定着させることが必要になっています。建築の僕の分野では、建物の断熱性能を向上させ、エネルギー需要を低減できれば、未熟で不安定な燃料供給体制を安定化させることへの貢献などが期待されています。この他にも地域の未利用資源を活かすパッシブクーリング、パッシブヒーティングの研究を行っています。断熱、遮熱、蓄熱、通風計画といった建築的工夫、さらに地下水などの地中熱・冷の利用、水分蒸発による気温・放射温度の低下などをできるだけ行ない、そのうえで、アクティブな機械設備の負担を小さくする研究を好んで進めています。

研究室紹介 10　laboratory 10

利用者の視点から考える、快適で省エネルギーな建築環境

卒業論文発表会後の開放感あふれる卒論生たちと（前列中央が中野先生）

中野淳太

Junta Nakano

［准教授／建築環境学・
建築設備工学・熱的快適性］

1974年英国生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院博士後期課程単位取得退学、博士（工学）。著書に『快適な温熱環境のしくみと実践』（共著、空気調和・設備工学会）、『しくみがわかる建築環境工学 基礎から計画・制御まで』（共著、彰国社）など。

冷暖房は建物で使うエネルギーの約1/3を占めています。いま社会的に省CO_2・省エネが求められていますが、やせ我慢は長続きしません。中野研究室では、利用者にとって「ほど良く快適な温熱環境」という視点から、人－空調設備－建築の関係を見直す研究をしています。

人は本来、さまざまな環境に適応する能力をもっていますが、室内では空調に頼りがちです。でも外で暑いと感じたら、シャツの袖をまくる、うちわで扇ぐ、日陰に移動する、などのように自分の状況を調節しています。これをヒントに、冷暖房のない半屋外環境（駅・テラス・広場・アトリウムなど）にて利用者の行動観察と心理量調査をしてきました。10年以上のデータの蓄積から、環境に対する行動的な適応・心理的な適応（環境の受け止めかた）・快適環境の許容範囲などの法則性を明らかにしています。また、ディープラーニングを活用した着衣調節などの行動分析にも取り組んでいます。人が本来もっている環境への適応能力を最大限に引き出し、空調に依存しない建築と設備の計画を提案しています。

見えないものをみる力

教員インタビュー　Faculty Member Interview

山川 智
Satoshi Yamakawa

［特任教授／建築都市環境設備計画］

1969年東京生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院修士課程修了。東京電力株式会社に入社。在職中に芝浦工業大学大学院博士課程修了、博士（工学）。退職後、現在に至る。空気調和・衛生工学会賞、省エネ大賞等を受賞。共著書に『ZEBのデザインメソッド』（技報堂出版）など。

── 見えないものを見る力とは？

快適で気持ちのいい室内環境を創造する。これは建築環境設備の大切な役割のひとつです。しかし、これは目に見えるものではありません。快適な環境のためにエネルギーを消費し、それに伴い温室効果ガスが排出され、そして気候変動が深刻化していきます。これらはすべて目に見えません。これらの課題を解決してゆくために「見えないものを見る力」を身に付けてほしいと思います。

── 建築学科に進んだわけは？

世界で活躍する建築家に憧れて建築学科に入学しました。長期休みには世界の建築を見て歩き、欧州や北米だけでなくインドの砂漠の集落や、南極近傍のパタゴニアの強風の街などを訪ねるうちに、建築の形態だけでなく、人々が生活するための環境に興味をもちました。そして大学3年生の授業で聴いた環境共生都市の研究に魅力を感じ、修士まで進みました。その後、企業で建築・都市の環境設備の計画や研究に携わり、社内外の技術者や大学の先生方より多くのことを教わりました。今度はそれらを次の世代に伝える仕事をしたいという想いに駆られ、大学の教壇に立つ道を選びました。

── 学生へのメッセージをお願いします。

興味をもったことは、情熱的にとことんやって欲しいと思います。それが役に立つかどうかは、そのときにはわからないものです。私にとって、学生時代の建築巡りや設計事務所のバイトを通じて学んだことは、今でも仕事の糧となっています。

（インタビュアー：金澤里奈、新倉穂香）

光陰矢の如し

前列右端が岩田先生。

寄稿 Contribution

岩田利枝

Toshie Iwata

［東海大学元教授
（2021年3月退職）］

1955年東京都生まれ。早稲田大学工学部応用科学科卒業、建築学科卒業、同大学院理工学研究科博士課程単位取得、博士（工学）。カナダ国立研究所客員研究員、国立公衆衛生院建築物衛生室長、オランダ・デルフト工科大学客員研究員を経て、現在に至る。2009年日本建築学会賞（論文）、2013年空気調和・衛生工学会賞、2014年松前重義学術賞を受賞。2021年東海大学教授退職。主な著書に『最新 建築環境工学』『生活環境学』（ともに井上書院）など。

私の東海大学での教員生活が22年以上になったと言ったら、研究室の卒論生にすごく驚かれた。「えー、そんなに長くよく続けられましたね。無理、信じられない」。驚嘆されすぎて恥ずかしくなったが、考えてみれば、まだ22年しか生きていない学生にとっては、そんなに長い間、同じ仕事を続けるためにはとんでもない忍耐力や持続力が必要だろうと考えてしまうのかもしれない。

──どうやったら、そんなに続けられるんですか？

研究に関して言えば、私も研究を始めた当初（私も卒論生だった）は、卒論の1年で得られる結果から考えて、10年もやればやりきれるのではないかと思っていた。しかし、謎が謎を呼ぶという展開になり、些細と思われたテーマでもやりとげるには人生は短すぎるのだと思うに至った。多分、研究以外の仕事でも、同様なのではないか。

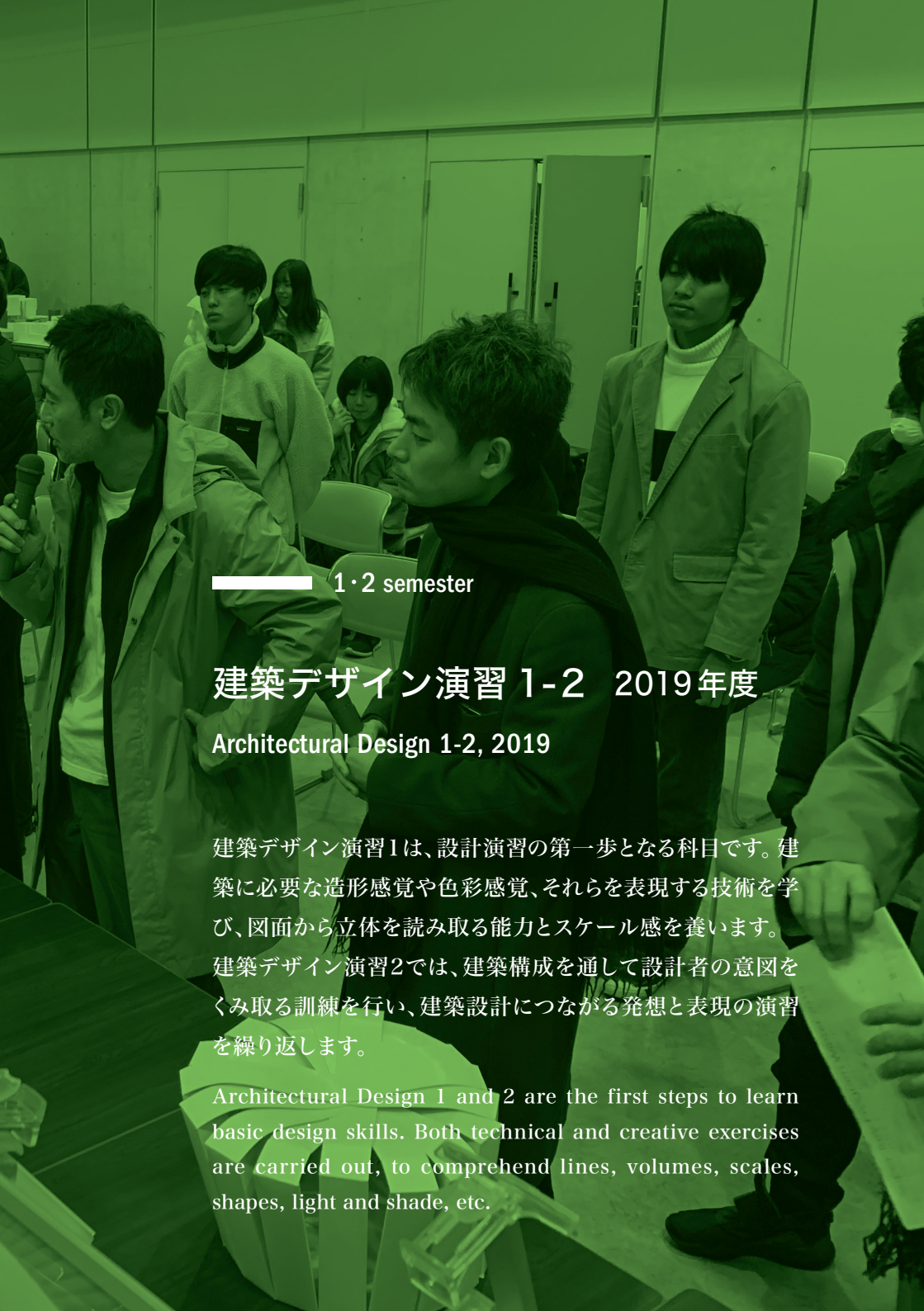
── やりたい仕事とか、自分に向いている仕事って、わかるものですか？

私も学生の頃は、やりたいことと、できること、やらなければいけないことの距離が大きいなと悩んだ。そこを小さくしようと思った。あとは消去法かな。私の場合、できないことや向いてないことが多くて、これしかなかった気がする。

── 教員生活の反省は？

授業も頑張ったのですが、なかなか環境工学の面白さを伝えることができなかったのが、すごく残念です。

不思議な階段



1・2 semester

建築デザイン演習 1-2　2019年度

Architectural Design 1-2, 2019

建築デザイン演習1は、設計演習の第一歩となる科目です。建築に必要な造形感覚や色彩感覚、それらを表現する技術を学び、図面から立体を読み取る能力とスケール感を養います。建築デザイン演習2では、建築構成を通して設計者の意図をくみ取る訓練を行い、建築設計につながる発想と表現の演習を繰り返します。

Architectural Design 1 and 2 are the first steps to learn basic design skills. Both technical and creative exercises are carried out, to comprehend lines, volumes, scales, shapes, light and shade, etc.

建築デザイン演習 1-2

建築デザイン1-2で学ぶこと

建築デザイン1-2では、将来建築に携わる際に必要なスケール感や造形感覚などの基礎的な素養を身につけることと、空間提案の内容を伝える表現技術を学ぶことを目的としている。建築デザイン1では主に、図面の基礎的表現や建築模型のつくり方、パース・アクソメなどの立体表現を習得し、さまざまな表現方法の知識と具体的技術を身につける。建築デザイン2ではそれまで培った表現技術を活かし、空間構想や家具デザインなどの具体的なデザインに挑戦し、最後には建築的な提案として実際の敷地に建つことを想定した小空間や場の設計に取り組む。

建築デザイン1 課題
線の練習／図面の基礎「ポチの家」／図面の練習「森の中の家」平面図・立面図・断面図・矩計図、
ボリューム模型／実測の図面化／パースの描き方「森の中の家」内観・外観・透視図／小空間の設計

建築デザイン2 課題
内部空間のデザイン／家具のデザイン／小さな建築の設計

―なぜ最初に手描きの練習や模型の制作をするのでしょうか？

加藤仁美（以下同）：建築家の建築作品の図面を読み取りながら、これをトレースすることにより、その作品がどのような空間構成をもつ建築なのかを把握することができます。また、2次元の図面を3次元に置き換えながら模型を制作することで、その建築の外観や造形、素材や構法、ディテールを理解することができます。図面や模型により、敷地上の建物の配置や周辺との関係性を把握することにもなります。手描きによる図面や模型の制作は、その建築の空間を理解していく重要なプロセスだといえるでしょう。

―「森の中の家」を題材にしている理由は何ですか？

建築家吉村順三が自分の別荘として設計した「軽井沢の山荘」とも呼ばれる名作です。小さな住宅ですが、周囲の自然と調和した外観と豊かな内部空間をもっています。たとえば、鉄筋コンクリート造の小さな1階の上に、片流れの木造部分を載せた構成で、2階がまるで浮いているようにみえます。主な居住部分である2階は、4間角の正方形平面で、居間兼食堂を大きくとり、L字型に窓を開いて外を取り込んでいます。吉村順三がこの建築に求めたものは「自然とともにあることが感じられる質素で気持ちの良い場であること」だといわれています。軽井沢の四季折々の変化や自然を感じることのできる心地良い空間を想像、理解しながら、図面を描いてほしいと思います。

―図面などの評価基準が分からないのですが？

トレースした図面をみると、建築作品の空間構成や構法、ディテールを理解して描いているか

どうかがよく分かります。図面の描き方には、手順も含めて一定のルールがあります。1本1本の線にも、建築の断面を示している線なのか、向こう側に見える線なのかなど、それぞれ意味があります。ルールに沿って描かれていないと、建築空間を正確に相手に伝えることができません。その表現がきちんとなされているかどうかが、基本的な評価基準になります。

── 学生に気をつけてほしいことは何ですか？
建築デザインでは、建築空間を理解し、創造していくプロセスが何よりも重要です。少々手先が不器用であったり、作業に時間がかかったりしても、地道に作業を重ねていると、最初は目に見えなかったことを形にしていくという楽しさや達成感を得ることができます。皆さんが普段何気なく歩いている町には多くのデザインされたものや空間で溢れています。日頃から、心地良いデザイン、空間とは何かをぜひ観察しながら生活してほしいと思います。

── 「建築デザイン1」と「建築デザイン2」はどんなところが違いますか？
野口直人（以下同）：「建築デザイン1」では、図面の読み書きや建築模型の作り方、立体図の描き方など基本的な表現技術を身につけ、理解することが目的です。デザイン1の最後に行う「小空間の設計」や「建築デザイン2」からは、身につけた表現技術を使って実際の空間をどのようにデザインし、どう表現するのか、具体的な課題を通してトレーニングすることが中心になります。

── 「内部空間のデザイン」や「家具のデザイン」は建築とどんな関係がありますか？
皆さんは建築を学び始めたばかりで、最初から大きな建築の設計は難しいので、まずは身近にイメージできる大きさや条件のもののデザインから始めます。「内部空間のデザイン」は光をどのように取り入れて小さな空間を演出するのか、光と空間の関係を考えます。「家具のデザイン」は実際の荷重に耐えられるように原寸で制作し、構造と素材の関係を考えます。いずれの課題も、与えられた条件を満たすだけでなく美しく機能的なデザインを考えることが重要です。採光や構造、素材などを考慮して形のデザインをすることは、規模の大小にかかわらず必要で、実際の建築を考えるうえでの基本となる感覚を学びます。

── 作品の評価基準がよく分からないのですが、どうすれば成績があがりますか？
建築デザインの授業はスポーツに似ています。練習もせずにいきなり試合には望めないでしょう？日々の練習やトレーニングを根気強く続けることが試合で活躍できる一番の近道です。良い評価の提案の陰には、必ず地道に積み重ねた思考と表現技術があります。自分にはセンスがないから、という言葉をよく聞きますが、センスだけでは建築デザインはできません。授業時の課題や学外での宿題は地道な作業ですが、根気強く丁寧に計画的に取り組みましょう。早々に諦めずに考えること、手を動かすことを続ければ必ず結果が伴います。

── 設計の授業は必要ですか？
もし将来、構造や施工、環境設備などの分野に進むとしても、建築の仕事をするには図面から空間をイメージしたり、逆に頭で考えた発想を図面で表現し、相手に伝える力が不可欠です。この能力は、単なる知識ではなく、トレーニングによって身につくものです。設計の授業は、具体的な課題を通してその能力を磨くものだからぜひ履修して、将来の可能性を広げてください。

建築デザイン演習2　第1課題

陰影をとらえる

担当教員：伊藤喜彦、加藤仁美、十亀昭人、野口直人
彦根 明、森昌樹、番場俊宏、井上 玄、伊藤州平、森屋隆洋

自然光を採り入れて陰影のある内部空間を提示しなさい。

設計条件
・内部空間を覗くための開口と自然採光のための開口をそれぞれ1 つ以上設けること。
・空間の大きさと形は自由とするが、模型のサイズは幅500mm ・奥行500mm ・高さ500mm 以内におさめること。ただし、建築で常用される縮尺を用い模型自体に「縮尺」を明示すること。
・任意の場所に建築されているものとし、模型自体に「方位」を明示すること。
・空間に対して用途や機能は求めないが人がどのように空間を体験するかをイメージし、内部空間に人の点景を配置すること。
・使用できる模型材料は自由とするが、色 ・反射率 ・屈折率 ・透過率などを考慮し用いること。
・作品名と説明文、意図する陰影をとらえた模型写真などを用いて、作品をプレゼンテーションすること。

評価のポイント
主な評価対象は外部形状ではなく、内部空間である。空間と開口の形 ・大きさ ・配置など光の導入方法の組み合わせ追求し、効果的に構成できているか、建築空間における光の現象を理解したうえで、陰影による豊かな空間表現を提示できているかを評価する。

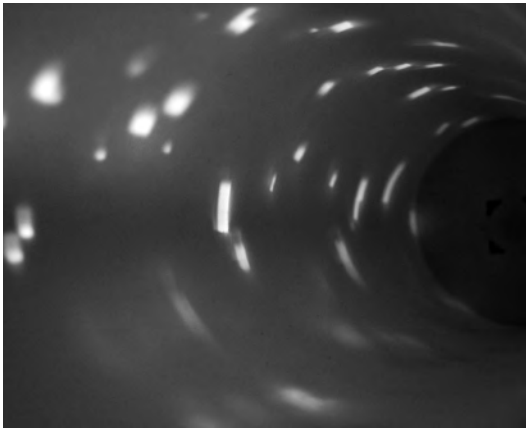
出題教員コメント

この課題は、光の効果を学び空間造形に活かすトレーニングである。とりわけ「陰影」に焦点を当てることで、光の表現をより深く掘り下げてほしいという意図があった。中元案は円筒形の外郭に対して透過する膜を重ねて張っていくことで、とても柔らかな光のグラデーションをつくり出している。杉山案は四角柱の外郭の一辺にだけにランダムな開口部を設け、内側に円筒形のフィルター取り付けた二重構造とすることで、光のズレを視覚化させている。ともに幻想的な秀作である。川合案は開放的なつくりにも関わらず、陰影のコントラストを感じることができる不思議な案で、緻密なスタディが結果に現れている。渡部案は箱自体を床から浮かせることによって、床側に円錐形の光源つくり出そうとする試みが面白い。ガルシア案はトップライトにスリットを用いることで強い光を生み出し、四角錐の空間に投影させることで遠近感のあるダイナミックな空間をつくり出していることが評価された。（森屋隆洋）

渦

中元萌衣
Mei Nakamoto

筒状の空間に異なる半月型の層を重ねて光のグラデーションをつくる。より明るく遠い方に引き込まれる。



光の塔

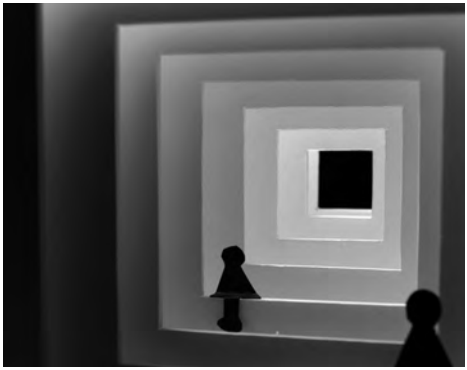
杉山広人
Hiroto Sugiyama

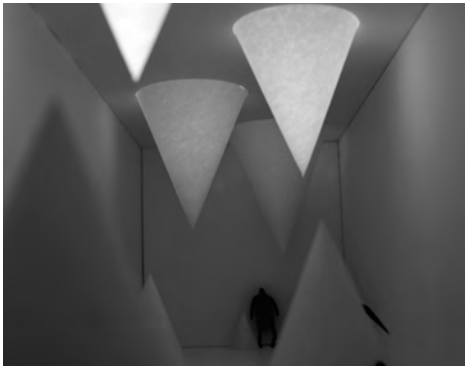
立方体の穴から入ってきた光は内部にある円柱のフィルターに阻まれ、間接的な照明になる。

DEPTH SHADOW

川合芽依
Mei Kawai

奥と手前で光の入り方が違うことで、光で空間を分けているようになり、さらに影が外側に伸びてゆく。





Paniculate

渡部裕介
Yusuke Watabe

光の広がりを抑え、柔らかな光に変える。光・視線・動線を制御し、複雑で調和のとれた空間を設計した。

光の連鎖

ガルシア・ミツオ
Mitsuo Garcia

光の入射角度、時間や光の強さによって内部の光景が大きく変わり、何度行っても楽しめる空間である。

建築デザイン演習２　第２課題

コドモノイス

構造とデザイン

担当教員：伊藤喜彦、加藤仁美、十亀昭人、野口直人
彦根 明、森 昌樹、番場俊宏、井上 玄、伊藤州平、森屋隆洋

子どもが使うことを想定し、目的、状況、場所を自らで設定し、そこで「座る」ことにふさわしい「イス」をデザインする。
これまでの課題でも学んできた、スケールや身体寸法に注意し、自分が思い描く、新たな座るための道具としての「イス」を提案すること。

デザインの条件
「形状」
・平面の形状が300mm ×300mm の範囲とする。
・形状は基本的に自由だが、座面を地面や台に置くことは禁止とする。

「素材」
・紙を用いること。(段ボール、紙管などの紙を加工して作られた材料も可)
・最低限の材料同士の接着、固定に紙以外の材料を用いることは可とする。

「強度」
・自立すること。
・子どもが座って壊れないこと。(提出物は、10kg の重りを乗せて強度の確認を行う)

評価のポイント
・想定した使われ方と、デザインの関係。
・構造とデザインの有機的な関係。
・素材の特徴の把握・強度。(10kg の重りを乗せた際に壊れないこと)
・美しさ。

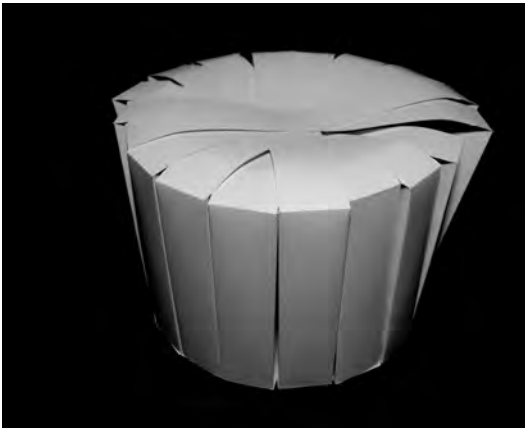
出題教員コメント

子どもが座るための道具としての「コドモノイス」のデザインを通じて、「スケール」「構造」「材料の特性」など、建築の基本となる要素をきちんと意識しながら、美しい形に取りまとめることを目的にした課題である。短冊状の厚紙が接着されずバラバラでありながらも荷重をかけることで形態が安定し、やわらかさと強度を共存させた菊池案、筋交いが巧みに交差しながら規律性と複雑性を両立させた加藤案、ケント紙の繊細で丁寧な加工により強度と美しさを獲得した矢崎案、斜めの切り込みによって荷重をかけた時に捻れを伴って形態がやわらかく変化する大林案、筋交いが細かく螺旋状に配置され構造要素が美しくデザインされた秋山案など、いずれの作品も紙という素材だからこそのデザインと構造を有しており、多様性に富み、課題に対して真摯に答えている。(番場俊宏)

弾むイス

菊地優衣
Yui Kikuchi

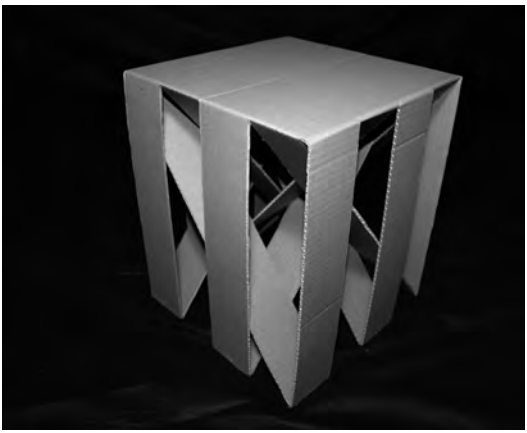
紙という軽い素材のため持ち運びしやすいことに加え、子どもが使うため遊び心のある椅子をデザインした。



幾何椅子

加藤龍也
Ryuya Kato

この椅子は1枚のダンボールを切って折るだけでつくれる。見た目が整然としていて美しく、強度もある。



放射状に広がるイス

矢崎翔也
Shoya Yasaki

放射状に広がる紙と、それを取り囲むように配置された紙それぞれが支え合い、座屈を防ぐ構造になっている。

Sink

大林 愛
Ai Obayashi

斜めに切り込みを入れた厚紙を4層にし、座ると沈みはするが潰れず綺麗に変形する椅子を設計した。

鼓

秋山奈津美
Natsumi Akiyama

外部と内部で傾きが異なる軸の回転力により重さに耐える。構造がそのままデザインとなる椅子を目指した。

建築デザイン演習2　第3課題

空間の分節とかたち

キーワード：大きさ、プロポーション、バランス

担当教員：伊藤喜彦、加藤仁美、十亀昭人、野口直人
彦根 明、森 昌樹、番場俊宏、井上 玄、伊藤州平、森屋隆洋

立方体の空間に対し、容積の50%（半分）を埋めることで残りの50%の気積を立体的な空間としてデザインしなさい。
空間をかたちづくるということは、ある大きな空間を分節したり切り取ることと言える。大きさ、プロポーション、バランス、それらをどのように関係づけて構成していくのか。有限で単純なかたちである立方体のなかに、分節や切り取るための「かたまり」となる部分と、切り取られた「気積」となる空間のかたちを考える。
立方体のアウトラインを活かし、それら「かたまり」と「気積」の自由で魅力的な関係性やさまざまな大きさの空間のつながりをデザインできるかを評価する。

設計条件
・立方体の大きさは7.5m ×7.5m ×7.5m とし、その中を50%の「かたまり」で埋め、
　残りの50%の「気積」を立体的な空間としてデザインする。
・「気積」となる空間はひとつながりとし、外に対して完全に閉じた空間とならないこと。
・「かたまり」となる部分はあくまでもかたまりとして表現すること。人が入ることはできない。
・重力の概念があるものとし、必ずひとつの面が底面となること。
・底面以外の5 面のうち最低3 面から空間が確認できること。
・人がどのように空間体験するかを考え、人を配置すること。
・最終的に立方体のアウトラインが認識できないものは不可とする。

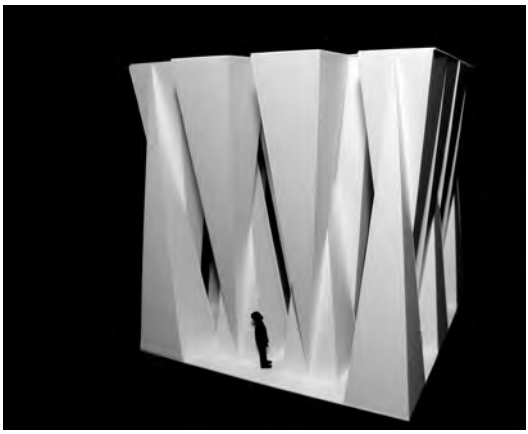
出題教員コメント

デザインをするうえで物理的な“もの”に対して考えていくことだけではなく、そこに空間を出現させるために“もの”をどのように扱って組み立てていくかについてより意識を向けることを目的とした課題である。ポジ（かたまり）／ネガ（気積）=50%／50%と設定し、いかにネガ（気積）のかたちを興味深く浮き上がらせる（ポジ化）ことができるかがポイントである。優秀な案の多くに、まず50%のかたまりを幾何学的なルールで分割しそれらを図式的に組み立てることで、結果的に50%の気積のかたちを浮き上がらせるストーリーとした案が多く、岩上案、長瀬案、土井案、渡部案はその完成度が高かった。しかしながら、手法に固執することでなかなかダイナミックな空間にたどり着かない案も少なくなかったなか、木村案は様々さまざま厚さの面材を感覚的に積層し、“かたまり”としてのかたちに不安定感を与えることで気積のかたち（空間）を浮かび上がらせた秀逸な案である。（伊藤州平）

反転

木村友香
Yuka Kimura

切り方は規則的だが、厚さの違うものを積み重ねていくことで、アンバランスな空間が生まれる。



錐

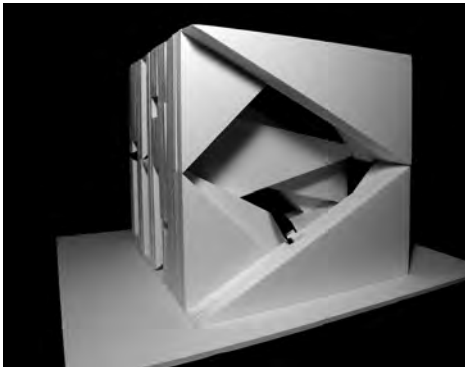
岩上奈菜美
Nanami Iwakami

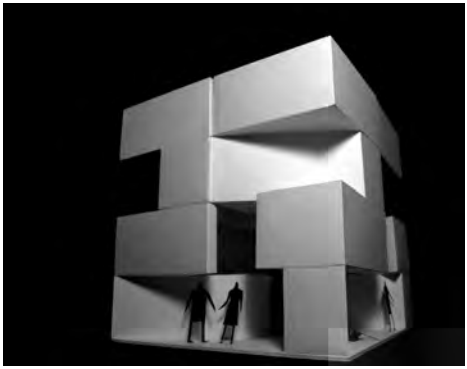
四角錐のパーツを組み合わせていくことでさまざまな隙間ができ、人が自然と空間を探し出すような形にした。

Hide-and-seek

長瀬ルナ
Runa Nagase

傾き方が違う坂が重なり合うことで、坂を歩く人が隠れたり、現れたりする場面を楽しむことができる。





Look up

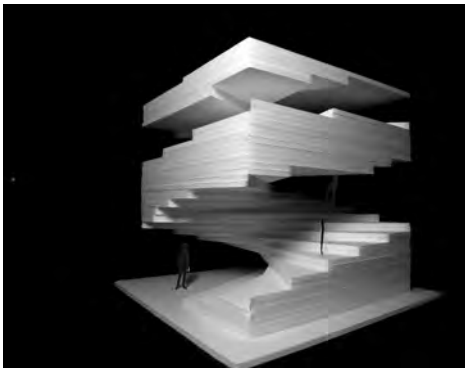
渡部裕介
Yusuke Watabe

シンプルな操作で複雑な空間を生む。規則的な配置だが、見上げると複雑で開放感のある空間が広がる。

それぞれの層が生み出す変化

土井龍之介
Ryunosuke Doi

一定の厚みの層を重ねるという単純な操作によって、天井高と幅の変化を感じることができる空間をつくった。



建築デザイン演習2　第4課題

価値の転換

前半:「場」の価値を発見し評価する
後半:「場」から生まれる「コト」をデザインする

担当教員:伊藤喜彦、加藤仁美、十亀昭人、野口直人
　　彦根 明、森 昌樹、番場俊宏、井上 玄、伊藤州平、森屋隆洋

前半課題:「場」の価値を発見し評価する

自分が普段使っているキャンパスを注意深く観察し、気になった場所や状況に対してどのように感じているのか「自分」で考え、その場所のもっている価値を発見してみてください。たとえば、他の場所にはない広さや狭さ、人や物の密度、そこから見える景色、その場ならではの人の行為、特徴的なかたち、時間による変化、などなど。そして場のもっている特徴を、図面、写真、グラフ、他との比較などの客観的な資料を用いて評価し、他者が分かりやすいようにプレゼンテーションしてください。

後半課題:「場」から生まれる「コト」をデザインする

前半で選定した場の価値を活かして、そこに何かしらの小さな「空間デザイン」を加えて、いままでそこで起きていなかった「コト」を生み出してください。「コト」は何でもよいですが、人の行為の具体的な状況を思い描き、自分がその場を使ってみたい・見てみたい・居たいと思えるような空間や状況を目指してください。
提案の規模は自由ですが、その場だからこそできることが望ましいです。そして単に「コト」が可能な場をつくるだけでなく、「コト」を生み出すことで「場」の価値が増幅するような、「場」を育てるような提案をしてください。小限の操作で最大限の効果を生むような提案を期待しています。

出題教員コメント

単に要求される条件をこなすのではなく、自らの切り口で現状を評価し、価値を見出し、それを具体的提案に昇華させる。この一連のプロセスを当たり前と思ってほしい。現状を疑うことは建築的常識のない一年生のほうが優れている。場のもつ心地よいスケールを発見し人の小さな接触を生み出した池谷案や、境界をさりげなく横断させる操作で線を面に昇華させた木村案は、場の価値を活かしながらも状況を鮮やかに転換している。人の流れに制御を加えることで活動を誘発させた高橋案は場の状況の繊細な読み解きに優れ、空間を構成する要素として遠くの景色を等価に扱った庭山案は、他の提案にはない着眼点で驚かされた。いずれの案も、「場」のもつ価値を最大限に引き出す力作である。(野口直人)

ひきとめられる

池谷琳花

Rinka Ikeya

ただ通るためでしかない道に操作を行い、人が造形によって自らその場にひきとめられるような空間を考えた。

見えない道を崩す

高橋 和

Nodoka Takahashi

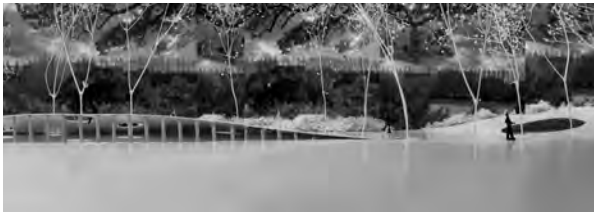
17号館までの最短ルートという「見えない道」を崩し、歩くこと、留まることを誘発する曲線を設計した。

景色に集う

庭山隼輔

Shunsuke Niwayama

座るという機能しかもたない場に、隠れていたキャンパスの景色を発見させ、景色に人を取り込む計画。



奥深い空間

木村友香

Yuka Kimura

木と道により直線が強い"通り"に、高さや隙間が違う柵を曲線に配置し、並木路という"空間"が生まれる。

建築デザイン演習1

小空間の設計

身体寸法と空間

担当教員：小沢朝江、伊藤喜彦、加藤仁美、十亀昭人
金子哲也、長谷川栄子、番場俊宏、平本 玲、藤田大海、森 昌樹

身体に近い寸法をもつ単純な形態を複数回操作し、出来上がる形態や内部、外部空間の多様性を共有することを第一の目的とする。また、各自が行った操作について、他者に説明できることを第二の目的とする。

1. 外形寸法1,800×1,800×18,000mm のチューブ状の形態に、何らかの操作を複数回加え、その内部・外部ともに使用できるものを想定する。
2. 模型の素材と厚み、着色は自由だが、内部に空間があること。自らの設計にふさわしい素材を考える。たとえば、スチレンボード、ケント紙、木、金属など。
3. 加えた操作のなかで、優勢な操作の名前をサブ・キーワードとして挙げる。たとえば、切断、曲げ、貫入、捻る、積み重ねるなど。
4. 出来上がる空間や形態にキーワードをつける。たとえば、悲しい、激しい、可愛らしいなど。
5. どのように使用できるか、その機能を提案する。たとえば、学生のための休憩所、ベンチ、公園内の東屋、フォリーなど。

出題教員コメント

定義された筒状の形態に何らかの操作を与え、元の形態をほのめかしつつ、いかに初期状態から飛躍した空間形態を創作できるかという課題である。池谷案は「桁違いな切れ込み」による空間拡張を試み、岩垣案は「繊細な模様」の場を創出し、都丸案は「潰し」と「拡張」によって初期設定を超えた空間を生み出した。面と線の対比を表現した柴田案、単一断面の比率を操作し奥行き感を創出した長瀬案、建築的思考で空間をまとめあげた菊地案、積層された階段状の加工が目を惹く清水案、傾きをもったユニットを並列させることで密と素を提案した佐藤案、傾斜によって錯覚を起こさせる秋山案、光を取り入れた秀逸な空間を提案した岩上案など、秀作揃いであった。（森 昌樹）

解き放たれた空間

池谷琳花
Rinka Ikeya

開放感を出すためにチューブに切り込みを入れ、空間を拡張し、かつ光を採り込むことができるようにした。

Infinity

岩垣卓磨
Takuma Iwagaki

単純な形態が無限につながっていく。分割し、切り込みを入れることにより長さを延長した。

葉脈
人々が巡る空間

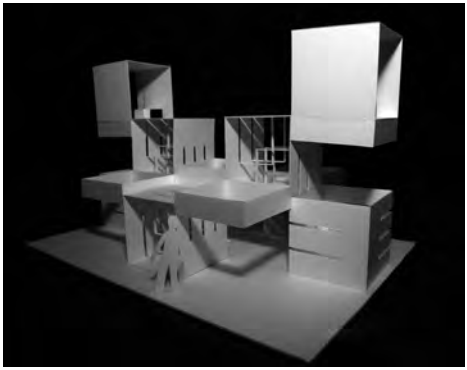
都丸優也
Yuya Tomaru

閉鎖的なチューブ空間に「潰し」と「拡張」の操作を加え、連続性と多様な居場所をもつ空間を生み出した。

積み重なる空間

柴田大五郎
Daigoro Shibata

チューブを複数の立方体に分割し、それらを立体的に広く配置することで、さまざまな視線の通る空間をつくった。



Time Tunnel

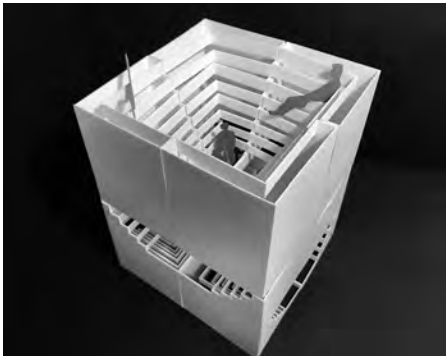
長瀬ルナ
Runa Nagase

遠近感を感じられる建物であり、どこまでも続くように見えるこの空間は、多くの人を引き寄せる。

スペースクエア

菊地優衣
Yui Kikuchi

気軽に交流・休憩でき、凹凸によりたくさんの人が利用できる。太陽光が中まで届き自然光を採り込める。



登り

清水愛夏

Manaka Shimizu

プライベートな空間と交流できる場を保ちつつ、上から下までつながる1つの空間となっている。

入り組む

佐藤 駿

Shun Sato

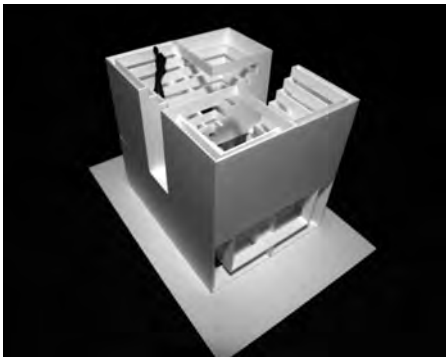
四等分したチューブに斜めの切り込みを入れ、中に折り返している。狭い場所で入り組んだ空間が楽しめる。

鷹揚

秋山奈津美

Natsumi Akiyama

各ピースを点で立たせ、折り込まれた部分が水平を保つように積む。窮屈な筒に開放感と錯覚を生じさせた。



光合成

岩上奈菜美

Nanami Iwakami

プライベートとパブリックな空間を融合させ多目的スペースとし、光とともに時を過ごせる設計にした。

東海大学を振り返って—出会いとつながりを大切に

地域交流スペースで卒業生（吉松研）と。左端が加藤先生。

寄稿 Contribution

加藤仁美

Hitomi Kato

［東海大学元教授（2020年3月退職）、
川崎新都心街づくり財団特別研究員］

日本女子大学家政学部住居学科卒業、東京都立大学工学研究科建築学専攻修士課程修了。首都圏研究所所員、母校助手等を経て、1998年度東海大学就任、1994年度日本建築学会奨励賞、2019年都市計画法・建築基準法制定100周年記念建築基準法関係国土交通大臣表彰（個人）。博士（工学）。2020年東海大学教授退職。現在、川崎新都心街づくり財団特別研究員。

東海大学を離れて1年半経ちました。22年間、学生の皆さんと、卒業研究等で体感したまちの現場、その場所の意味や人のつながり、課題などを探ってきたことがよみがえり、何より貴重な体験、財産であったと、感謝で一杯です。今は、地元のまちづくり財団で、郊外住宅地の調査研究をしていて、東海大院生にアルバイトもお願いしています。長らく関わっていたまちづくりや法制度関係の報告書や原稿の執筆もあり、自分自身の卒業研究をまとめているような気分です。

意外な卒業生との出会いもありました。財団の運営する地域交流スペースの内装を、近所で設計事務所とカフェを構えている東海大卒業生が手掛けていたり、非常勤講師でいらした先生の事務所やオープンハウスでなぜか日本女子大卒業生に出会ったり、役所の委員会では必ず東海大の卒業生がいたり…。さまざまな人とのつながりが積み重なっていることを実感しています。

思いもよらぬコロナ禍のなかで、あらためて日常の生活や地域、人間関係の大切さを実感している人も多いのではないでしょうか。公園で遊ぶ子どもたちの姿や気持ちのいい散歩道に癒されたり、身近な風景が変わったような気がします。

これからは、ゆとりをもって、さまざまな人との出会いやつながりを大切にしながら、都市や地域のハードとソフトの関係を観察していきたいと思っています。

皆さん、ぜひ自分らしい人生を切り拓いていって下さい。ずっとエールを送り続けています。

2 semester（新型コロナ対応で1年秋学期開講）

建築デザイン演習1　2020年度

Architectural Design 1, 2020

建築デザイン演習1

小空間の設計

身体寸法と空間

担当教員：小沢朝江、岩崎克也、後藤 純、十亀昭人
金子哲也、長谷川栄子、番場俊宏、平本 玲、藤田大海、森 昌樹

身体に近い寸法をもつ単純な形態を複数回操作し、出来上がる形態や内部、外部空間の多様性を共有することを第一の目的とする。また、各自が行った操作について、他者に説明できることを第二の目的とする。

1. 外形寸法1,800×1,800×18,000mm のチューブ状の形態に、何らかの操作を複数回加え、その内部・外部ともに使用できるものを想定する。
2. 操作として、「必ず内部に空間があること」「18,000 の長さをすべて使い切ること」「元のチューブの形態を活かすこと」「本来の形態が感じられる操作であること」を考慮する。チューブとは別の部品を付け加えたり、チューブの一部を取り去ることは不可。
3. 模型の素材と厚み、着色は自由。自らの設計にふさわしい素材を考える。たとえば、スチレンボード、ケント紙、木、金属など。
4. 加えた操作をダイアグラム等で示す。
5. どのように使用できるか、その機能を提案する。たとえば、学生のための休憩所、ベンチ、公園内の東屋、フォリーなど。

出題教員コメント

本課題は、新型コロナウイルスの猛威により遠隔授業という形で行われた。恒例課題となりつつある「小空間の設計」であるが、例年に比べても遜色ない作品が生まれたのは幸いであった。平松案は初期断面に「傾きとスライド」という操作を与え、ハンモックのように地盤面から宙に浮いた空間を、松永案は流線型の細かな切れ込みによって曲面空間を抽出し、心地良い安らぎの場を創出した。竹内案は折り込みの値を徐々に変化させることで階段状の空間を生み出した。伊藤案は内側と外側で異なる機能をもつ空間をつくり出した。新島案は階段状の加工によって生まれる表裏を巧みに利用した空間を提案した。コロナ禍での課題取組みに尽力した学生諸君に敬意を表したい。（森 昌樹）

ハンモックのような空間

平松虎多朗
Kotaro Hiramatsu

高さのレベルを上げ、床を斜めにすることでハンモックのようにひとりの時間も楽しめるようにした。

行き着いた、息つく間。

松永優香
Yuka Matsunaga

1本のキューブに連続して切り込みを入れる加工のみで、都心で暮らす人々が一息つける広場を提案した。

狭いチューブの広い空間

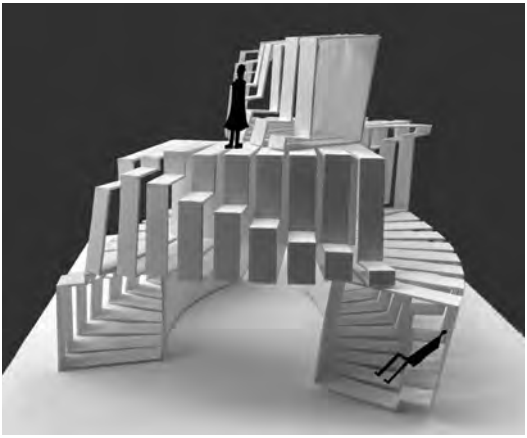
竹内飛翔
Asuka Takeuchi

切り込みを入れて曲げ、折り込んで階段状の造形をつくることで多様な空間をつくり出した。

扇ぐ階段

伊藤絢香
Ayaka Ito

5つの扇形の階段を上下バラバラにし、内部は椅子、外部は階段と、異なる利用ができる空間にした。



対称性のある L字型の凹み

新島朝也
Asaya Nijima

チューブを半分に切り、凹ませるというシンプルな操作で、各面において対称性を感じられるようにした。

ぜひ行って見て欲しい、
自然と共生する美しい住宅
「落水荘」アメリカ ピッツバーグ市郊外
（設計：フランク・ロイド・ライト、1936年）［写真：鈴木裕一］

ぜひ行って見て欲しい、
美しいコンクリート建築の造形
「ロンシャンの礼拝堂」フランス オート＝ソーヌ県
（設計：ル・コルビュジエ、1955年）［写真：山崎俊裕］

研究室紹介11　laboratory 11

建築は雑学の集大成

国際会議後のフィレンツェにてドゥオモ（シェル構造）の視察

諸岡繁洋

Shigehiro Morooka

［教授／構造力学・構造設計・
シェル構造］

1967年京都市生まれ。滋賀県立膳所高等学校卒業、京都大学工学部建築学科卒業、京都大学工学研究科建築学専攻・修士修了・博士後期課程中途退学、大阪府立工業高等専門学校非常勤講師、京都造形芸術大学非常勤講師、京都大学防災研究所助手、京都大学工学研究科建築学専攻専任講師、東海大学工学部建築学科准教授を経て、2013年より現職。

建築の良いところは正解がただ1つではないことです。数学や物理の問題だと正しい答えは1つで、それ以外の答えは×にされてしまいますが、建物を形づくる建築学科の授業では、同じ課題に対していくつもの正しい答えが出てきます。高校や予備校で出される問題を友人と一緒に解いても，答えはただ1つですから、その答えに早くたどり着いた人が（なんとなく）エラいと評価されておしまいですが、建築の設計は違います。最低限知っておくべきことを押さえたうえで、自分が好いと思えるものを時間をかけて自分のなかから取り出し、友人とその考えを話し合い高めあうことでより良いものをつくり上げます。この最低限知っておくべき内容というのが実は多いのですが、建築は40歳くらいでやっと半人前と見なされる業界なので、ゆっくりと沢山の雑学を身につけていくつもりで学べばOKです。私の専門は数式をいっぱい使った分野ですが、建物はそんな難しいことを考えて挙動しているわけではありません。建物の挙動をいかに感覚的に理解してもらうかが、現在の私の研究テーマです。

研究室紹介12　laboratory 12

自分の興味の湧くものを見つけよう

コロナ禍で行った研究室の卒論中間発表会での1コマ（上段左から2番目が山本先生）

山本憲司

Kenji Yamamoto

［教授／構造力学・計算力学］

1971年愛知県岡崎市生まれ。1994年名古屋大学工学部建築学科卒業。1996年同大学大学院工学研究科博士前期課程修了。同年東洋建設株式会社入社、総合技術研究所美浦研究所勤務。1998年鹿児島大学工学部建築学科助手。2005年名古屋大学博士（工学）。2012年本学准教授。2018年より現職。

研究室では主にシェル・空間構造の形態や座屈挙動に関する研究を行っています。コンピュータを使ってシェル形態の最適化や、座屈による崩壊挙動を計算するなどしています。簡単な模型実験による検証も行っています。最近は構造解析ソフトを使えば、高度な専門知識を持たなくても構造物の挙動が予測できます。ソフトウェアの中身を理解しなくても計算できてしまいます。日頃、携帯電話や電化製品などの仕組みを理解して使用しているわけではありませんし、便利な世の中になってそれはそれで良いのかもしれません。

大学院を卒業して会社に就職した時、とても簡単な構造物の断面力を私がコンピュータで解いているのを見て、先輩に大笑いされた経験があります。小学校の算数の足し算をいちいち電卓を持ち出して計算しているような姿に見えたのかもしれません。自分の仕事にするのであればやはりそれなりの知識が必要で、学生時代にきちんと勉強しなかったことを反省した出来事でした。構造の分野では、簡単なものを複雑に解くのはダメで、簡単なものを簡単に、複雑なものを複雑に解けてようやく普通、複雑なものを簡単に解くと褒められるようです。

研究室紹介13　laboratory 13

「適用外」を見つける

卒業式にて（後列右から4番目が野村先生）

野村圭介

Keisuke Nomura

［専任講師／構造設計・構造力学］

1986年長野県佐久市生まれ。2009年東海大学工学部建築学科卒業、2011年東海大学大学院工学研究科建築学専攻・修士修了、2013年東海大学大学院総合理工学研究科総合理工学専攻・博士（工学）修了。2013年株式会社中田捷夫研究室勤務、2016年より現職。

すべての建築物には柱や梁などの「構造」があります。法律や指針に安全な建築物を建てるための方法が示されており、その方法に従って設計者は「構造」の大きさや配置を考えています。ただし、その方法は頻繁に使われる形状や設計条件の建築物が適用対象なので、そこから外れた条件の建築物を設計するには、設計者の判断が加えられます。適切に判断すれば、適用外でも安全な建築物を設計できますが、そのためには非常に多くの知識と経験が必要になります。私の研究は、適用外の建築物に適切な判断を下せる術を提案することが目的です。さまざまな形状の建築物あるいは設計条件から適用外となる範囲を調査し、その範囲における適切な設計方法を理論や実験により検証します。さらに、検証した方法をより広い範囲に適用できるように一般化する、あるいは、誰でも使えるように簡略化することで、さまざまな建築物にも適用可能な方法の確立を目指しています。近年では、建築物を支えている地盤についての研究に力を入れています。特に、これまで軽視されていた宅地地盤に着目し、地盤を正しく評価する調査方法の確立について企業と共同で研究しています。

研究室紹介14　laboratory 14

夢のコンクリートを現実に！

高靭性セメント複合材料の実験風景（左端が渡部先生）

渡部 憲
Ken Watanabe

［学科長・教授／コンクリート工学］

1992年愛知工業大学卒業。1994年愛知工業大学院建設システム工学修了。同年4月、東急建設（株）入社。東関東支店作業所勤務を経て、技術研究所勤務。2000年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻入学。2003年日本大学大学院理工学研究科建築学専攻博士課程後期修了。2004年3月、東急建設（株）退社。同年4月より東海大学工学部建築学科勤務、現在に至る。

私の研究室では、地球環境配慮型高流動・高靭性コンクリート「R-HFDFRC：夢のコンクリート」の研究を行っています。一般的なコンクリートは、住宅の基礎や鉄筋コンクリート（RC）建築物に使われていますので、皆さんも毎日、目にしているのではないでしょうか。この一般的なコンクリート、圧縮（押す力）には強いのですが、引張（引く力）には非常に弱い材料です。そのため、RC建築物の構造設計ではコンクリートの引張強度（引張に耐える力）を無視します。また、RC建築物の壁などにひび割れが生じているのを見かけることがありますが、これは、コンクリートの引張強度が非常に低いためです。ところが、R-HFDFRCは、押しても引いても壊れ難いという、不思議なコンクリートなのです。

このような材料を、「夢のコンクリート」ではなく、「現実のコンクリート」として世の中に提供できれば、当然、これまで以上に環境に優しい、耐久性の高い、地震に強いRC建築物が実現するはずです。そのため、日々、学生さんたちとR-HFDFRCの研究を進めています（写真は、R-HFDFRC製RC梁試験体の載荷試験の様子です）。

研究室紹介15　laboratory 15

床仕上げ材の性能評価と施工労力の適正化

ドイツの国際学会にて

横井 健
Takeshi Yokoi

［准教授／建築材料・建築施工］

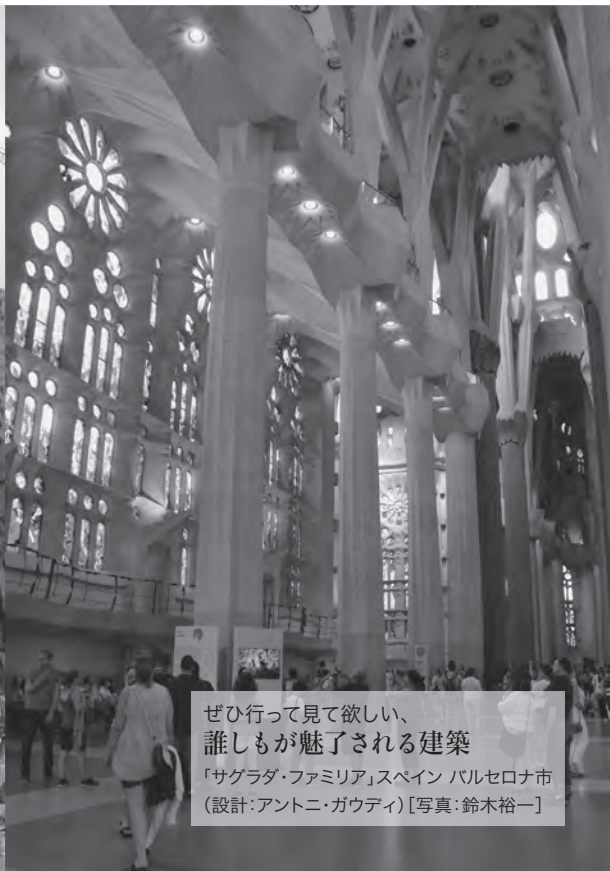
1993年福島県立会津高校入学。1996年東京工業大学入学。2000年学部卒業。2002年修士号取得。2005年博士号取得。2007年東海大学赴任。

一般に「建築材料」というと、コンクリートや木などの建物を支える構造材料をイメージしますが、横井研がテーマとしているのは、仕上げ材です。特に、床を対象としています。床は、常に人や家具などが接触しているので、床仕上げ材の良否は、建物の使い心地や住みやすさにダイレクトに影響します。

使い心地や住みやすさといった性能は、人が使ってみた感想・評価ですから、重視する事項も、善し悪しの基準も、人の心次第です。したがって、床の性能を理論的に考えるうえでは、心を数値化して検討する必要があります。ですので、床性能の研究は、大学で学べる工学のなかでも、際立って特色のある分野だと思います。また、高い機能を持った仕上げ材も、真価を発揮できるように施工されなければ意味がありません。しかし、残念ながら実際の現場では、工期や工費に限りがあるため、必用な労力をそぎ落として施工してしまい、結果として不具合が多発しているのが現状です。このような観点から、横井研究室では、性能と工期・工費の定量的関係を検討しています。

最後に、私はお酒と料理が大好きです。研究室に遊びに来ると、きっとおいしい体験ができます。

ぜひ行って見て欲しい、
近代建築5原則のモデル住宅
「サヴォア邸」フランス パリ郊外 ポワシー
（設計：ル・コルビュジエ、1931年）［写真：山崎俊裕］



ぜひ行って見て欲しい、
誰しもが魅了される建築
「サグラダ・ファミリア」スペイン バルセロナ市
（設計：アントニ・ガウディ）［写真：鈴木裕一］

Message from Graduates

OB・OGに聞く

建築男子と建築女子の仕事録

建築学科を卒業した後の進路や仕事に対する具体像を思い描いていますか？
建築は設計・計画・構造・施工・環境・設備等、多くのジャンルがあり、卒業してからの進路が最も幅広い学問です。そこで、さまざまな分野で活躍されている卒業生たちに、職場や仕事内容について、ほんの少しだけ話してもらいました。

What kind of career can we pursue with a degree in architecture? The following are interviews with our graduate who provide us a glimpse into the architectural vocations.

学生時代に学んだことがどんな建築をつくる際にも生きている

卒業生インタビュー　Graduate Interview

梅田善愛

Yoshichika Umeda

［株式会社 竹中工務店勤務］

1964年生まれ。京都府出身。1987年東海大学工学部建築学科卒業。1989年東海大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了。1989年株式会社竹中工務店入社。現在、同社大阪本店設計部 専門役設計担当。

── 学生時代、コンペで1位をとられていましたが、設計課題とコンペの捉え方に違いはありましたか？

真正面から取り組むという意味では同じです。違いがあるとすれば気持ちの部分だと思います。学校の課題はエスキスチェックの時に人の作品を見ることができますが、コンペの場合は見えない敵と戦います。だから自分を信じるしかない。そういった恐怖感の中で、まさに自分と闘うような感覚がありました。

── アトリエではなくゼネコンを選んだ理由は？

当時『新建築』で見た竹中工務店の赤坂喜顕さん(現、早稲田芸術学院校長)の作品にビビっときて、こういうのをつくる人がいる会社に行ってみたいと思いました。建築を形態としてだけ捉えるのではなくて、場所との関係や、歴史的文脈に対峙しながら創っている。当時はゼネコン設計部のことを知らなくて、そういうのはアトリエ派の人たちがやるものだと勝手に思っていたのですが、組織でもこういうのをやれるんだなと。いろんな人が居並んで、それぞれが実力を発揮できるようなところの方が自分には向いているんじゃないかと思いゼネコンに進みました。

── 今の東海大生に思うこと、学生に頑張ってほしいことは？

すごく自由に発想しているという印象があります。ただ、作品集を見ていると、匿名性が高いというと変な言い方ですが、似ているというか、「これは誰それの作品です」と物語ってくるようなものがあまりない印象も同時に受けました。それを悪いというのではなくて、そういう時代なんだろうと思いますし、逆に僕たちの側に、今後どうやって若い人たちを育てていったらいいのかという課題が突きつけられているような気がしています。仕事場でも若い人に図面を描かせてみると2次元の紙の上に3次元を想像しながら描けていない人がいます。平面図を見るだけで、断面図がなくても立体像が浮かび上がってくるようなものを描ける人と描けない人がいます。そういう意味でも、自分の身の回りにあるもので、スケール感覚を掴む訓練をどんどんすることも必要だと思います。あえてスケール感を崩して、かっこよくて、痺れるような建築ももちろんあるけれど、それはほとんどアートの世界。人の生活に根ざした建築とはちょっと別の世界での勝負ですから。

── 今の目標・夢はありますか？

大阪でやっている超高層が来年竣工しますが、都市的なスケールの作品をもう1本はやりたいと思っています。また社会貢献にも興味が出てきています。今まで一生懸命、無我夢中でやってきたけれど、そこで得たものを誰かに返さないといけないんじゃないかと。そういう意味では、岩崎先生はすごく羨ましいです。いろいろな意味で苦労や経験を積んだあとにもう一度アカデミズムの世界に戻るというのは社会人としてすごく意義のあることだと思います。今はまだどういう還元の仕方ができるかわからないですが、次世代のためにも少しずつ私の力も使っていきたいなと思っています。

（インタビュアー：大渕光佑）

経験の積み重ねで構造に強くなる

卒業生インタビュー　Graduate Interview

小山 珠

Tamaki Koyama

［株式会社アルテス取締役設計部長］

1965年神奈川県川崎市生まれ。1989年東海大学工学部土木工学科を卒業後、東海大学工学部建築学科に編入し、1991年東海大学工学研究科建築学専攻博士課程前期修了。一級建築士、構造設計一級建築士の資格を取得。現在、株式会社アルテス・取締役設計部長・本社（東京都港区赤坂）。

―― どのような学生時代でしたか？

基本的には課題に追い込まれていましたが、友人との交流は多かったです。土木学科に4年間在籍してから建築学科に編入したので、建築学科の同期は全員年下でしたが、みんなよくしてくれたので課題が忙しい時も助けてくれました。その人たちとの交流は今でも続いています。

―― 学生時代にやっておけばよかったことはありますか？

もっといろいろな建築物を見ておけばよかったと思います。難しいことは考えず自分の目で見ることが大事だと思います。

―― 構造設計の魅力は何ですか？

何もないところから一からつくり出すことの達成感、構造設計以外のことに係る人たちと、コミュニケーションをとって一つの目標に向かって計画を進めていくことに魅力を感じます。他の設計とは違い、経験を積み重ねていくたびに技術が身に付いていくので、そこも構造設計の魅力の一つです。

―― 最も印象に残る仕事は何ですか？

東日本大震災の際に、私の設計した病院は被災しましたが倒壊しませんでした。そのため、そこが緊急避難所になり、地域住民に非常に喜ばれ、理事長の方から感謝の言葉をいただきました。その時はうれしかったですね。

―― 学生たちにメッセージをお願いします。

とにかく何事にもチャレンジしてください。OBやOGとはたくさん交流してみてください。調べることは大事ですが、聞くことのほうがさまざまなことが身に付くと思います。

（インタビュアー：森 大地、樋口 光）

茶室から設備設計へ

卒業生インタビュー　Graduate Interview

横山綾子

Ayako Yokoyama

［株式会社 蒼設備設計勤務］

1982年生まれ。2005年東海大学工学部建築学科卒業。2007年東海大学大学院工学研究科建築学専攻修士課程修了。2007年株式会社蒼設備設計入社、現在に至る。

── 横山さんは学生時代、常に成績トップで、幅広い分野の科目を学び、さらに海外建築研修や卒業設計のお手伝いまで経験したうえで、なぜ設備の仕事を選んだのでしょうか？

成り行きもありますが、たとえば、家や部屋選びの時に、居心地のいい空間が好きで、日当たり、水回り、居心地のよさが最優先です。居心地のよさって結局、環境・設備のことですよね。身近な生活空間の機能を与えることがやりたかったようです。海外研修ではアメリカの名建築を見ました。学部1・2年の時は卒業設計のお手伝いをして、3年の時は小沢先生に誘われて保存建築の調査もお手伝いしました。計画系だけでなく、むしろ構造系・環境系の科目を好んでとっていましたが、趣味の茶道が高じて、小沢先生のお誘いもあり修士課程まで茶室の研究をしました。

── ところで、ずばり、設備設計の魅力は何でしょうか？

設備は仕上げで隠されることが大半で、快適性を提供して当たり前ですし、お客さんに直接感謝される場面が少ないんです。それでも続けるのは、快適性という機能を与えることが好きなんでしょうね。建築分野の中で環境、エネルギー問題に直接つながっていることも魅力だと思います。
最近、設備設計の仕事がすごく面白くなってきました。経験値が増えてできること、新たに勉強しないとわからないことも見えてきて。奥の深さがわかってきたからこそ、そう思えるようになったんでしょうね。

（インタビュアー：高橋 達教授）

Message from Graduates

OB・OGに聞く 建築男子と建築女子の仕事録

彩りある人生を〜得意な分野を武器に 〈建築女子〉

株式会社竹中工務店
東京本店 建築設計・設計部
東京都江東区

入社して10年目に、医療・学校チームに配属となり、中規模の病院や学校の改修などを多く手掛けるようになりました。元々医療に興味があったので、いずれはその分野に精通したいと考えておりました。病院を設計するのは思った以上に大変でした。初めて病院の設計担当として院長先生と対面した時から竣工まで、医療建築をやったことがないとは言えず、会話の中で出てきた医療器具の名称、聞いたことのない室名などを打合せ後に必死に調べ、諸先輩方にもレクチャーを受ける日々でした。会社で分からないことが多すぎて相談すると、「どんな物件も、1から調べ掘り下げていくのが設計だから同じだよ」と励まされ、毎回異なる設計条件に対し、考え調べる、社内を巻き込んで相談するなど、地道な設計のアプローチに近道はないことを学びました。結局20年経っても精進の日々は続きますが、病院を2件携わると、知識も身につき、病院以外の分野にも活かせています。

学校の改修工事では、大震災以降、耐震天井化工事を請けることが多くなり、5件行うといつの間にか社内では「天井のプロ」と言われるように。毎年学校が休みの夏休みに工事を行うことが多く、暑いなか汗だくで高い足場にのぼり、足がすくむ高さのなか、天井下地、意匠の確認、指示を行うのが恒例です。今年の夏も2件の改修工事が行われています。

デザイン、コンセプト立案が得意な人、詳細ディティール納まりが得意な人、それぞれに得意なことがあるというのは非常に強みです。また、得意でなくても、学ぶ姿勢さえあれば、周囲からの意見を柔軟に取り入れ、プロジェクトを推進することができます。

設計とはチームプレーであり、志を同じくする仲間とともに力を合わせて作品を世の中に残していく、とてもやり甲斐のある仕事です。建築主とともに取捨選択の合意形成をはかり、ゴールまで困難に見える道のりを強い信念と粘り強さをもって取り組むことが必要だと感じています。

学生時代に何かに向き合い、突破する力を身につけた人は必ず社会でも活躍できます。自信をもって次なるチャレンジに向かい、視野を広げていってほしいと思います。

今年はコロナ禍で在宅勤務やオンライン打合せが日常化するという大きな変化がありました。家庭にも仕事場ができたことで、家庭と仕事の境が緩やかになりました。両親が働く姿を見る機会が増えたことで、より子どもたちが働くことの意味を探しやすくなったかもしれません。中1の娘は、最近よくご飯をつくってくれるようになりました。設計の仕事は残業が多く大変ですが、家族のサポートを受けながら、日々プロジェクトに関われることはとても幸せだと感じています。人生100年時代、建築に携わりながら、趣味のバレエで健康を保ち、活力のある日々を送っていきたいと思っています。

（佐川誓子・1996年度院修了）

地方都市の大学ですべきことに取り組む

〈建築男子〉

福井工業大学 環境情報学部
デザイン学科 准教授／「こども環境楽」編集長
福井県福井市

大学院修了後は、1年ほどフリーランスとして山崎研究室に出入りし、学会出張などのたびに折り畳み自転車を持参して建築・温泉・グルメ旅行を満喫していました。その後、岐阜高専勤務を経て、6年ほど前から現職です。大学教員の仕事は年々忙しさを増しており、教育・研究、学内・学会運営、書籍などの執筆、設計業務と多岐に渡ります。なんとかバランスをとりながら、可能な限り研究・設計に時間を割いている毎日です。専門はこどもの遊び環境や就学前施設の建築計画で、行動観察や意識評価などから空間・場の在り方について日々考究しています。また、建築計画研究の知見を活かして設計事務所を営む妻と共同で設計を行ったり、就学前施設の人的・物的環境改善のアドバイスなどを実践しています。環境改善アドバイスは、たとえば適切なコーナー配置の指導や、保育者・保護者と協働した遊具制作など、現場で研究実践していることで培った知見を活かしています。

こども環境学会のWebマガジン「こども環境楽」では初代編集長を務め、さまざまな活動を展開している委員の意見を尊重しながら、Webマガジンの利点を活かして発信しようと奮闘しています。地方の福井では「友人の友人は大体面識がある」という狭い世界で、動き出すと仲間内でスピーディーに物事が進むことが利点でもあります。休日には登山や釣り、キャンプなど地方の身近な自然の中で、家族と一緒に遊び、リフレッシュしながら激務を乗り切っています。

（藤田大輔・1999年度院修了）

設計した「ささべ認定こども園」保育棟内部

設計した「木もれ陽保育園」内部

左：設計した「ささべ認定こども園」外観
右：編著者として関わった書籍『保育園・幼稚園・こども園の設計手法』（学芸出版社）

変わりゆく「お役所仕事」

〈建築男子〉

藤沢市役所
企画政策部企画政策課
神奈川県藤沢市

市役所の仕事は多岐にわたります。建築技術職の仕事も例外ではなく、公共建築物の設計・積算・工事監理や都市計画・景観などの計画の策定、建築確認申請をはじめとした、まちづくりに係る各種許認可などさまざまな業務を経験します。藤沢市役所は、新採用から１０年間を能力開発期間と位置づけ、ジョブローテーションとして３職場を経験することを人材育成の方針としています。私も、公共建築物の営繕を行う部署に３年、開発許可を審査する部署に５年、確認申請を審査する部署に４年在籍しました。現在は、藤沢市内にある約４００の公共施設を統括的に経営・管理する部署に在籍し、公共施設を計画的に建て替えるためのプランづくりや、PFIをはじめとした民間企業との連携手法の企画、さまざまな部署が関わるプロジェクトの統括などを担当しています。いわゆる公共施設マネジメントと言われる仕事です。この分野は、歴史が浅く確立されたマニュアルがないため、トライアル・アンド・エラーの連続です。泥臭く地道に前進させていくものですが、この仕事に携わって、日々、市民や民間企業の方、市役所の職員との新しい出会いと発見があり、共に創りあげることの喜びや楽しさを感じています。堅く古くさいイメージをもたれがちですが、クリエイティブな仕事がしたいなら、意外と公務員はおすすめです。

（石丸悠介・2006年度院修了）

多種多様な建築物をみんなでつくる

〈建築男子〉

小田急電鉄株式会社
工務部 兼 観光事業開発部
東京都新宿区

小田急電鉄は、新宿駅から小田原駅までの小田原線と相模大野駅から片瀬江ノ島駅までの江ノ島線、新百合ヶ丘駅から唐木田駅までの多摩線で構成される鉄道会社です。

鉄道部門では、駅舎をはじめ事務所や作業基地等300を超える建物を管理し、建物の維持管理・修繕・改良や新築などの計画、設計・工事監理を担当しております。

入社後は、鉄道工事の基本である線路のメンテナンスを約2年担当し、その後、鶴巻温泉駅改良工事などの工事監理に携わりました。線路近接での工事という特殊性から、建築、土木、電気、駅やお客さま、行政など多くの関係者の取りまとめや綿密な施工計画の調整が求められます。電車を止めることなく、利用者の安全に配慮して工事を遂行するため、大きな責任感がありますが、自分で考えたことが形になり、お客さまからの感謝の言葉をいただけたときには、達成感ややりがいを感じます。社内公募プロジェクトに参加したのをきっかけに、今は観光事業開発部の技術員も兼務しております。伊勢原市大山エリアの観光活性化を目的に、空き物件の再生検討を担当しており、建築基準法制定前の建物が多く現存している同エリアで、不適合の建物の補強・改修方法の検討を行政や関係者と協議をしながら行っております。大学で学んだことと入社後のこれまでの経験の両方を活かすことができており、これからも小田急線沿線を活性化できるようにいろいろと挑戦していきたいと思っています。

（根本智嘉・2010年度学部卒）

大手総合建設会社で研究開発

〈建築男子〉

株式会社大林組技術研究所
生産技術研究部
東京都清瀬市

大林組は、建築工事をはじめ、土木・開発(まちづくり)・再生エネルギー事業など、建設業を主体としたさまざまな事業を展開する総合建設業です。そのなかで、私の所属する生産技術研究部では、特殊な条件での工事における技術的なサポートや、まったく新しい材料や工法の研究開発を行っています。

現在、建設業では高齢化や働き方改革、新型コロナウイルスの影響により、従来のような人と時間を費やすやり方を脱却すべく、大きな変革が求められています。また、脱炭素社会に向けた取り組みも、企業として欠かせない課題となっています。そうしたニーズに応え、各種課題を解決する新たな技術を生み出すことが、私たち研究開発職の仕事です。

研究開発には建設業に留まらない幅広い知識と、独創的な発想、トライアル＆エラーを繰り返す根気が必要になります。それでも、私たちが実施した研究のすべてが日の目を見るわけではありません。また、自らの開発物に対する責任も、重くのしかかってきます。そういった意味では決して楽しいことばかりではないですが、技術の先端に触れ、これまでにないものを生み出すことができるこの仕事には、他に代え難い大きなやりがいと魅力を感じています。

(中村允哉・2012年度院修了)

総合不動産管理業の建築業務

〈建築女子〉

株式会社東急コミュニティー
マンション第二技術部
多摩エリアセンター 管理技術チーム
神奈川県横浜市

東急コミュニティーは総合不動産管理会社として、マンション・ビルの管理を行っています。建築職の主な業務は、マンションの維持保全や改修計画、改修工事の工事営業、施工管理と多岐に渡りますが、私の所属する部署では維持保全に特化した、マンション共用部の「建物診断」を行っています。「建物診断」は、劣化状況・不具合状況を調査し、建物の維持に必要な改修工事や資産価値を向上するためのバリューアップ工事の提案や計画策定を行う仕事です。

マンション管理業の特徴は大きく2つあり、1つ目は既存の建物に対する業務のため、新築工事・改修工事の両方の理解が必要となることです。2つ目はお客様が個人や企業ではなく「管理組合」であることが多いことです。複数の区分所有者に対して工事提案をするため、合意形成に時間も時間を要しますし、さまざまなニーズに応えられるよう多くの引き出しを持っておくことが重要となります。年月とともに劣化していく建物に対して、いかに新築時の機能回復、さらにはバリューアップができるのかを、住んでいる人目線で検討していくことに難しさと面白さがあると思っています。

学生時代は学ぶことのなかった管理の業界に入り6年、いまだ勉強不足を痛感することも多いですが、「お客様との長い付き合い」は、この業界の特色であり魅力でもあります。東急グループとして期待されることも多いため、自覚をもって今後も楽しみながら成長していきたいです。

(今泉奈々絵・2015年度学部卒)

空間デザインで働き方を考える

〈建築女子〉

プラス株式会社
ファニチャーカンパニー
クリエイティブ事業部 PMデザイン部
東京都千代田区

プラス株式会社は、「ステーショナリー事業」「ファニチャー事業」「流通・サービス事業」の大きく3つの事業を行っています。
そのなかで、私が所属するファニチャー事業では、オフィス家具、インテリア用品の製造・販売をはじめ、オフィスや、ホテル・レジデンス、医療・福祉・教育施設の空間デザイン・施工・内装工事などを行っています。
私は現在、オフィスや教育施設の空間デザインの仕事をしています。オフィスの空間デザインは単におしゃれな空間であれば良いというわけではなく、顧客となる企業が目指す働き方や、その業務内容に合った空間を創る必要があります。そのため、初めのヒアリング段階で顧客にとって必要なものは何かを引き出し、それを空間に反映させることが重要です。
また、昨今の新型コロナウイルスの影響で働き方の多様化が進むなど、時代や環境の変化、海外の働き方についてもアンテナをはり、空間に反映させるよう努めています。デザインにおいては、さまざまな家具メーカーや内装材を扱うため、家具屋に行って新商品の情報を収集し、休日にカフェや商業施設に行った際には内装を観察し参考にするなど、日常生活にも学びがある仕事です。今後は、ホテルや福祉施設などにも挑戦し、幅広い空間に対応できる力をつけていきたいです。
（近藤美鈴・2018年度学部卒）

大手設計事務所で大規模再開発の設計

〈建築男子〉

株式会社日建設計
設計部門設計部
東京都千代田区

10年前に日建設計でアルバイトとして働き始めました。正社員になってからもうすぐ7年が経ちます。近年は日建設計でも海外での仕事の割合が徐々に増えてきていますが、私自身は入社してから主に意匠チームの1人として東京都内の大規模再開発に携わっていて、3Dモデルと図面を往復しながら、デザインの可能性を探る日々を送っています。現在は品川で計画されている東京で最大規模の再開発プロジェクトに参加しています。長い時間軸の中で建築の在り方を考えなければいけないような仕事です。大手事務所では、クライアントの要望や各関係者の多種多様な意見やアイデアが重なり過ぎて、ユーザーの顔がほとんど想像できなくなってしまうような状況が多々ありますが、それらのアイデアをいかにシンプルにできるかが大事かなと思っています。面白いのは、都市計画部や公共領域デザイン部、デジタルデザイン部など建築意匠設計以外の人たちを含めて横断的に設計チームを組み議論すると、自然にシンプルな答えが強度をもってくることです。学生時代に純粋に建築デザインについて考えていた時間が、そのような答えを導き出す基礎となっていると思っています。
（高岡尚史・2005年度学部卒・イーストロンドン大学院修了）

近年の卒業設計・卒業論文・修士論文の学外受賞者

【卒業設計】

2020年　JIA神奈川卒業設計コンクール総合資格学院賞
「都市の〈悲場所化〉―モルフェームを用いたこれからの渋谷商業空間の再構築」 三尾圭祐(岩崎克也研究室)

2020年　第8回都市・まちづくりコンクール審査員特別賞
「高円寺再反転―街の雑然性と規則性から創り出す高密度街区の再編計画」 山田康太(野口直人研究室)

2019年　JIA神奈川卒業設計コンクール審査員特別賞
「空間を食べ比べるように―小さな変化の連続が街をやわらかく繋げる」 佐々木大樹(野口直人研究室)

2018年　JIA神奈川卒業設計コンクール審査員特別賞
「街にシワを寄せる―虚構のある代々木上原」 王 欣(吉松秀樹研究室)

2016年　JIA神奈川卒業設計コンクール銀賞
「個性に寄り添う建築―LGBTを個性と認めるクリエイティブセンタ」 村上真緒(杉本洋文研究室)

2015年　JIA神奈川卒業設計コンクール金賞
「日常は壁一重―街と家族が寄り添う少年院」 中津川毬江(杉本洋文研究室)

2013年　JIA神奈川卒業設計コンクール審査員特別賞
「じいちゃんが障碍を教えてくれた―光のグラデーションが作り出す生活の秩序」 大越菜央(吉松秀樹研究室)

2013年　JIA神奈川卒業設計コンクール審査員特別賞
「時かける建築―風化への意識改革の場」 鈴木和真(渡邉研司研究室)

2012年　JIA神奈川卒業設計コンクール銅賞
「隙間が生み出す街の虚景―クレショフ効果を用いたYokohama landscape movie museum」 桜井 寛(杉本洋文研究室)

【卒業論文・修士論文】

2021年　日本建築学会優秀卒業論文賞
「1900年パリ万博におけるコンコルド門のデザイン過程について―建築家ルネ・ビネの生物学的形態研究を中心に―」 小山裕史(渡邉研司研究室)

2020年　日本建築学会優秀卒業論文賞
「〈あばら家〉の美学―絵画史料の荒廃表現にみる建築観の変容」 打越凛太朗(小沢朝江研究室)
「東京国立博物館表慶館の設計・建設過程と細部意匠の意味」 吉川春奈(小沢朝江研究室)

2019年　日本建築学会優秀卒業論文賞
「部屋用途と着座からみた畳敷きの使い分けと成立背景」 近藤美鈴(小沢朝江研究室)
「マムルーク朝期カイロのムカルナスに対する計算幾何学的検討―3次元パラメトリックモデルに基づいたセミドーム形態の変遷についての検討」 山田弦太朗(伊藤喜彦研究室)

2017年　日本建築学会優秀卒業論文賞
「伊勢神宮の式年造替における古殿・古材の撤下とその背景」 増澤水緒(小沢朝江研究室)

2016年　日本建築学会優秀修士論文賞
「戦前期の農村経済更生事業における住宅改善の施策と実態―東北地方の開 墾事業・農村指導者教育にみる先進性」 猪狩 渉(小沢朝江研究室)

2016年　日本建築学会優秀卒業論文賞
「隠居の住宅史―民家における2世帯居住の地域差と平面の関係」 今泉奈々絵(小沢朝江研究室)

2015年　日本建築学会優秀卒業論文賞
「民家における樹種の使い分けとその地域・年代傾向―「適材適所」の成立背景」 濱崎源記(小沢朝江研究室)

2012年　日本建築学会優秀卒業論文賞
「昼光利用大空間オフィスの在席検知システムを用いたブラインドのゾーン制御に関する研究」 谷口智子(岩田利枝研究室)

建築学科教員・非常勤講師一覧（2019～2021年度）

常勤教員（計画系9名、工学系8名、計17名）

計画系

岩崎克也（学部長〈予定〉・教授／建築設計）
河内一泰（特任准教授／建築設計）
野口直人（助教／建築設計）
山﨑俊裕（教授／建築計画）
十亀昭人（准教授／宇宙建築）
後藤 純（特任准教授／都市計画）
小沢朝江（教授／日本建築史）
渡邉研司（教授／近代建築史）
稲益祐太（特任准教授／西洋建築史）

工学系

高橋 達（教授／環境設備）
山川 智（特任教授／環境設備）
中野淳太（准教授／環境設備）
諸岡繁洋（教授／構造）
山本憲司（教授／構造）
野村圭介（専任講師／構造）
渡部 憲（学科長・教授／材料施工）
横井 健（准教授／材料施工）

非常勤講師（計画系21名、工学系9名、計30名）

建築界の最前線で活躍されている先生方を、非常勤講師として数多く招いています。

計画系

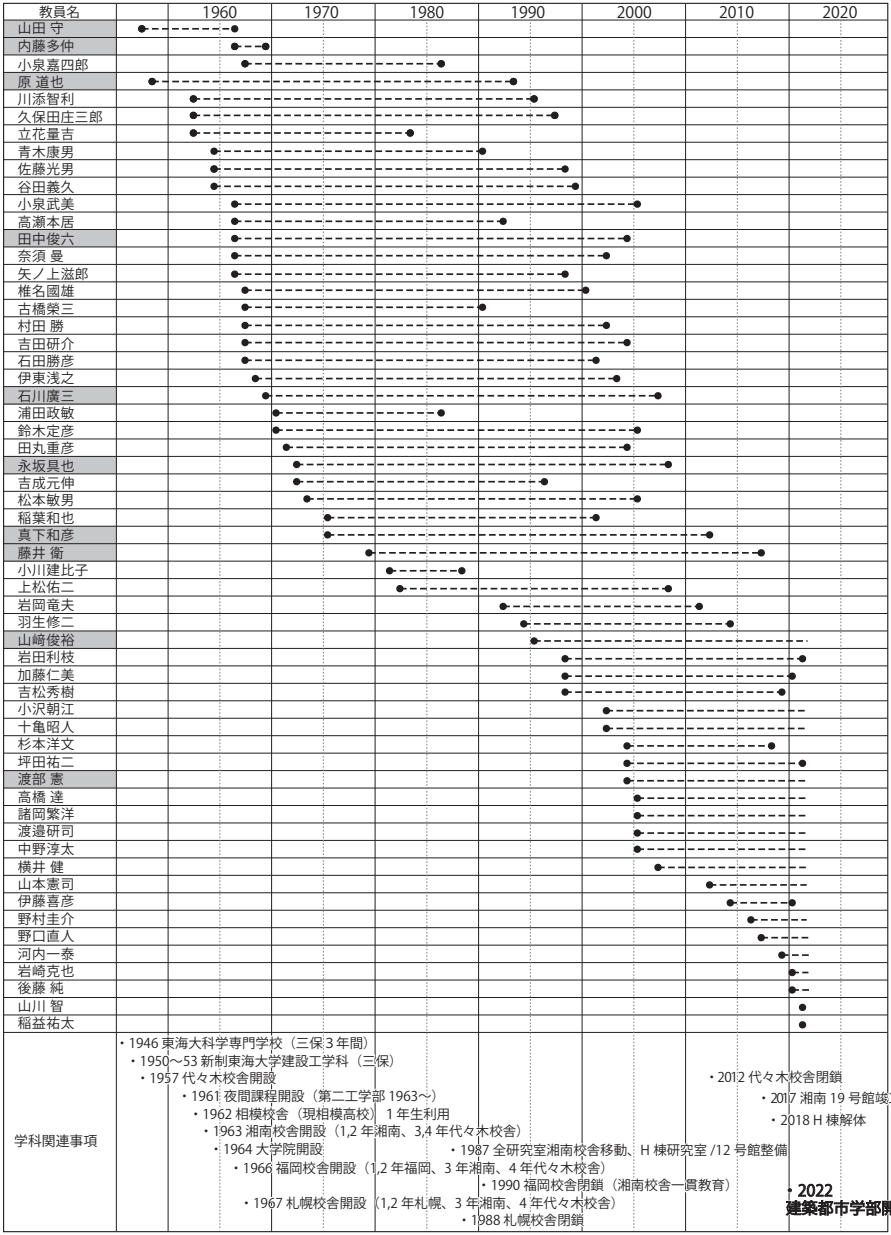
明野岳司（明野設計室）
伊藤州平（81A-）
井上 玄（GEN INOUE）
金子哲也（K-PLANNING）
楠 英恵（ミント・建築スタジオ／2019年度）
佐屋香織（ピークスタジオ一級建築士事務所）
篠崎弘之（篠崎弘之建築設計事務所）
白子秀隆（白子秀隆建築設計事務所）
手塚由比（手塚建築研究所）
冨永哲史（冨永一級建築士事務所）
納谷 新（納谷建築設計事務所）
長谷川栄子（設計室青）
長谷川 祥（香山壽夫建築研究所）
番場俊宏（エイバンバ）
彦根 明（彦根建築設計事務所）
平本 玲（瑛月草雨）
藤田大海（藤田大海建築設計事務所）
森 昌樹（MORIIS ATELIER）
森屋隆洋（MORIYA一級建築士事務所）
山口紗由（メグロ建築研究所）
山下貴成（山下貴成建築設計事務所）

工学系

池嶋千里（K-PLANNING）
宇田衣江（フリー）
合田和泰（蒼設備設計事務所）
小山 珠（アルテス）
武智耕太郎（ジャパンホームシールド）
中江 隆（戸田建設）
中里彰人（システム計測）
白都 滋（東急建設）
前川一郎（戸田建設）

歴代教員と建築学科の系譜

建築学科は、山田守、内藤多仲、原道也らの尽力で教員拡充が図られ、今日の多様な専門分野・科目群と教員構成を有する学科として成長・発展してきました。その系譜を紹介します。



注）歴代主任・学科長

（作成：山崎俊裕・大薮孝治・鈴木裕一）

卒業後の進路

卒業生の就職先は、建設業をはじめ製造業、不動産業と多岐にわたります。
また、教職課程や学芸員課程を設け、資格を取得できる環境も整えています。

卒業生の主な就職先［2019年度、2020年度］

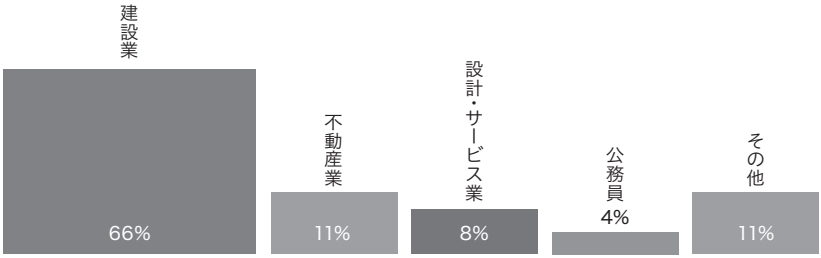
■建設業（ゼネコン、サブコン、住宅メーカー）
鹿島建設、大成建設、大林組、竹中工務店、長谷工コーポレーション、五洋建設、
戸田建設、フジタ、前田建設工業、熊谷組、安藤・ハザマ、西松建設、東急建設、
大気社、関電工、きんでん、新日本空調、東洋熱工業、朝日工業社、大和ハウス工業、
積水ハウス、旭化成ホームズ、セキスイハイム、一条工務店、三井ホーム

■不動産業
大東建託、オープンハウス、三井不動産リアルティ、三菱UFJ不動産販売、
東急コミュニティー、東急リバブル、神奈川県住宅供給公社

■設計・サービス業
NTTファシリティーズ、奥野設計、UG都市開発設計、ユニヴァーサル設計、池下設計、
ヨシザワ建築構造設計、乃村工藝社、高島屋スペースクリエイツ、J.フロント建装

■公務員
墨田区役所、横浜市役所、鎌倉市役所、藤沢市役所、平塚市役所、市原市役所、
栃木県庁

■その他
東日本旅客鉄道、日本郵便、スガテック、トラバース、アサンテ、セブンイレブン、コメリ



編集後記

今回の『東海大建築ブック』は、作品集としては第41号となります。
2020年初頭から2021年9月現在に至るまで1年半以上に亘って、全世界そして日本全土は新型コロナウイルス感染症のため、これまで経験したことがないさまざまな状況に見舞われ、いまだ終息が見通せない状況にあります。本学でも新型コロナへの対応として、新たな遠隔教育・研究活動が模索され、特に建築デザイン演習や実験・実習関連授業では、学生・教職員ともに「遠隔」、「対面」、「両者併用授業」などの運営で、さまざまな試練・試行錯誤がありました。
建築デザイン演習科目や実験・実習関連科目は、2020年春学期はすべて未開講となり、履修セメスターが半期遅れたことから、今回収録された作品集は実質1年半（2019年度春・秋学期と2020年度秋学期）の建築デザイン演習課題をまとめたものとなっています。
表紙は昨年度リニューアルした第4弾を継承するデザインで、2022年度からは建築都市学部が新たにスタートすることから、工学部建築学科として発刊する作品集は今回が最後となります。作品集にはこれまで同様、設計優秀作品のほか、学科カリキュラム、研究室、就職・進学データなどが収められ、建築学科の特長や魅力を感じることができる一冊となっています。今回の作品集の取材や各種イベントなどに遠隔会議システムが活用されている点も特徴といえます。また今回の作品集では、「建築学科学生に、ぜひ行って、見て欲しい都市・集落・建築」をピックアップし、写真紹介する試みを行いました。新型コロナの影響で建築学科恒例の海外研修旅行が2020年と2021年度は実施できませんでしたが、コロナが落ち着いた折には、ここで取り挙げた紹介事例を含め、ぜひ世界・日本各地の都市・集落を実際に訪問し、建築を体験する感動を味わって欲しいと願っています。
私自身が作品集の編集に関わったのは10年以上前になりますが、あらためて1冊の本をつくる楽しさと大変さを経験することができました。この東海大建築ブックが、1人でも多くの高校生・関係者の都市・建築に対する興味・関心を高め、東海大学建築学科を目指すきっかけとなってくれれば望外の喜びです。
また、今回の作品集では、数年前に建学祭でOB・OGを迎えるホームカミングデーのために作成した、「建築学科の歴代教員と建築学科の系譜」を編集し直し、巻末に掲載しています。教職員の世代交代が進んでいますので、今後の継承資料としてご活用いただければ幸いです。
最後なりますが、今回編集を担当くださったフリックスタジオの石田さん、デザイナーの皆様、そして忙しい中、寄稿・情報提供いただいた教職員、OB・OG有志、インタビュー担当の4年生、写真収録支援の院生有志に、この場を借りて深く感謝を申し上げます。

山﨑俊裕（編集委員／教授）

東海大建築ブック 2019-2021
東海大学工学部建築学科作品集 vol.41

2021年11月1日　初版発行
ⓒ東海大学工学部建築学科

編集委員：山﨑俊裕
企画・編集：山﨑俊裕
インタビュー：高橋 達・大渕光佑・金澤里奈・新倉穂香・倉光汐里・須藤有弥・土谷野絵
岩瀬和宏・森 大地・樋口 光
制作協力：岩崎克也・渡部 憲・横井 健・野口直人・渡邉研司・河内一泰・小沢朝江
十亀昭人・山﨑俊裕・大薮孝治・鈴木裕一
写真：山﨑俊裕・野口直人・岩崎克也・渡邉研司・鈴木裕一・原木岳史・難波豪一・中屋美夏・松丸直樹・山本恭平

編集協力：フリックスタジオ（高木伸哉、石田貴子）
アートディレクション・デザイン：黒田益朗、川口久美子
発行：東海大学 工学部 建築学科
〒259-1292 神奈川県平塚市北金目4-1-1　TEL 0463-58-1211
印刷・製本：藤原印刷株式会社

・本書の一部または全部を無断で転載または複製することを禁じます。